

義教の死と
幕威の衰頹

足利義教



下は幕府の意に従はなかつた關東管領足利持氏を討つてこれを滅ぼしたのを始め、しきりに強豪な諸豪族の専横を抑へて再び幕威を伸張した。然るにこのために播磨の豪族赤松滿祐は自ら安んぜず、嘉吉元年義教を弑して兵を擧げたが間もなく誅に服した。これを嘉吉の亂といふ。併しこの後義教の子義勝、義政が相ついで將軍となつたが、何れも幼少であつて次第に豪族權臣の勢が強大になり、幕府の威權は漸く衰へて復盛なるを得なかつた。

參照 尋常小學國史上卷第二十七足利氏の僭上

關東の形勢 關東は古くから源氏の根據地であり、鎌倉は武家政治發祥の地であるから、尊氏は特にその子基氏を關東管領

關東管領の
實力

關東管領の
反抗

關東要地圖



として鎌倉に置き、上杉氏をその執事として幕府の羽翼たらしめたが、その後代を経るに従つて次第に勢力を増し、將軍に倣つて管領は公方と稱し、執事を管領と稱するやうになつた。かくて基氏の孫滿兼の時に及んで大内義弘と呼應して將軍に叛旗を翻さんとして果さなかつたが、その子持氏は遂に自ら將軍たらんこの野心を藏し、永享十一年兵を擧げて幕府に叛くに至つたため、將軍の命により執事上杉憲實等のために滅ぼされた。これを永享の亂といふ。この後關東の實權は全く上杉氏の手に歸し、しばらく管領も絶えてゐたが、將軍義政の時上杉氏は幕府に請うて持氏の子成氏を關東管領とした。然るに成氏は上杉氏を父の仇として

關東管領の
分裂

これと戦ひ、下總の古河茨城縣西南部に走つたので、上杉氏は更に義教の子政知を迎へて關東の主とし、これを伊豆の堀越静岡縣山内に置いた。前者を古河公方と稱し、後者を堀越公方といふ。かくて關東の地は兩公方の對立を見た上、上杉氏も山内扇谷の二家に分れて相争ふこととなり、爲にその形勢收拾すべからざる有様となつた。

參考 關東地方が最も早く幕威が及ばなくなつた所以を考へよ。

應仁の亂 幕府では管領細川勝元と畠山持國が將軍義政を輔けてゐたが、持國の死後勝元が獨り政權を專にし、これに對して山名持豊が宗全と號して勝元と勢を争ふやうになつた。然るに義政は成長の後も政に力めずして徒らに租税を重課し、屢々徳政令を發して良民を苦しめ、奢侈遊樂にのみ耽つてゐたため、幕政は全く權臣の專斷に委ねられ、引續く天災に人民が飢饉



窮乏に苦しんで居ても顧るものもない有様であつた。この頃義政は久しく子がなかつたため、弟の義視を嗣子として勝元を後見としたが、後に妻日野氏が義尙を生んだので、日野氏はこれを將軍に立てようとして宗全に托した。然るに同じ頃管領畠山家及び斯波家にも家督争ひが起つて、畠山義就、斯波義廉は宗全と結び、畠山政長、斯波義敏は勝元に助を求めたので、勝元・宗全の對抗は一層甚だしくなり、義政の制止もその効なく、應仁元年遂に兩派の戦の幕



は切つて落さされた。かくて兩軍各々十餘萬の將士を擁して京都を舞臺に戰陣を張り、文明五年兩派の首魁たる宗全・勝元が相ついで歿し、ついで義政が將軍職を義尙に譲つて後も戰を止めず、前後十一年を経、文明九年に至つて漸く、兵を解いた。この間兩軍の戰は諸將の領地にも及んで、殆ど全國にわたる大動亂となり、幕府の威令は全く行はれなくなつて、諸將はたゞその利害に従つて争鬪を續けたので、社會の秩序は全く破壊し、京都の戰の止んだ後も地方の戰亂は益々激しくなり、各地の豪族は皆獨立して互に相争ひ、愈々戰國の亂世を現出するやうになつた。又この久しきにわたる戰亂のため、京都は見るかげもなき焼野原となり、市民は多く四方に散じ、公家・僧侶等も衣食に窮して地方に流寓するもの少なからず、幕威の失墜に伴つて、朝廷の御衰微も次第に甚だしくなつた。

參照 尋常小學國史上卷第二十八足利氏の衰微。

第十六章 支那及び朝鮮との交通

國民の海外發展 元寇以後も我が商人・僧侶等の支那との往來は依然として絶えなかつたが、それと共に未曾有の外寇を撃退して國民の意氣が大いに擧つたため、この頃から我が國民は大陸の沿岸一帯に亘つて目覺しい大發展を遂げるやうになつた。即ち鎌倉時代の末から吉野朝・室町時代の全體を通じて、主として我が西國の民が北は高麗より南は南支那地方に亘る各地の海岸に至つて貿易を行ひ、その妨げられた際は武力に訴へて侵掠を敢てするに至つたのである。而して彼等の行動は頗る勇壯活潑であつて、至る所その敵を見ぬ有様であつたので、彼の國の人々は倭寇と稱して非常に恐れをなし、彼の國歴代の政

府もその處理には頗る困惑してゐたが、所謂倭寇の中にはこれを利用して掠奪を恣にせんとする彼の地の無頼の亂民が交つてゐることも少くなかつた。吉野朝より室町時代にかけての我が國と支那及び朝鮮との外交關係は、全くこの倭寇を中心に行はれたものであり、朝鮮半島に於て朝鮮が起り、支那に於て明の衰亡したのも倭寇の防禦が主なる原因の一つであつた。

参考 西洋史に於けるノルマンの活動と比較考察せよ。

吉野朝時代の外國關係

吉野朝時代南北爭亂の間にも商人僧侶の大陸との往來は行はれ、倭寇の勢も漸く盛になつたが、足利尊氏は山城の嵯峨京都市西部に天龍寺の建立を企てた時、その資を得るために貿易船を元に遣はした。これを天龍寺船といふ。その後、長慶天皇の朝に至り、支那では元が滅びて明が新たに起つたが、その太祖朱元璋は倭寇の害の甚だしいのに苦しんで屢

々使を遣はして國交を求め、且倭寇を禁せんことを請うた。我が國に於ては、當時九州に居られた征西將軍懷良親王が之に應對せられたが、その國書の文面の無禮を怒られ、吉野朝御衰微の折であるにも拘らず、斷乎としてその要求を斥けられ、時にはその使を長く抑留せられたことすらあつた。高麗も倭寇に苦しむ、後村上天皇の朝以來屢々國書を送つて、その鎮壓を請うたが、足利氏は何等返書を與へなかつた。その後高麗は次第に國力衰退して、後龜山天皇の京都御還幸の年、倭寇の鎮壓に功を立てて衆望を得た李成桂のために滅ぼされた。李成桂は現在の李王家の祖先であつて、國號を朝鮮と號し、國都を京城ソウルに奠めた。

参考 東洋史の明及び朝鮮の興起を参照考察せよ。

室町幕府の對明外交

吉野朝廷以來、明が頻りに國交を求めたのは、入貢の名目で我に貿易を許し、その代償として倭寇を禁

義満の國辱
的外交

明の國書

足利義持

義教・義政
の外交

歴せしめんとするのがその目的であつた。そこで室町時代になるに、義満は貿易の利を得んため、應永八年使を明に遣はして國交を求め、ひたすらその歡心を得るに力めて倭寇を禁じ、外交文書には明の年號を用ひて自ら日本國王臣源道義と記し、その上



明の冠服を着用してその國書に三拜の禮を行ふの卑屈を敢てするに至つた。その後、義持は斷然國交を謝絶してその使を受けなかつたが、義教は再び交通を開いて財政の窮乏を補ひ、義政に至つて

勅日本國王使臣源道義、
尔國王源道義忠賢崇善
上能敬順
天運恭亨朝廷下能祛陰寇盜
肅清海邦王之誠心惟
天知之惟朕知之朕若臨萬方嘉
典氏物同國奉和亦惟尔王能
知朕心尔將王命速至京
師遣王相敬恭使朕朕甚
尔嘉特賜初榮勞仍賜時
果四品尔其受之故勅

五月二十日

永樂通寶

遣明使策彦
歸朝圖

勘合貿易

大内氏の富
強



は義満と同じく卑屈な態度を以つて彼の意を迎へるに汲々とし、遂に財政の困難を訴へて銅錢を乞ふの醜態を演じた。當時の遣明使節は禪宗の僧侶が任ぜられ、その船には朝貢品の外

將軍や大名、寺院等の貿易品を満載して行つたので、その利益は莫大であつた。而して倭寇を禁じた結果、一般の貿易船は明の送つた勘合符を幕府から貰つて彼の地に渡り、若しこれを持たぬものは海賊として貿易を許されなかつた。これを勘合貿易といふ。當時の貿易港は明では寧波と定められ、我が國では兵庫、堺、博多、平戸等が主なるものであつた。而して幕府が衰へてか





らは周防の大内氏が勅令符の授受を掌つたため、貿易の實權を獨占して大いに富強を致した。

参考 足利幕府の外交政策について深く考察批判せよ。

朝鮮との關係 朝鮮も建國以來倭寇の被害に苦しむこと甚しく、屢々使を遣はして國交を求め、その鎮壓を依頼して來たが、その効果もなく、益々猖獗を極めたので、將軍義持の應永二十六年、二百餘艘の大軍を送つて倭寇の根據地を考へられてゐた我が對馬を襲はしむるに至つた。我が國では事の意外に驚いたが、守護宗氏の奮戦によつて直ちに撃退した。その後、朝鮮は大内氏等の西國諸大名の歡心を求め、貿易を盛にして倭寇の鎮壓を圖り、又宗氏と屢々條約を結んで、日本よりの使節は悉く宗氏の仲介を経ることとなり、これ以來宗氏は兩國

外交上特別な地位に立つやうになつた。當時朝鮮の貿易港は釜山浦、蔚山の鹽浦、熊川の齊浦の三港であつて、我が在留民も少くなかつたが、後には釜山浦だけが貿易港となり、宗氏の使館が置かれた。又琉球は、この頃日本と明とに兩屬し、兩國に朝貢してゐたが、我が國では薩摩の守護島津氏がその應對に當たつてゐた。

参考 武士の首領たる將軍・大名、信仰の中心なる寺院等が商利に汲々たるに至りし時代の思想を深く考察せよ。

第十七章 室町時代の文化

時代と文化及び生活 建武中興より吉野朝時代にかけて、公家と武家との接觸が著しくなり、足利氏が京都に幕府を開いた結果、前代には相對立してゐた公家風と武家風の文化が次第に

混合するやうになり、その上應仁の亂以後諸大名が地方に獨立割據し、公家の地方に流寓するものが多く、一般人民が次第に擡頭して來たため、文化に於ける上下都鄙の別が漸く少くなつた。又鎌倉時代の如き武士の質實剛健な風が漸く廢れ、將軍義滿義政などが先んじて平安時代の公家の如き榮華に耽るに至つたために、その風潮は一般にも影響を及ぼし、優雅な公家風と枯淡な禪家の風が武家に取入れられて、淡白瀟洒な趣味が喜ばれるやうになり、戰亂の間にも風流な生活が行はれた。瀟洒たる書院造の家に添へて閑雅なる庭園をつくり、風流なる茶室を設け、その中であつて茶湯・生花等に現世を忘れて楽しむ趣味の生活はこの頃から盛になつたのである。故にこれ等諸藝道の法式も多くこの時代に定まり、日常生活の禮儀作法等も確立されて、何れも現今にその風を傳へてゐる。幽玄な能樂・洒脫なる狂言

の流行もこの時代の特色である。而して戰亂の間には、然るに、かゝる趣味風流の生活に最も徹底したのは將軍義政であつて、彼が東山に銀閣をつくつて東山殿と稱せられたので、美術の上からこの頃を特に東山時代と稱せられる。

參考 鎌倉時代に比較して武士の好尚の變化を考察せよ。

佛教の普及と神道 鎌倉時代

に起つた佛教各宗派は、何れもこの時代に於て益々盛になり、その基礎を確立するやうになつた。



臨濟宗には吉野朝時代に夢窓疎が、出て後醍醐天皇や尊氏の尊信を受け、尊氏はその勸によつて天龍寺を始め諸國に安國寺を建立したのであるが、その弟子義堂絶海は義滿の信任を得て政

眞宗

南禪寺
京都市東山
麓

日蓮宗

蓮如の御文

宗教一揆



治外交の顧問として活動した。京都及び鎌倉のこの派の大寺

に五山の制の定つたのもこの頃であり、京都の南禪寺は五山の上として最も重んぜられた。浄土眞宗では義政の頃蓮如が現れて平易な文章と巧妙な説教によつて士民の間に布教し、中央に本願寺、各地にその別院を置く根據を固めた。その他の諸宗中では日蓮宗の發展が最も

著しく、義政の頃に出た日親は幕府の迫害にも屈せず、京都に多數の寺院を建立するに至つた。

かくて戦國時代に入るや、眞

林分度一七ヶ日無語のあひふ
おいて多層内方とわかれかたを
大略信の史定一とてつるふ
けりあしわわこれすくふ
さりあしわわこれすくふ
信つていせんふりしつて
さりあしわわこれすくふ

唯一神道の
創唱

五山文學

公武の學者

國文學

宗の一向一揆、日蓮宗の法華一揆の如きは武力を以て大名に對抗するやうになつた。又我が國古來の神祇の信仰も、後土御門天皇の頃に出た吉田兼俱カネキトの唯一神道の創唱によつて獨立した宗教の形をさるに至り、近世に於ける神道諸教派の端を開いた。

参考 宗教各宗派が普及發展した所以を時代の趨勢より考察せよ。

學問文學の新潮 戦亂のつゞいた時代であるから、學問文學

は主として禪宗僧侶の手に維持せられたが、殊に臨濟禪僧の間に支那風の詩文が流行した。これを五山文學と稱し、義堂、絶海はその名手である。尚僧侶の外、公家には前に北畠親房、後には一條兼良カネヨシが出て、何れも和漢の學に通じ、殊に親房は戦陣の間にありながら神皇正統記を著して我が國體の精華を宣揚した。又武家では關東管領初めは管領の執事上杉憲實が金澤文庫を修理し、足利學校足利市を再興して好學の聞えが高かつた。國文學に於ては

足利學校
足利市



高砂
橋本

参考一 連歌の一例

人やいつ春の訪ひ来る宿の梅 (專順)
今朝軒近き鶯の聲 (宗祇)
山霞む陰に昨日の雪消えて (紹永)
ぬるむ水にや煙すくなき (專順)

和歌が衰へて歌集の勅撰もなくなり、連歌がこれに代つて發達し、義政の頃宗祇によつて大成された。又能樂の流行と共に謠曲の名作も多く現れ、義滿に仕へた觀阿彌世阿彌義政の寵を得た音阿彌等の作が名高い。前代から行はれた軍記物語には太平記があり、隨筆としては兼好法師の徒然草が最も著名なる作品である。

今をぬり暮衣くわも行末え
いそぎ 棟をい九形來後
阿彌の空乃棟まもるを
我らあつたあつたあつた
能ふ此度思ひ立非る表り
又うさ決てかとも徳州高砂の
さうなも一見さりやせあ



雪舟筆山水圖

狩野元信
筆山水圖



(以下略)

参考二 五山文學の一例

良宵邀月意何長、山作賓筵江作觴、
只願千秋友不遺、清光鎮滿主人堂、

(絶海)



美術工藝の發達 義滿の奢侈榮華

と義政の數寄風流は、この時代の美術
工藝の發達に頗る大なる刺戟となつ
た。而して繪畫には水墨淡彩を主と
する宋元の畫風が傳へられて大和繪
を壓倒し、義滿の頃に如拙・周文があらはれ、義政の頃に至り周文
の弟子雪舟がこの派を大成して畫聖の名を残した。又大和繪
も義政の頃土佐光信が出て復興せられたが、更に狩野元信は宋
元の畫風に大和繪の長所を併せて新たに狩野派を開き、永く日

建築

鎌倉
京都市東山
龍安寺



本書の主流となる基礎をつくつた。建築に於ては新たに禪宗建築の影響を受けた書院造が住宅として行はるゝに至り、その様式は現代に及んであるが、金閣・銀閣はこの時代の建築の双壁であり、又茶室の建築も創められた。書院造の住宅

彫刻

室町時代の
京都龍安寺
相阿彌の作

に伴なふ閑寂幽雅な庭園の設計には、義政に仕へた相阿彌が最も有名である。彫刻は佛像が衰へて工藝として彫金が發達し、義政に仕へた後藤祐乗が名工の名高く、能樂の流行と共に能面の製作も盛になつた。又茶湯の



又茶湯の

焼物・漆器

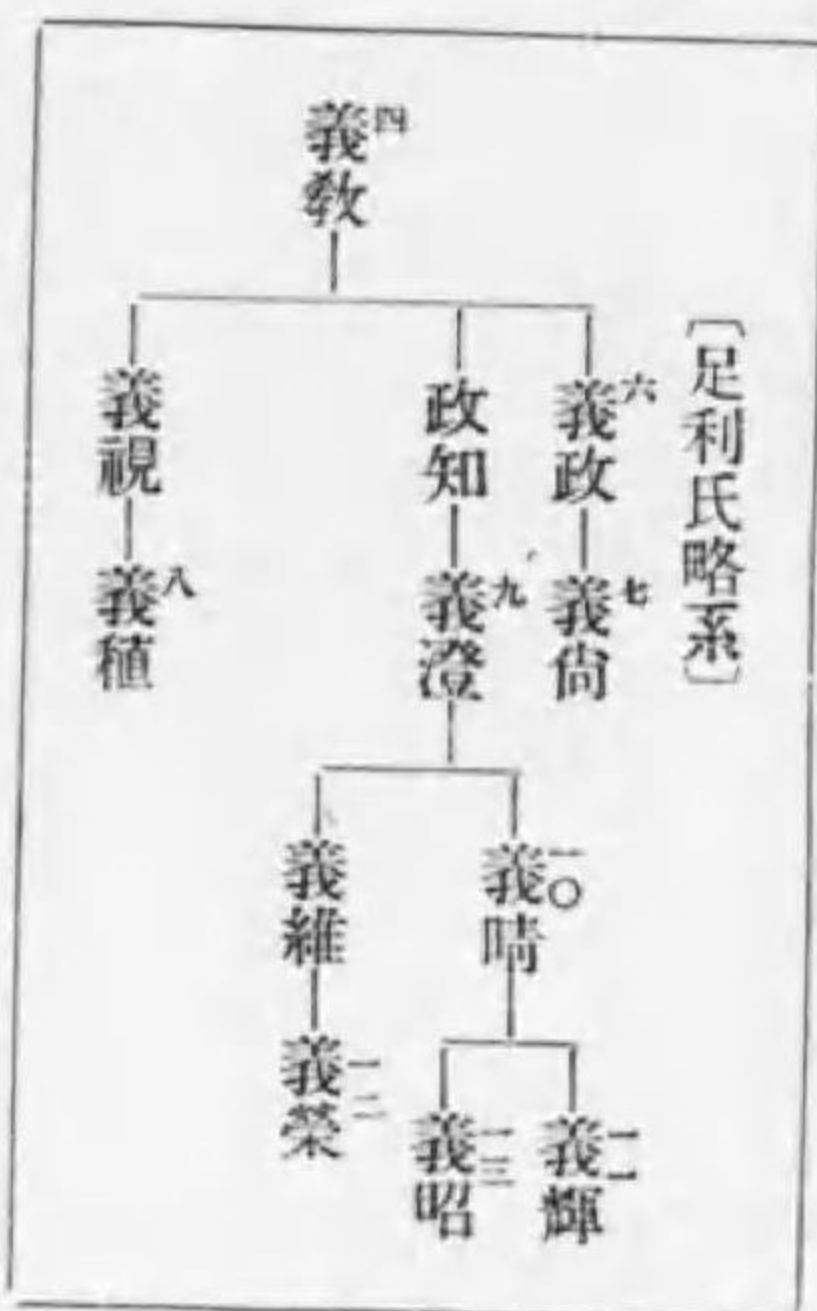
幕府権臣の
横暴

流行に従つて陶磁器の製造が盛になり、後柏原天皇の頃明に渡つた祥瑞五郎大夫は、歸朝の後肥前の伊萬里に窯を興し、漆器・時繪等の技術も著しく進歩してこの時代の重要な輸出品となつた。

参考 東洋史宋元の美術を参照せよ。

第十八章 戦国時代の勢

時代の勢 應仁の亂後幕府の勢は益々衰へ、義政の子義尚がよく政治につとめてその回復を圖つたが、早生してその志を達するこゝが出来なかつた。ついで義植が將軍となるや、細川政元勝元のが專横を極め、義植を逐つて義澄を擁立し、義植が周防の大内義興に頼つて再び將軍となるや、細川高國政元のが勢を得て再びこれを逐ひ、義晴を將軍職につけた。かくの如く細川氏



將軍に擁立するに至った。かくて幕府の實権は次第に下に移り、將軍は全く虚位を擁する有様となつて、その命令は僅かに京都附近に及ぶに過ぎないやうになつた。かゝる権力下向の風を下剋上ゴクジョウと稱する。而してかゝる風潮は當時一般に盛であつて、各地の大名は何れも幕威に従はず、獨立割據して領土の侵略と權力の爭奪にのみ熱中するに至り、全國の統一は全く失はれた。而も諸大名の中でも名門舊家は次第に滅んで、或は家臣に横領され、或は無名の浪人に國を奪はれる有様であり、更に庶民

も武士に反抗して一揆を企つるものあるに至り、社會の秩序は全く破壊せられて、たゞ弱肉強食の實力のみの時代となつた。而してかゝる状態が室町幕府の季世約一百年の間繼續したので、この間を戰國時代と稱する。

参考 東洋史に於ける戰國時代と比較考察せよ。

東國及び甲信越の形勢 關東に於ては既に應仁の亂に先だつて古河堀越兩公方の分裂、扇ヶ谷・山内兩上杉氏の對抗を見たが、更に古河公方家が分裂して小弓御所コユキミヤが出來、安房の里見氏がこれを援くるに及んで紛争は益々甚だしくなつた。然るに駿河駿河縣の今川氏の食客伊勢長氏は、關東分裂の形勢を窺つて延徳三年堀越公方を滅ぼして伊豆伊豆縣を取り、北條早雲と稱して、後更に小田原小田原町を奪つて相模相模縣を従へ、次第に關東に勢力を張るに至つた。早雲は全く家柄なくして一躍大名とな

關東地方の
征服

北條早雲



つた戦國時代の群雄の魁をなしたものである。而してその子氏綱は進んで武藏東京府埼玉縣を略し、更に下總の國府臺千葉縣市川町に里見氏を破つて小弓御所を滅ぼし、孫氏康は河越市川越に古河公方及び兩上杉の軍を破つて扇谷上杉氏を滅ぼし、つゞいて

北條氏康

小田原の繁榮

山内上杉氏を越後に奔らせ、古河公方家を滅ぼしたので、關東地方の大部分を統一するに至つた。而も北條氏は早くより最も民政に留意したので、人民よく悦服し、その城下小田原は繁榮なる都市となり、



上杉謙信の
崛起

上杉謙信



鎌倉に代つて關東の中心となつた。關東の北に接する越後新潟縣は古く山内上杉氏の領であつたが、その家臣長尾氏が勢力を占め、景虎に至つて最も強く、北條氏に逐はれた上杉憲政が來つて保護を求むるや、上杉氏を稱し、出家して名を謙信と改め、

武田信玄の
勢力

主家に代つて關東の回復を志し、屢々兵を出して北條氏康と戦つた。又甲斐山梨縣には源氏の一族武田氏が據つてゐたが、この頃に

至り、晴信入道信玄が國內を統一し、更に信濃長野縣を侵略して村上



戰國時代群雄割據圖



今川氏と織田氏

陸奥の伊達氏

三雄の鼎立

義清等を逐つた。義清は越後に奔つて上杉氏に援を求めたので、謙信は兵を信濃に出だし、弘治元年より川中島長野市に信玄と戦ふこと數回に及んだ。而して謙信はこの後北陸の大部分を従へ、信玄は關東にも兵を出して北條氏と戦つたので、北條・上杉・武田の三氏は東方に鼎立して覇を争ふことゝなつた。又奥羽の方面にも多數の豪族が割據して互に相争つてゐたが、伊達氏の勢力が最も強大であつた。

參照 尋常小學國史上卷第二十九北條氏康
同上 第三十上杉謙信と武田信玄

東海及び近畿の形勢 東海地方では足利氏の一族たる今川氏が強く、義元に至つて駿河・遠江静岡県の兩國を領有し、更に三河愛知縣の松平氏後の徳川氏を従へて勢を振つてゐたが、これに隣る尾張愛知縣には管領斯波氏の陪臣織田氏が信秀に至つて勢つよく國

戰國時代群雄割據圖



三雄の鼎立

陸奥の伊達氏

今川氏と織田氏

義清等を逐つた。義清は越後に奔つて上杉氏に援を求めたので、謙信は兵を信濃に出だし、弘治元年より川中島長野市に信玄と戦ふこと數回に及んだ。而して謙信はこの後北陸の大部分を従へ、信玄は關東にも兵を出して北條氏と戦つたので、北條・上杉・武田の三氏は東方に鼎立して覇を争ふことゝなつた。又奥羽の方面にも多數の豪族が割據して互に相争つてゐたが、伊達氏の勢力が最も強大であつた。

參照 尋常小學國史上卷第二十九北條氏康

同上 第三十上杉謙信と武田信玄

東海及び近畿の形勢 東海地方では足利氏の一族たる今川氏が強く、義元に至つて駿河遠江靜岡の兩國を領有し、更に三河愛知の松平氏後の徳川氏を従へて勢を振つてゐたが、これに隣る尾張愛知には管領斯波氏の陪臣織田氏が信秀に至つて勢つよく、國

今川義元の
敗死
京都附近の
小豪族

一向一揆の
活動

山陰の尼子
氏

内を統一して東の方三河の松平氏を壓迫してゐた。かくて永
祿三年義元は京都に上つて天下に號令せんこの野心を懷き、大
軍を率ゐて尾張に入つたが、信秀の子信長の奇襲に遭つて桶狭
間名古屋市東南方に敗死したので、その勢急に衰へた。又尾張に隣る美濃
縣岐阜には齋藤氏が起つて織田氏と争ひ、越前縣福井には朝倉氏が
勢力を張り、近江縣滋賀には淺井氏が最も盛であつたが何れも大
勢力をならす、近畿地方に於ても注目すべき豪族の興起を見な
かつた。たゞこの間にあつて一向一揆は石山市大阪の本願寺を
中心とし、各地の信徒と相應じて勢力頗る強く、加賀縣石川の富樫
氏はこのために滅亡するに至つた。

參照 尋常小學國史下卷第三十三織田信長

中國・四國・九州の形勢 中國に於ては京極氏の家臣尼子氏が

出雲縣島根を中心として山陰に覇を唱へ、山陽に於ては周防縣山口

山陽の大内氏

山口の繁榮

大内義隆



毛利元就の
興起
毛利元就
毛利元就



の舊族大内氏が九州北部にも亘つて勢力を張り、殊に義興以來の外國貿易によつて富強を致し、その城下山口山口市は小田原と東西相對して繁華を爭ふ都市となり、一時は文化も大に榮えた。然るに義隆義興の子が勢に乗じて榮華風流に耽るやうになつたので、遂に天文二十年家臣陶晴賢（とへんけん）に弑せらるゝに至つた。こゝに於て大内氏に從屬してゐた安藝廣島縣の毛利元就は、晴賢の罪を鳴らして弘治元年これを嚴島廣島縣嚴島町に伐つて敗死せしめ、大内氏の舊領を收めて山陽の一大勢力となり、そ

四國の長曾我部氏

九州の島津氏

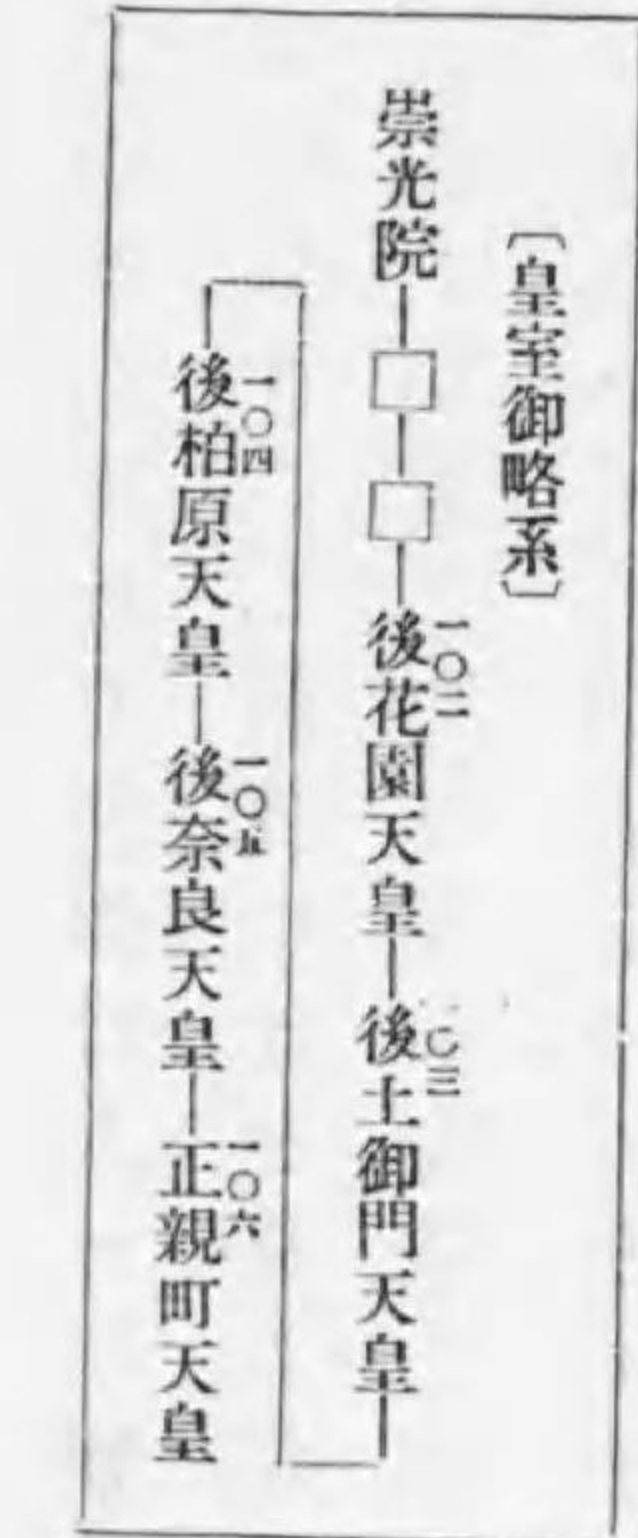
皇室の式微

皇室御略系

の後久しく尼子氏と戦つてゐたが、遂にこれを滅ぼして山陰・山陽十餘箇國を領するに至つた。又四國に於ては土佐高知縣に起つた長曾我部氏の勢が最も強く、元親に至つて殆ど全島を從へ、九州では豊後大分縣の大友、肥前佐賀縣の龍造寺、薩摩鹿兒島縣の島津氏等が最も勢強く、互に相争つてゐたが、島津氏が漸く盛になり、義久に至つて九州の大部分を從へるに至つた。

參照 尋常小學國史上卷第三十一 毛利元就

皇室の式微 幕府の威權は全く地に墜ち、諸大名は領地の爭奪をのみ事とするに至つたから、皇室の御料所や公家の領地は



皆地方豪族の横領する所となり、畏くも朝廷に於かせられては皇居は荒廢に委せられ、種々の儀式も擧げ兼ねる

ここ多く、日々の供御にさへ事缺く御有様となり、その御式微の甚だしきこと前後に比を見ぬ所であつた。併しかゝる御式微の際にも、御歴代の天皇は常に皇室の尊嚴を保たせられて、濫りに官位を授け給ふこともなく、日夜人民のために叡慮を惱ませ



られ、後奈良天皇の如きは疫病流行に宸襟を惱ませられ、御祈禱のため般若心經を書寫せしめられた奥書の中に
朕爲民父母、德不能覆、甚自痛焉
と仰せられた。かゝる有様であるか

ら地方に流寓する公家も少くなかつたが、三條西實隆・山科言繼等はしきりに豪族の間を勸説し、御用度の獻納、御料地の復興等、王事に勤むべきを説き、身命を塔して奉仕したので、士民の間に金穀を獻納するものも少なからず生じた。後柏原天皇の即位



むる一因となるに至つた。

式が本願寺實如蓮子如の獻金によつて、踐祚の後實に二十二年を経て漸く行はれ、後奈良天皇は十年を経て大内義隆その他諸大名の獻金により、正親町天皇は毛利元就の獻金によつて行はれた如きはその一例であり、皇居の修理も大内・毛利・織田等の諸氏によつて屢々行はれ、伊勢三縣重慶光院の清順尼は諸國の寄附を募つて伊勢神宮を造營し奉つた。かくて皇室の式微はかへつて皇室と地方士民とを直接接觸せしめて、尊王思想を盛なら

參照 尋常小學國史上卷第三十二後奈良天皇

參考 畏き叡慮ミ士民の勤王を窺ひ得る和歌一二

治めしる我が世いかにミ浪風の八十島かけてゆく心かな

(後柏原天皇)

すべらぎの御こころには武夫も従はしめよ天地の神

(山科言繼)

第十九章 西洋人の渡來と西洋文化の輸入

西洋に知られた我國

西洋人の東洋來航

ポルトガルとイスパニヤ

西洋人の來航 西洋に我が國の存在が知られたのは、元の忽必烈に仕へたイタリヤ人マルコポーロが歸國の後、東洋見聞録を著し、黄金國ジパングとして紹介したのが最初である。室町時代になり、西洋人が東洋に到る新航路の發見に努めた際、彼の目的地は印度支那及び我が國であつた。かくてポルトガル人は十五世紀の末、阿弗利加の南端を廻つて印度に至る航路を發見し、次いでイスパニヤ人は南亞米利加の南端を迂回して世界一周に成功するや、兩國人の東洋進出は漸く隆盛となり、ポルトガルは印度のゴアを取り、更に明から澳門を得て東洋貿易の根據地とし、イスパニヤは呂宋、フィリッピン群島を占領し、マニラを根據地とし、

ポルトガル船の渡來 (1492年)

地としてポルトガル人と覇を争ふに至つた。天文十二年ポルトガル船が初めて種子島鹿兒島縣に漂着して以來、兩國の船は漸く我が國にも來朝するやうになつた。我が國では當時彼等を南蠻人と稱してゐたが、彼等の與へた影響の最も著しいものは外國貿易の發達と切支丹の傳播である。

參考 西洋史の新航路の發見、諸國家の興隆と植民地經營、東洋史の西力東漸等を参照せよ。

外國貿易の發達

彼等の齎した西洋の器物は、何れも我が國に於て極めて珍奇であつたために非常に歓迎されたが、殊に戰國の際にて鐵砲の傳來は最大の刺戟であつた。そこで西國の諸大名は南蠻人の貿易船を争つて歓迎し、薩摩鹿兒島縣の鹿兒島、坊津、豊後大分縣の大分、肥前長崎縣の平戸、長崎等は次第に繁華なる貿易港となり、殊に長崎の如きは一漁村より忽ち數萬の人口を有

貿易港

貿易船の往
來

する都市となつた。當時の貿易船は季節風を利用して往來し、南支那或ひは南洋の根據地から夏期來航して冬期歸航し、我が

鐵砲の輸入
とその影響

平戸圖



に大影響を及ぼし、次第に輕快なる甲冑、團體的戰術、大規模なる城郭の出現を見るやうになつた。當時の輸入品の名は現今の

國に滞在すること約半年に及ぶを常としたのである。貿易品中最も珍重された鐵砲は、最初ポルトガル船の種子島漂着の際に傳へられたが、それより忽ち四方に弘まり、既に武田信玄は川中島の戰にこれを用ひ、織田信長は長篠の戰に鐵砲隊を第一線に置く戰法を採るに至つた。このため戰爭の方法や城郭の築造

國語中にその面影を留めてゐるものが少くない。

參考 ポルトガル、イスパニヤ語の我が國語になつてゐるものゝ一例。

Castella—カステラ Tabaco—煙草 Saraca—更紗 Carta—歌留多

Zumboa—朱樂 (以上ポルトガル語より)

Medias—莫大小 Capa—合羽 (以上イスパニヤ語より)

切支丹の傳播 この頃歐羅巴では、宗教改革の反動として、ロ

ーマ法王を擁護する耶蘇會が起つて盛

Jesuit order

に活動してゐたが、東洋の植民地では、そ

の創立者の一人であるイスパニヤ人フ

ランシスコ・ザビエルが熱心に布教に

Francisco Xavier

従ひ、天正十八年遂に我が國に來朝した。

彼は初め薩摩に來て布教の許可を得、更

に山口・京都・大分等を遍歴してその教を



切支丹の傳
來

ザビエル

切支丹傳來
の由來

ローマ遣使
伊東滿所

信長の保護
獎勵

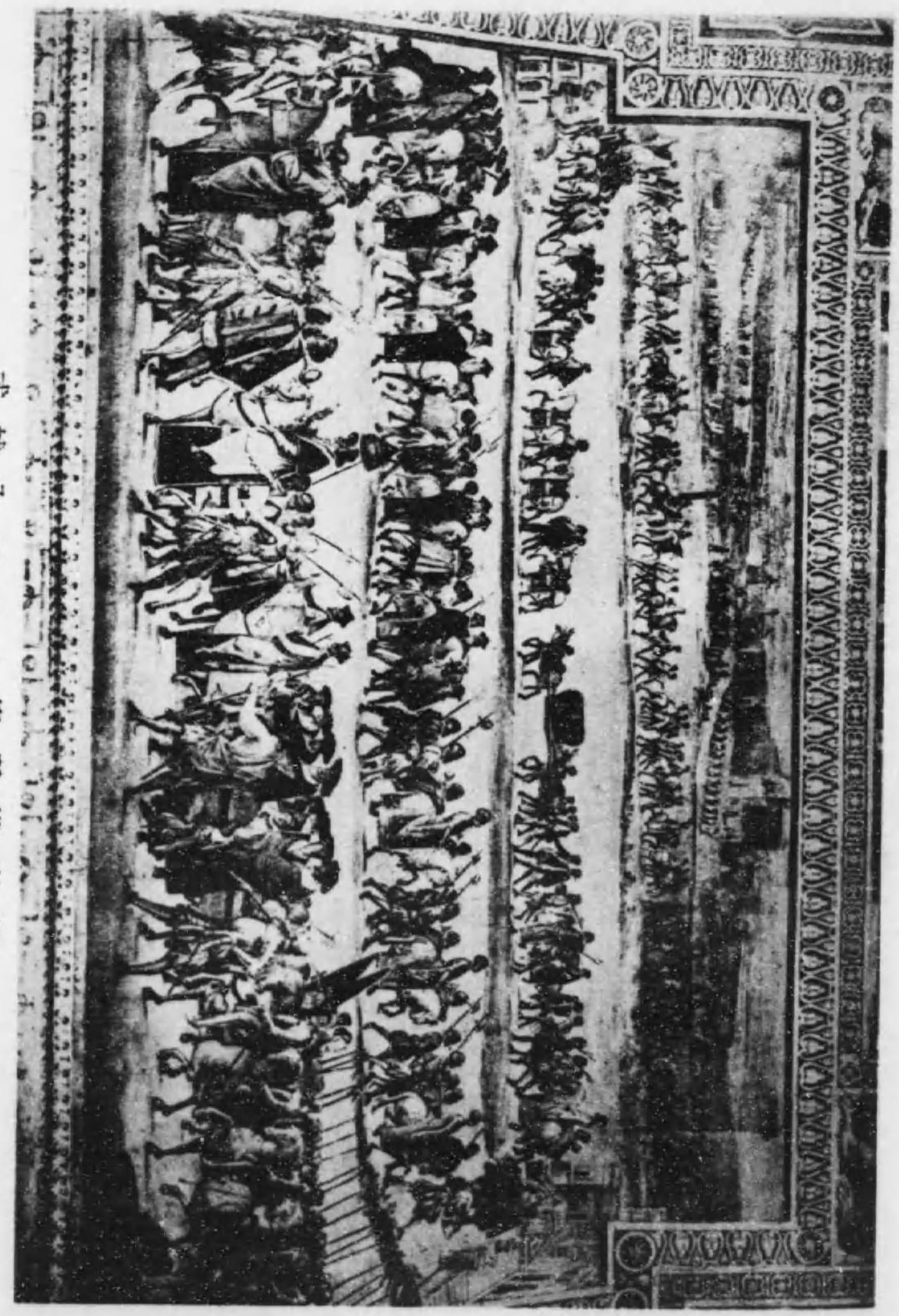
ローマ字の
印
細川忠興
大友宗麟
黒田如水

ローマ遣使



傳へたが、その後引續き宣教師の
來朝する者少なからず、且西國の
諸大名は貿易の利を得んがため
に彼等を優遇したので、九州より
中國・近畿に互つ
て弘まり、大名の

この教に歸するものも生じた。織田信長は鐵
砲を初め西洋の文物に注目し、切支丹をも保護
して京都・安土等に會堂を建てさせた、め、その
信徒は益々増加し、天正十年には全國の信徒十
五萬に達したと傳へられる。この年大友宗麟・
大村純忠・有馬晴信の諸侯は宣教師の勸により、
伊東滿所等を使ひしてローマに遣はしたが、彼



伊東滿所等入城式

切支丹の影
響

秀吉の禁教

等はイスパニヤ國王フィリップ二世及び法王グレゴリー十三世に拜謁し、至る所非常な優遇を受けて八年の後に歸朝した。Philip II Gregory XIII當時我が國ではこのローマ舊教を切支丹と呼び、その宣教師を伴天連會堂を南蠻寺と稱した。彼等は布教に利するため宗教書・文學書・辭書等の編纂や翻譯を試み、後には出版されたものも少くない。然るに切支丹信徒の中には我が國の神佛を排斥して社會の平和を紊すものが多く、且彼等の布教が國土を侵略する手段であることも傳へられたため、秀吉は天正十五年切支丹の禁令を發し、宣教師を逐ひ、會堂を毀つた。

參考 西洋史の宗教改革を参照せよ。

第二十章 織田・豊臣二氏の統一

其の時代の文化

天下統一の氣運

各地に獨立割據した群雄は互に弱肉強食の争を重ねた結果次第に北條・上杉・武田・今川・織田・毛利・島津・長曾我部・伊達等の諸氏によつて地方的に統一されるやうになつたが是等の諸雄は多く京都に上つて天皇を奉じ將軍を擁して天下を統一しようとするに至つた。かゝる氣運の魁として先づ上京を企てたのが今川義元であつたが桶狭間に敗死して雄圖を挫折し、これに代つて織田信長が第一に上京に成功することゝなつた。信長は桶狭間の戦の後、三河愛知縣の徳川家康を味方として東方に備へ、美

地方的統一
と諸雄の上
京策

信長朱印



信長の上京
二二二八

織田信長



濃岐阜縣の齋藤氏を滅ぼして岐阜に移り、永祿十年正親町天皇から御料所の回復を命ぜられ、足利義昭から幕府の復興を託されたので、翌年遂に上京し、義昭を將軍に擁立し、上皇室の尊嚴を回復し奉り、下市民の生活を

安土城址
室町幕府の
滅亡
二二二八

保護して、久しく荒廢と不安の中にあつた京都の面目を一新した。續いて淺井・朝倉兩氏の軍を姉川滋賀縣米原町の北に破り、比叡山を焼いて僧兵を全滅せしめ、天正元年には信長の勢力を忌んでこれを除かんとした義昭を逐つたので、室町幕府は義滿以



近畿附近の
平定

來十三代約百八十年で名實共に滅亡した。この年又信長は淺井朝倉の兩氏と戦つてこれを滅ぼしたが、次いで伊勢長島三重縣東南隅の一向一揆を平げ、更に攝津石山本願寺後の大阪城の地を攻め、天正八年勅命によつて漸く開城せしめた。

參照 尋常小學國史下卷第三十三織田信長

信長の安土
建築

諸雄の上京運動と信長の最期 信長は近畿附近の平定を行ふと共に着々天下統一の業を進め、既に天正四年近江の安土滋賀縣安土町に宏莊な城を造つてその本據としたが、この間に今川氏を

武田氏の上
京運動
三方ヶ原・
長篠位置圖



滅ぼして駿河遠江靜岡縣に進出した武田信玄も愈々上京を企て、元龜三年に至り大軍を率ゐて遠江に入り、三方ヶ原濱松市北方に徳川家康を破り、進んで三河に入つたが、惜しくも病んで歿した。然るにその子勝頼亦父の志をついで天正三年再び三河に

長篠合戦圖

上杉氏の
上京運動

信長の最大
領城圖

毛利氏の策
動



入り、長篠豊橋市北方に織田徳川兩氏の軍と對戦したが大敗して歸國し、その後家運次第に傾いて天正十年信長に攻められて滅亡した。武田氏と長く覇を争つてゐた上杉謙信も亦早

くから天下統一の志を有し、天正六年上京を企てたが病に倒れて挫折し、その養子景勝は内訌のために次第に勢力を失つた。中國に覇を稱してゐた毛利氏は、元就の孫輝元に至つて益々強く、屢々足利義昭・石山本願寺を援け、



本能寺の變
(二四二)

武田上杉等の諸氏に呼應して信長に對抗してゐたので、信長は羽柴秀吉に命じてその經略に従はせてゐた。かくて秀吉は天正十年備中高松城岡山市西北方を圍み、輝元亦大舉して來攻した。め、信長は自ら援けに赴かうとして京都に入り、本能寺に假泊したところ、突然彼に私怨を懷いてゐた部下の將明智光秀のために襲はれ、遂に自及して果てたので、その大業も室町幕府滅亡以來僅か十年にして挫折してしまつた。

參照 尋常小學國史下卷第三十三織田信長

秀吉の勢力
確立

豊臣秀吉の天下統一 本能寺の變を聞いた秀吉は、直ちに毛利氏と和して急遽兵をかへし、山崎京都市西南方の一戦に光秀を討滅して主仇を復し、その善後の處置にも率先して當たつた。め、自ら遺臣中に於て最も優越した地位を占めるに至つた。そこで織田氏の宿將等はこれを喜ばず、翌年信長の三子信孝を擁して兵

豊臣秀吉



を擧げたが、秀吉は柴田勝家を賤ヶ嶽滋賀縣米原町北方に破つて後これを滅ぼし、信孝を自及せしめて益々その勢力を確立した。ついで天正十二年に至り、徳川家康が信長の次子信雄と結んで兵を擧げたので、秀吉はこれと尾張小牧山名古屋市北方に對陣し、別軍は家康の本據三河を衝かんとして

信長の遺業
繼承

賤ヶ嶽・小
牧山位置圖

長久手名古屋市東北方に敗れたが、やがて和を講じて織田・徳川兩氏を従へ、信長の天下統一事業は全く秀吉に繼承されることゝなつた。これより先、秀吉は既に石山本願寺跡に宏壯堅固な大阪城を築いて、天下に號令する本據とし、城下に將士の邸を設け、諸方の商人を移住せしめて大阪が後世大都市た

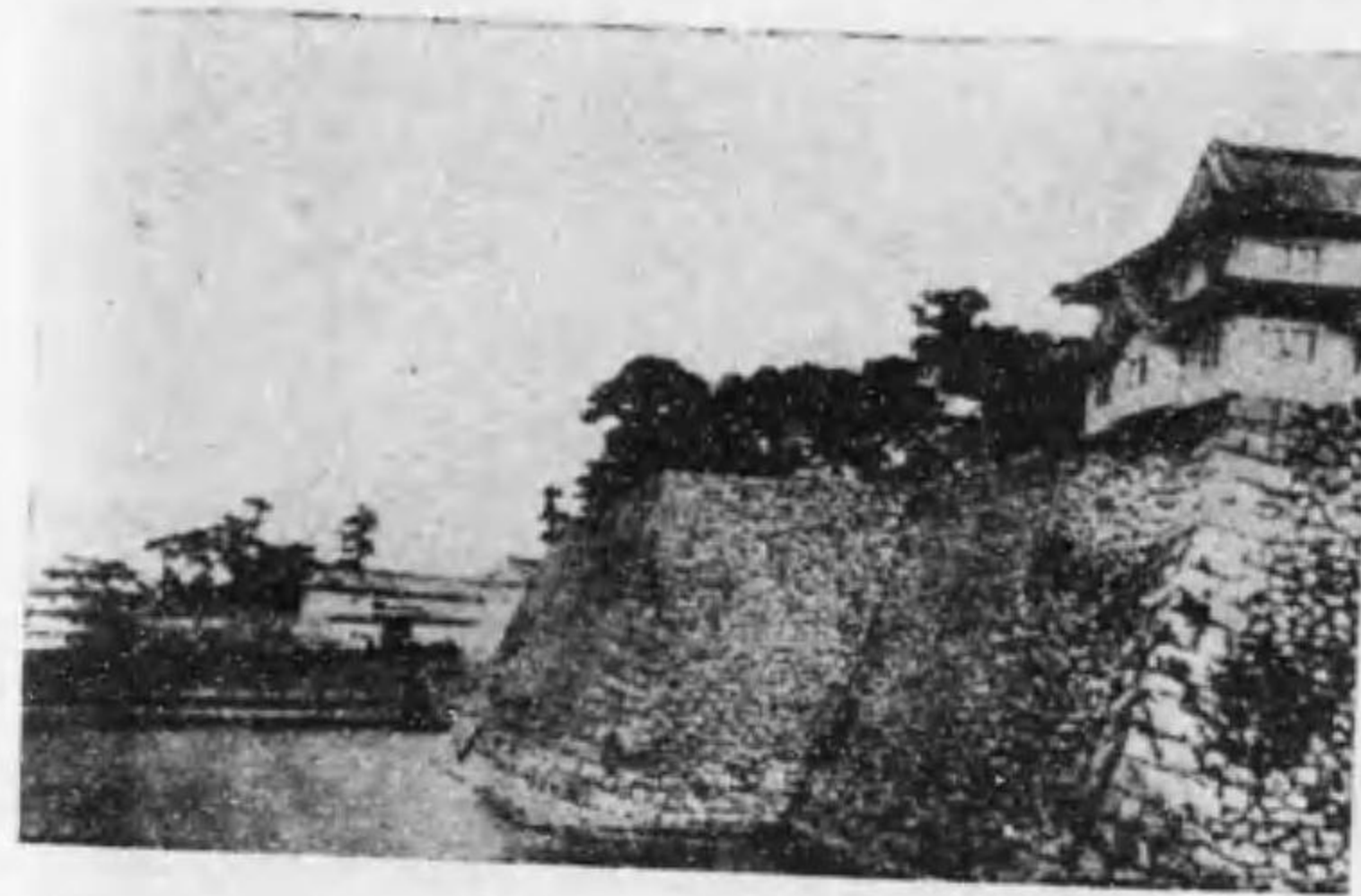


秀吉の花押
と朱印

小牧山模型

大阪城

天下統一の
完成
(二二五〇)



るの基を固めた。
かくて秀吉は着々
統一事業の歩を進
め、天正十三年長曾
我部元親を攻めて
四國を平げ、上杉景勝を降
して北陸を定め、十五年島
津義久を打つて九州を従
へ、十八年北條氏を小田原
に攻めてこれを滅亡せしめ、この間に伊
達政宗を始め、奥羽の諸氏が來降したの
で、天下は全く秀吉に歸し、應仁の亂以來
百二十餘年の戦亂も漸く鎮定するに至



安土桃山時
代

秀吉の尊王

孝隆天皇

つた。信長の時代を安土時代と稱するに對して、秀吉の時代は
その晩年に居城を構へた山城伏見山京都市南部を後世桃山といふに
因んで一般に桃山時代と呼ばれる。



參照 尋常小學國史下卷第三十四豐臣秀吉

秀吉の政治外交 秀吉も勤王の志が篤く、力を盡くして種々皇室の御式微を回復し奉り、天下を統一して後も幕府を開かず、自ら朝臣の一人として政に與り奉つたので、朝廷もその功を嘉せられ、後陽成天皇第七代は武士として前例なき關白に補せられ、更に太政大臣に任じ、新に豐臣の姓を賜はつた。天正十六年、秀吉の邸宅聚落第への行幸の如きは、君臣親和の有様と秀吉尊王の精神を最もよく示したものである。かくて秀

秀吉の外交
策の影響

秀吉の墓
京都市阿彌
陀ヶ峯

美術工藝の
特色



大軍を出征させ、半島南部を經營せしめたが、翌年秀吉の薨去によつて雄圖中絶の止むなきに至つた。併しこの壯舉のために國民の意氣は大いにあがり、秀吉の証明と共に企てた印度・呂宋・臺灣等への入貢勸告も成功しなかつたけれども、國民の南洋方面への發展は大いに刺戟されるやうになつた。

參照 尋常小學國史下卷第三十五豐臣秀吉

同上第三十六豐臣秀吉つゞき

安土・桃山時代の文化 織田・豊臣兩氏の

統一によつて國內が平穩に歸したので、桃山時代に入るや文化は急速の進歩を見るに至つた。特に美術工藝の發達著しく、天下統一と海外發展の雄大なる時代の傾向

飛騨關
京都市西本
願寺

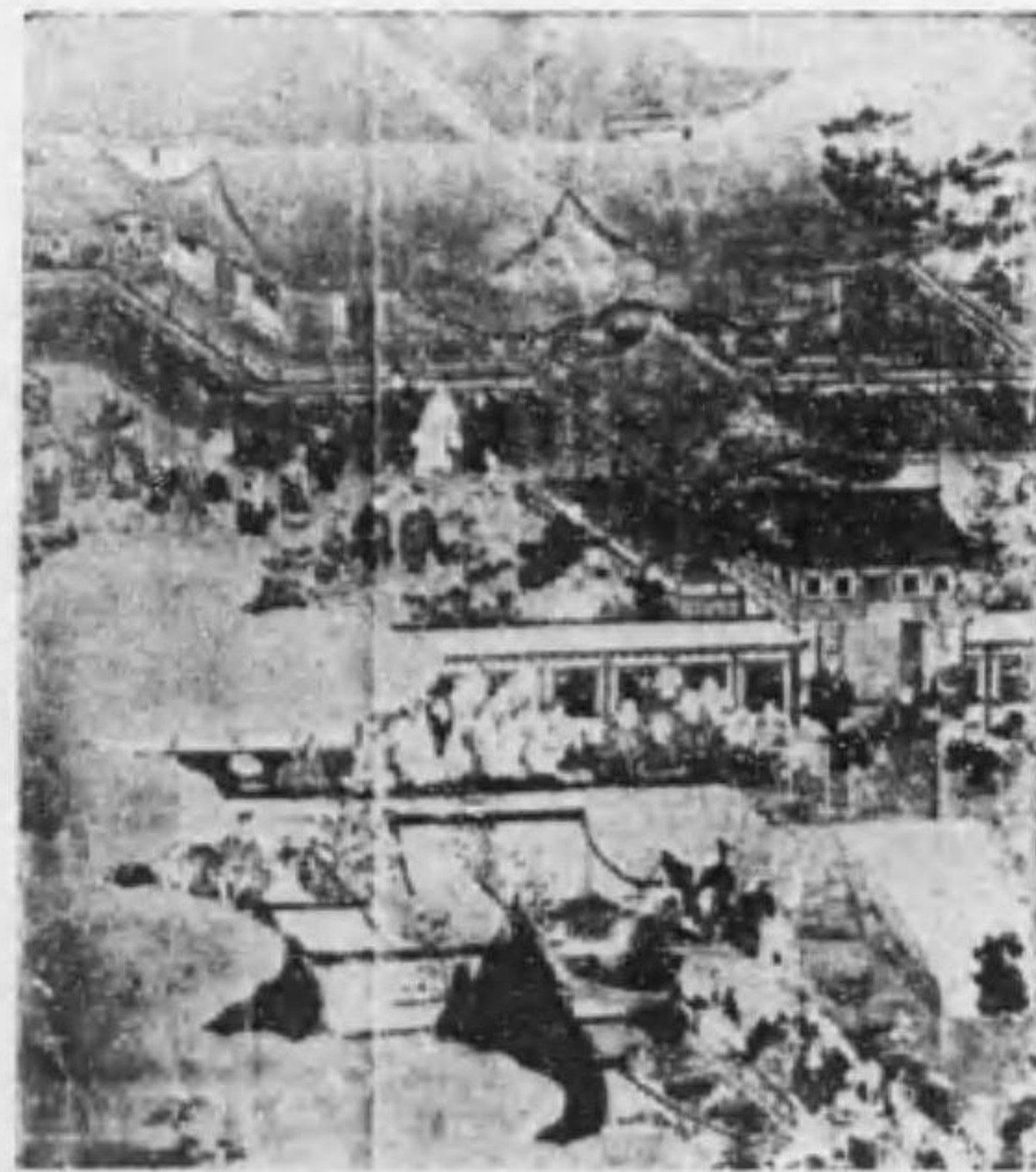
建築中心の
美術

豊國神社圖



と共に、秀吉が寛濶にして豪華を好んだ、めに、豪放華麗なる特色が一般に著しかつた。即ち建築に於ては信長の安土城を魁として秀吉の大阪・伏見の兩城、聚樂第の如き大城郭の發達を見、而も、その裝飾として雄麗豪華なる繪畫彫刻が盛に使

用せられ、繪畫の名手としては狩野永徳・同山樂等が最も名高く、何れも金地濃彩の畫風と豪放なる意匠によつて當代の特色を示してゐる。工藝美術としては西陣の機業が盛



工藝美術の
發達

能樂・茶道

秀吉薨後の
家康の地位

家康の専權

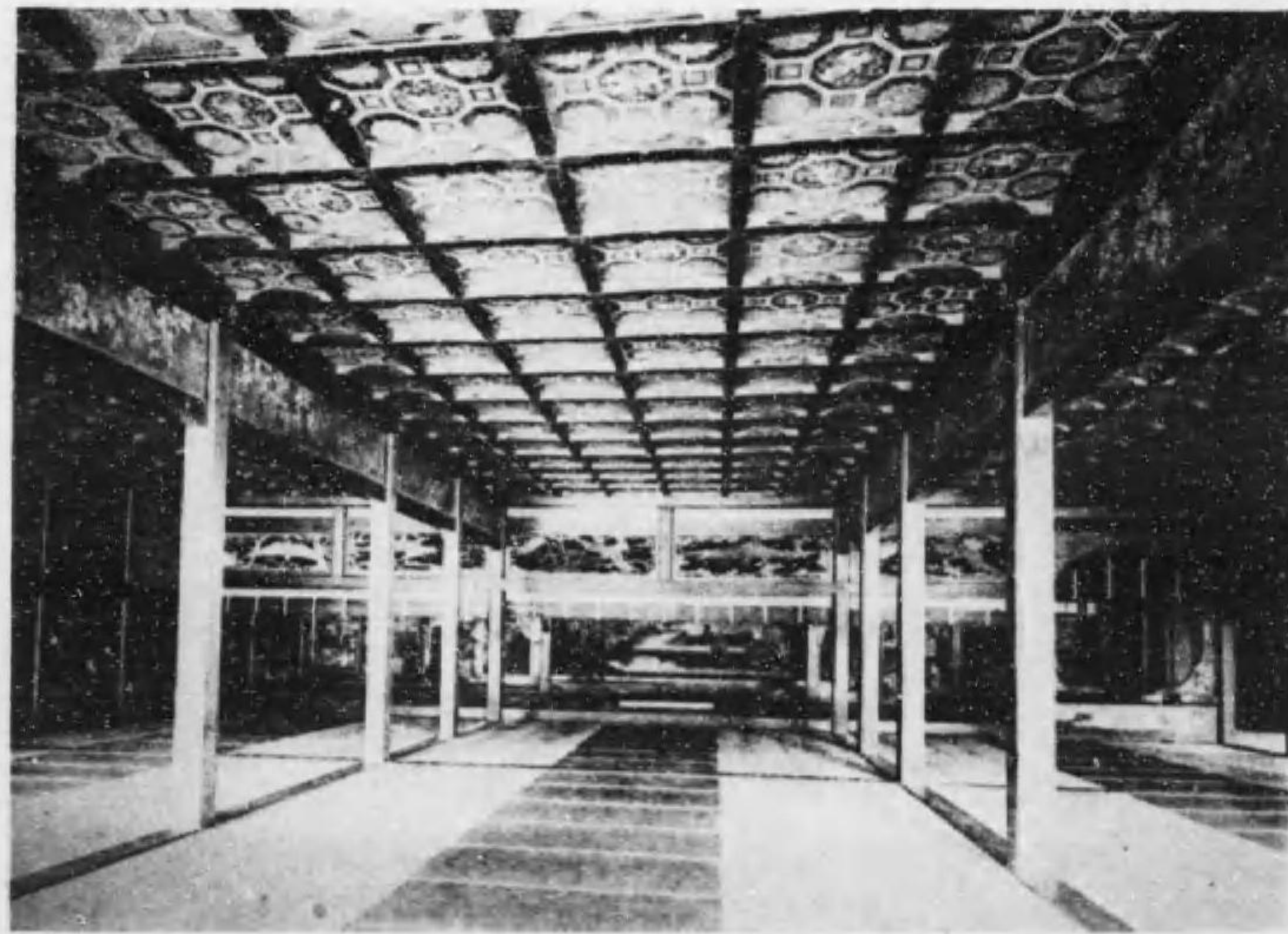
になつて、華麗な金襴緞子等が製造せられるやうになり、朝鮮より連れ歸つた陶工によつて新に有田焼、薩摩焼等が起り、漆器、蒔繪等にも優秀な製品が出来た。又能樂、茶道等も著しく發達し、茶道には秀吉に用ひられた千利休の如き名人を出した。

第二十一章 江戸幕府 社會組織

江戸幕府の成立 徳川家康は天正十八年北條氏滅亡後、その舊領に封ぜられて關東を領し、江戸市東京をその居城としたが、秀吉の薨後その遺命により、前田利家が大阪城に居て秀吉の遺子秀頼を輔育するのに並んで、伏見城にあつて天下の政を預ることゝなつた。然るに廣大なる所領を有してその勢力諸侯を壓してゐた上、利家が間もなく病死したため、天下の實權は自ら彼に歸し、次第に専權に流れて來たので、石田三成はこれを除かん



狩野永徳筆店獅子



四本願寺書院内部(伏見城遺物)

家康の東下
と三成の舉
兵

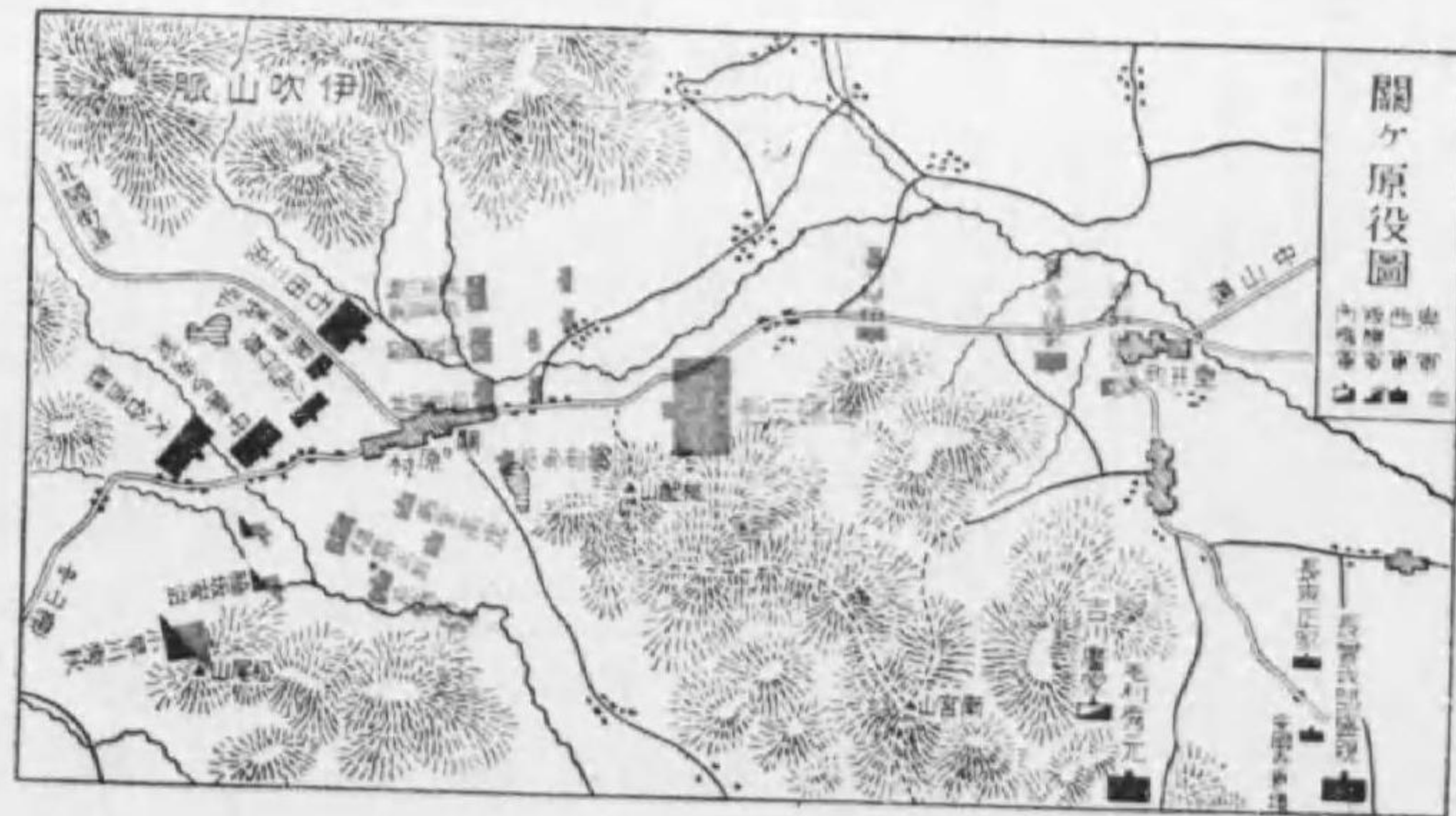
徳川家康

關ヶ原役圖

關ヶ原の戦
（二二六〇）



と企つるに至つた。かくて慶長五年、上杉景勝が會津福島縣若松市に於て戦備をなすに聞き、家康が自ら討伐のため東下するや、三成は毛利輝元を盟主として大阪に兵を舉げ、伏見城を陥れて美濃岐阜縣に進み、この報を得て下野栃木縣から引返して西上した家康と關ヶ原大垣市西方に會戦することゝなつた。この戦は全國の諸侯が東西兩軍に分屬して相



江戸幕府の
成立
(二二六三)

徳川家康の
筆蹟と朱印

豊臣氏の地
位

家康



對抗し、實に豊臣・徳川兩氏興亡の分岐點であつたが、西軍は小早川秀秋等が東軍に反應した、め大敗に終り、天下の實權は完全に家康に歸するに至つた。かくて家康は、戦後西軍の諸將の領土を或ひは奪ひ或ひは減じて東軍將士の行賞に當て、封地の大移動を斷行して覇業の完成に資し、慶長八年、征夷大將軍に任ぜられて幕府を江戸に開き、室町幕府滅亡後僅か三十年にして武家政治を再興するに至つた。この後明治維新まで二百六十餘年の間を江戸時代又は徳川時代と稱する。

參照 尋常小學國史下卷第三十六徳川家康

幕威の確立 幕府の成立により徳川氏は名實ともに天下の實權を掌握したので、

方廣寺の鐘
と銘

家康の大阪
討滅策

大阪冬の陣

國家安康



豊臣氏は大阪附近を領する一大名の形となつたが朝廷の優遇も篤く、秀吉恩顧の諸侯の心を寄するもの少なからず、金城鐵壁の大阪城に據つて巨額の金銀を藏し、政權回復の念を絶たなかつたから、家康はなほ意を安んずることが出来なかつた。そこで家康は頻りに諸侯の統制を圖ると共に、豊臣氏の財力を削減するに努め、秀吉の追福を口實に各地の寺社を修築せしめた上、慶長十九年東山の方廣寺大佛殿の再建落成供養に際し、新鑄の鐘銘を問題として豊臣氏を壓迫し、遂にこれを挑發して開戦に至らしめた。これが

大阪夏の陣
瓦版圖

大阪冬の陣である。この時には既に家康の計略が效を奏して、大名の大阪に味方するものは一人もなかつたが、關ヶ原の戦後領地を失つた浪人の馳参するもの頗る多く、大阪の堅壘によつてよく戦ひ、遽かに攻略し難かつたので、家康は策を用ひて和を講じ、その條件に託して城濠を悉く破壊して要害を失はせ、更に浪人の追放、大阪城退去等の難題を強要した。そこで翌元和元年、大阪の將士は怒つて再び戦を起し、城外に出で各所



史本日合綜制新 218

冬の陣の結果

豊臣秀頼筆頭

大阪夏の陣



に奮戦したが、衆寡敵せず、遂に敗れて秀頼は生母淀君と共に自及して果て、豊臣氏は織田氏滅亡以來僅か二代二十餘年で滅亡した。これを大阪夏の陣と稱する。かくて全國の統一は完成し、江戸幕府の威權も確立して愈々自由に天下の統制を行ふやうになつたが、家康は翌年駿府静岡市に薨じ、秀忠も次いで職をその子家光に譲り、家光はその英明剛毅な資質を以てよく諸侯を威服したので、幕府の諸制度もほぼ完成を見るに至つた。

參照 尋常小學國史下卷第三十七徳川家康つゞき
同上第三十八徳川家光

幕威の確立

中央の職制

江戸幕府の職制 江戸幕府の職制は徳川氏の一大名であつた時の制度を漸次擴大したもので、極めて實用的なものであつた。中央には將軍の下に大老、老中、若年寄があつて、何れも政務を統べてゐたが、大老は大事にのみ與り、且必ずしも常に置かれ

徳川家光

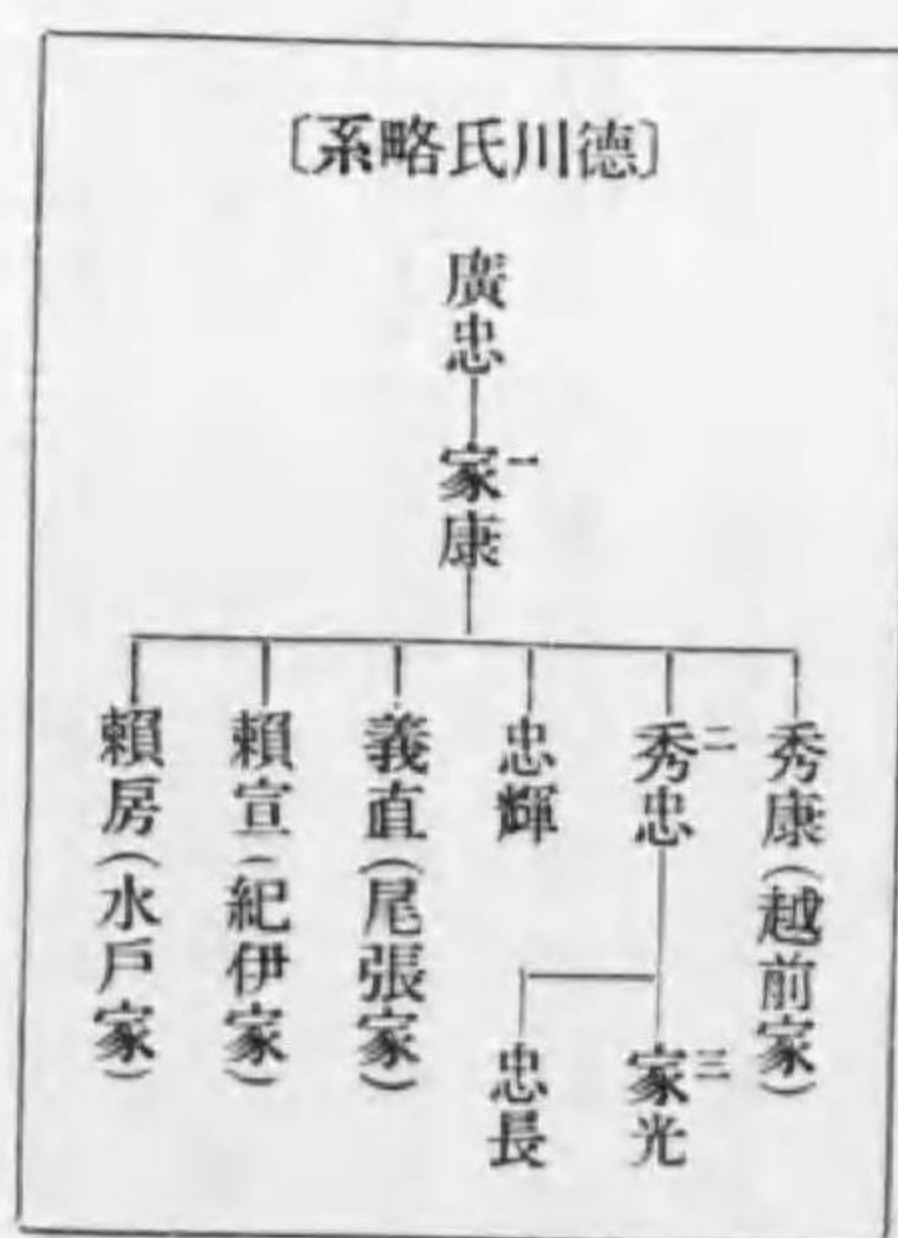


ず、通常は老中が政務を統轄して大名を統べ、若年寄がこれを輔けて旗本を支配してゐた。又老中の下に寺社江戸町勘定の三奉行があつて、寺社奉行は全国の寺社及び神官僧侶を支配し、江戸町奉行は江戸市民を治め、勘定奉行は幕府の財政を掌り、且幕府直轄地

の人民の支配に任じた。而して老中以下の諸役は大抵月番の制で、數人が一月交替で事務を見る事になつてゐた。地方は幕府の直轄地と大名旗本の領地とに分かれ、後者は大名旗本に治めさせ、

徳川氏略系

地方の職制



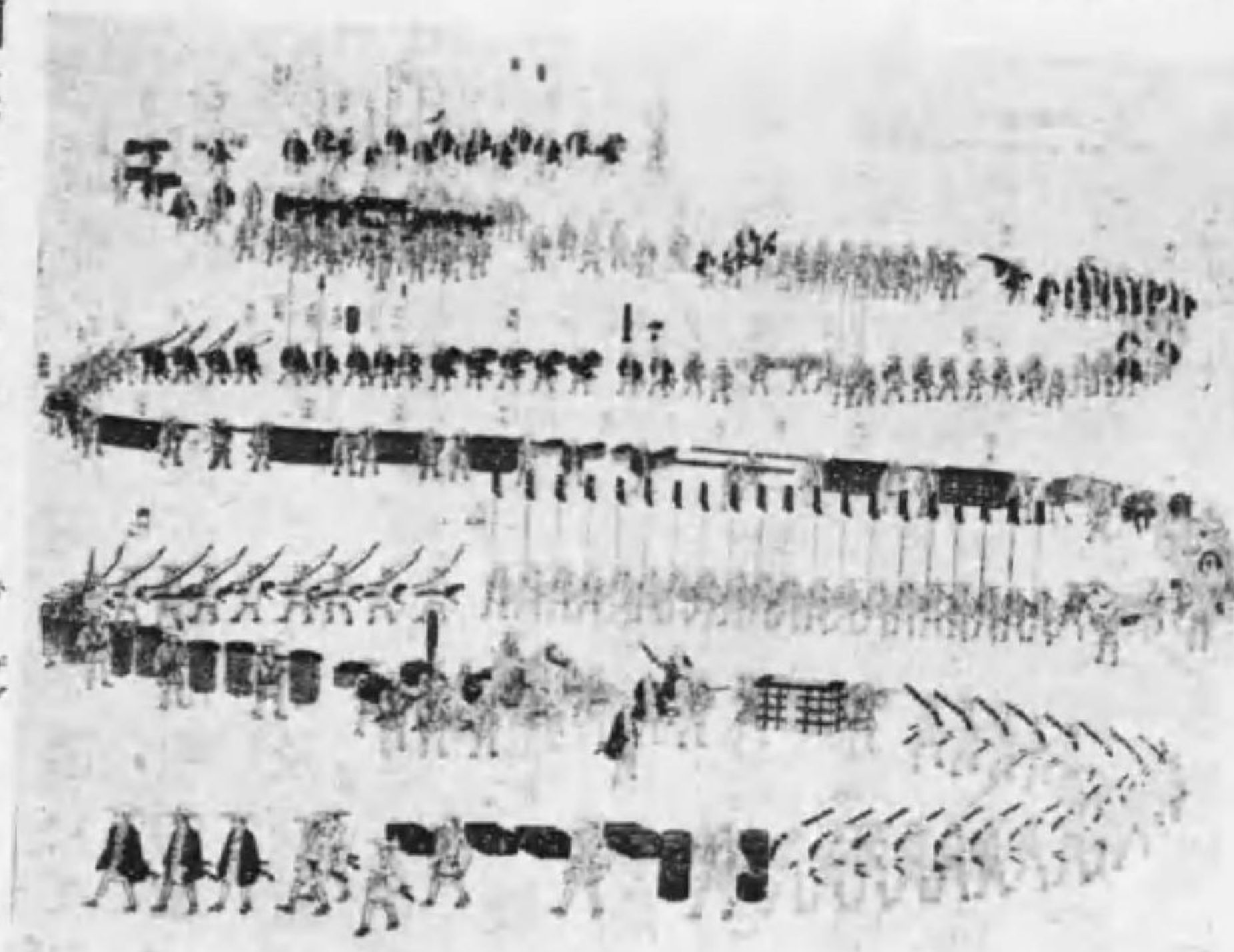
司法制度と軍制

財政と幣制

前者は天領と呼んで、一般には代官を置いて支配せしめた。又特に京都には所司代を置いて朝廷を守り、公家及び西國の諸大名を監視させ、大阪・駿府の兩城には城代を置き、京都及び大阪には町奉行を置いて町中及び近國を治めさせ、其の他奈良・伏見・山田・日光・佐渡・長崎・堺・下田等にも奉行を置いて各々その地方を治めしめた。而して當時は、一般に役人は行政と司法とを兼ねて居り、特に重要な裁判は幕府の評定所で三奉行等をして決せしめた。軍制は常備を番方と言ひ、將軍の護衛及び京都二條・大阪・駿府等の諸城を守り、旗本中武藝に長じたものを任ずるが、有時には大名旗本共、領地の高に應じて一定の軍役を負擔する定になつてゐた。又幕府の財政は直轄地四百餘萬石の地の租税のみにより、大名旗本の領地には全く課税しなかつたが、その初期には各地金銀山の産出も多く、外國貿易の利も莫大であり、家

大名行列
(尾張藩)

大名の種類
と配置



康が非常に節約に努めたから頗る豊富であつた。かくて家康

は慶長六年、慶長金銀を鑄造し、家光の時寛永通寶と名づけた銅錢を鑄て貨幣制度を確立した。

参考 鎌倉・室町・江戸三幕府の職制を比較対照せよ。

朝廷及び大名に対する政策

幕府がその権力の維持を圖るために最も留意したのは朝廷及び大名に對する政策である。大名は徳川氏に對する親疎の關係から親藩譜代外様の三種に分かれ親藩の中、家康の子の封

ぜられた尾張・紀伊・水戸の三藩は御三家として特に重んぜられたが、幕府がその統制に最も留意したのは、嘗て徳川氏と並んで豊臣氏に仕へた大大名の多い外様大名である。そこで近畿・東

武家諸法度

一 文武を別し、通事可相濟事
一 凡そ武官は法も不可不備、爰に馬是武家之要也、早共爲出、然不得已而用、然不志、何不勵、伏誅乎
一 可別、群飲、後遊事
一 令條、武家、嚴別、殊重、秩序、也、業、情、矣、是、也、國、之、基、也
一 有法度、事、不可、廢、置、於、國、之、事
一 法、是、礼、節、之、本、也、以、法、破、理、以、理、不、破、法、有、法、則、其、科、不、輕、矣

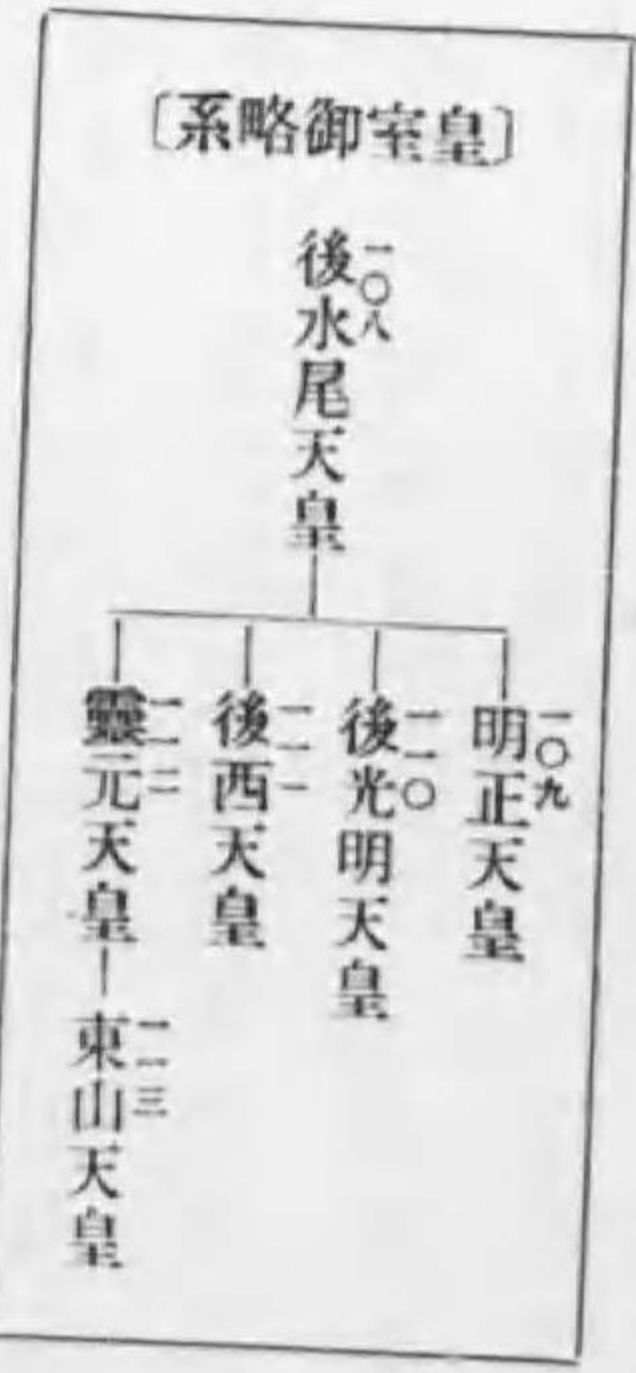
武家諸法度
(徳川幕府)
各種の統制
策

年に参観交代せしむる制を立て、武家諸法度を發布して参観・城郭・婚姻・軍船等に關する諸種の規定を設け、嚴重にこれを勵行した。而してこのために領地を減少又は没収された諸侯も少く

統制策の效
果

皇室御略系
朝廷抑壓策

なかつたので、諸侯は全く幕府に威服するに至り、幕府は諸侯の實力を殺いで幕府を中心とする中央集権を完全にすることに得た。又幕府は朝廷に對し奉つては、一面皇居の修理儀式



後水尾天皇



後水尾天皇
と明正天皇

叙位等の細に亘つて拘束を加へ奉つた。然して秀忠はその女の復興、御料地の増加等を圖つて尊王の實を示すと共に、他面京都所司代を置いてこれを警衛監視し奉つた外武家傳奏を設けて幕意を朝廷に行ふ機關とし、皇位の繼承、朝臣の進退にまで干渉し、更に禁中並公家諸法度を制定して天皇以下の服制、朝廷の席次、任官

後光明天皇

和子を入内させて後水尾天皇^{代第百八}の中宮となし、これを機會に朝廷にも幕吏を入れてその財政を管理せしめ、種々僭上不遜の所行に及んだので、天皇は御憤慨のあまり突然御位を皇女明正天皇^{代第百九}に御譲りになるに至つた。天皇は奈良時代以來最初の女帝である。かくて幕府は次第に朝廷を壓し奉るに至つたので、ついで御即位になつた後光明天皇^{代第百十}は、御英邁の資を以てよく朝威の回復につとめられたが、不幸御早世遊ばされた。

參照 尋常小學國史下卷第三十九後光明天皇
參考 鎌倉室町時代に於ける幕府と部下の武士及び朝廷との關係に比較し、江戸幕府の政策を考察せよ。

武士中心の
社會

社會組織の確立 室町時代の末、戰國時代に於て全く崩壊した社會の秩序は、織田・豊臣二氏の統一を経て江戸時代に入つて再び整頓せらるゝに至つた。幕府は大體武士を中心として士

武士

百姓

町人

公家・神官・僧侶

農工商の身分階級を定め、職業世襲を原則として社會組織の安定を圖つた。武士には將軍大名旗本以下多くの種類があつたが、何れも文武の教養に於て最も優れ、社會の中堅たるの實力を有し、苗字・帶刀を許された外、種々の特權を享有してゐた。農業は古來國の本と稱せられた如く、當時に於ても財政經濟の根本であつたから、農民は百姓と稱せられて庶民の中に於て最も上位に位してゐたが、その一面幕府諸大名の干涉最も甚だしく、極端なる勤儉を強いられ、その生活の束縛も頗る著しいものであつた。商工業に従事するものは町人と稱せられて都市に居住し、百姓よりも下位に置かれてゐたが、その結果生活に對する干渉も少く、租税も輕かつたので、社會平和の永續するや漸く自由なる發展の機會を得、その經濟的實勢力は百姓を凌ぎ、やがては武士を脅かすに至つた。士農工商の四民の外に、尙形式上武士

地方自治

家康の態度
と歐羅巴の
大勢

の上に位する公家、庶民の上に位する神官、僧侶等があつたが、社會的實勢力に於ては何れも重要な意味を有してゐない。而して農工商の庶民は何れも町村に於て自治を行ひ、よく相互の扶助・警戒等につとめてゐたが、この習俗は現今にもその風を遺してゐるものが少くない。

参考 社會組織の確立が國家統一に必要な所以を考察せよ。

第二十二章 海外諸國との交通 鎖國

江戸幕府初期の對外政策 家康は頗る海外貿易の利を重んじ、國民の海外發展を獎勵すると共に諸外國との交通を盛にし、外國船の來航を歓迎した。偶々當時歐羅巴に於てもポルトガル・イスパニヤの外にオランダ・イギリス等の諸國が東洋貿易に進出し始めた際であつたから、我が外國貿易は前古未曾有の盛

家康の貿易振興策

秀忠・家光の政策
御朱印状



況を呈するに至つた。家康はその貿易振興策として我が商人の船には御朱印状を與へてこれを保護し、外國船のために全土を開放して諸税を免除し、一時は切支丹の布教すら公許するに至つたが、後には再びこれを禁じ、貿易のみを許すやうになつた。併し貿易奨励と切支丹禁止は兩立し難いため、秀忠の時には次第に貿易も制限せられ、家光に至つては切支丹嚴禁と共に外國貿易も極度に制限せられ、遂に所謂鎖國の狀態となつて、さしものに隆盛を極めた海外貿易も全く衰微してしまつた。

参考 西洋人渡來以來の我が對外關係を大觀せよ。

オランダとの交通

ゼーランジヤ城
臺灣安平

ジェームス一世の國書



幕府の許可を得、平戸長崎縣北部に商館を置いて日本貿易を開始するに至つた。その後オランダはジャバヴァJavaにバタヴィヤ府を開いて總督を置き、家光の頃

西洋諸國との關係 家康は慶長五年、豊

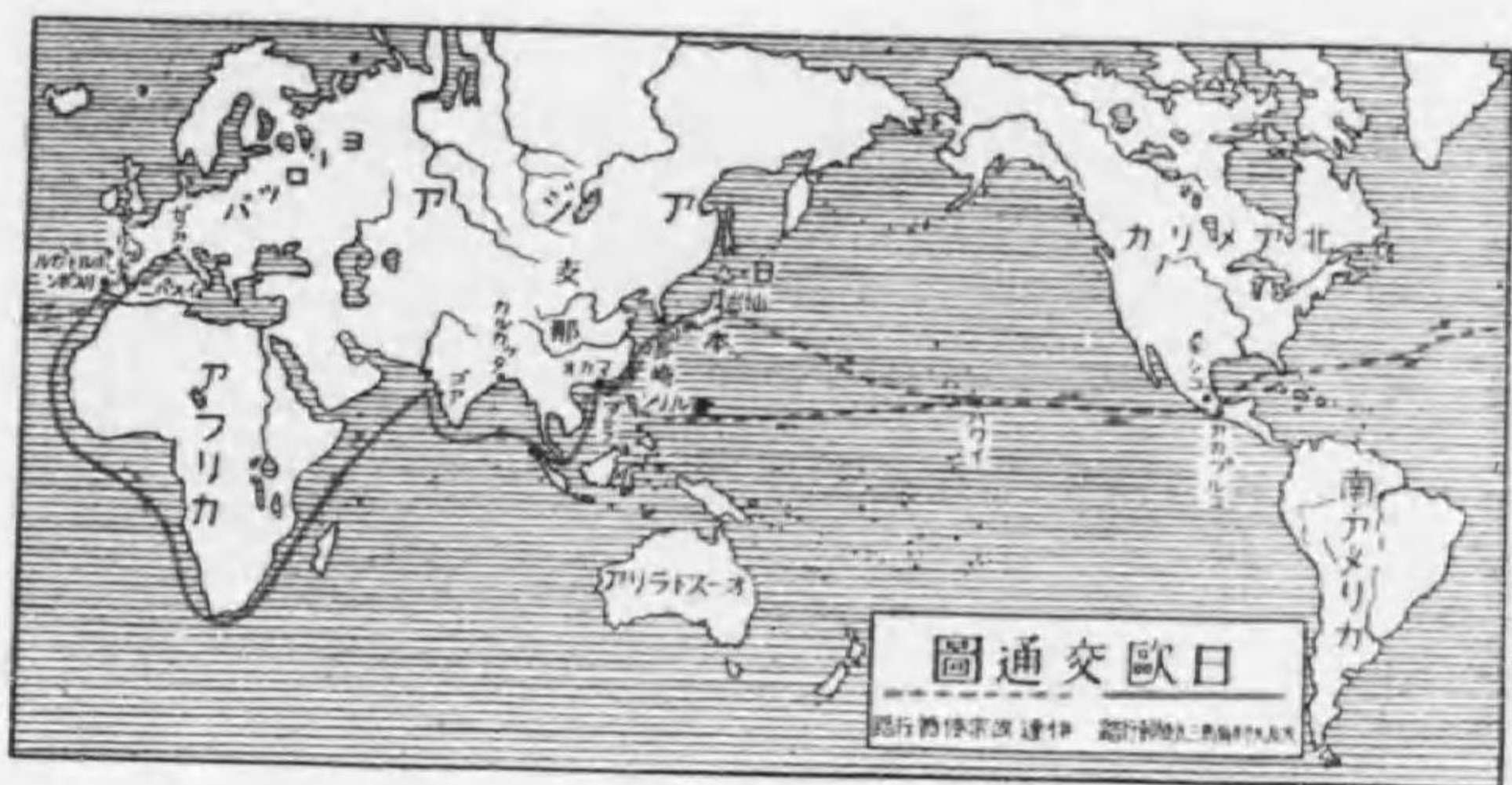
後大分縣分に漂着したオランダの商船を保護し、その船員であつたイギリス人ウィリアム・アダムス、オランダ人ヤン・ヨーステンを留めて海外交通の顧問としたが、慶長十四年には遂にオランダの使節が來朝して



イギリスとの交通

メキシコ貿易の計畫
日歐交通圖

伊達政宗のローマ遣使
(二二七三)



には臺灣を占領して安平・臺南等に築城し、益々東洋に勢力を張

つた。イギリスも亦慶長十八年に至り、その使が國王ジェームス一世の國書を齎して來朝し、幕府の許を得て同じく平戸に商館を設けて貿易を始めたが、その後オランダとの競争に敗れて退去した。家康は又メキシコにも直接貿易を開かんとして前呂宋太守の船の我が國で難破したのを優遇し、慶長十五年これを送るに共に商人を乗込ましてメキシコに遣はし、ついで慶長十八年、伊達政宗も通商を開かんとす。支倉常長を歐羅巴に遣はし、常長はイスパニヤ國王フィリッポ Philip III

支倉常長

朝鮮との國交回復
(二二六七)



植民地經營及び東洋史の西洋諸國の亞細亞經營を參照せよ。

東洋諸國との關係 東洋では家康は最も支那公の貿易を

望み、先づ朝鮮との國交を復して仲介たらしめんとして、對馬の宗氏に命じて朝鮮に交渉せしめた。かくて宗氏が百方斡旋に務めた結果、慶長十二年彼の使節が來たつて國書を呈し、その後將軍の就職毎に來聘することとなり、宗氏との間には通商條約も結ばれたが、支那との國交回復には何等得る所がなかつた。

參考 西洋史のオランダ獨立諸國の

三世及びローマ法王ポロ五世に謁し、至る所で盛な歓迎を受け、前後七年を経て歸國したが、何れもその目的は達せられなかつた。



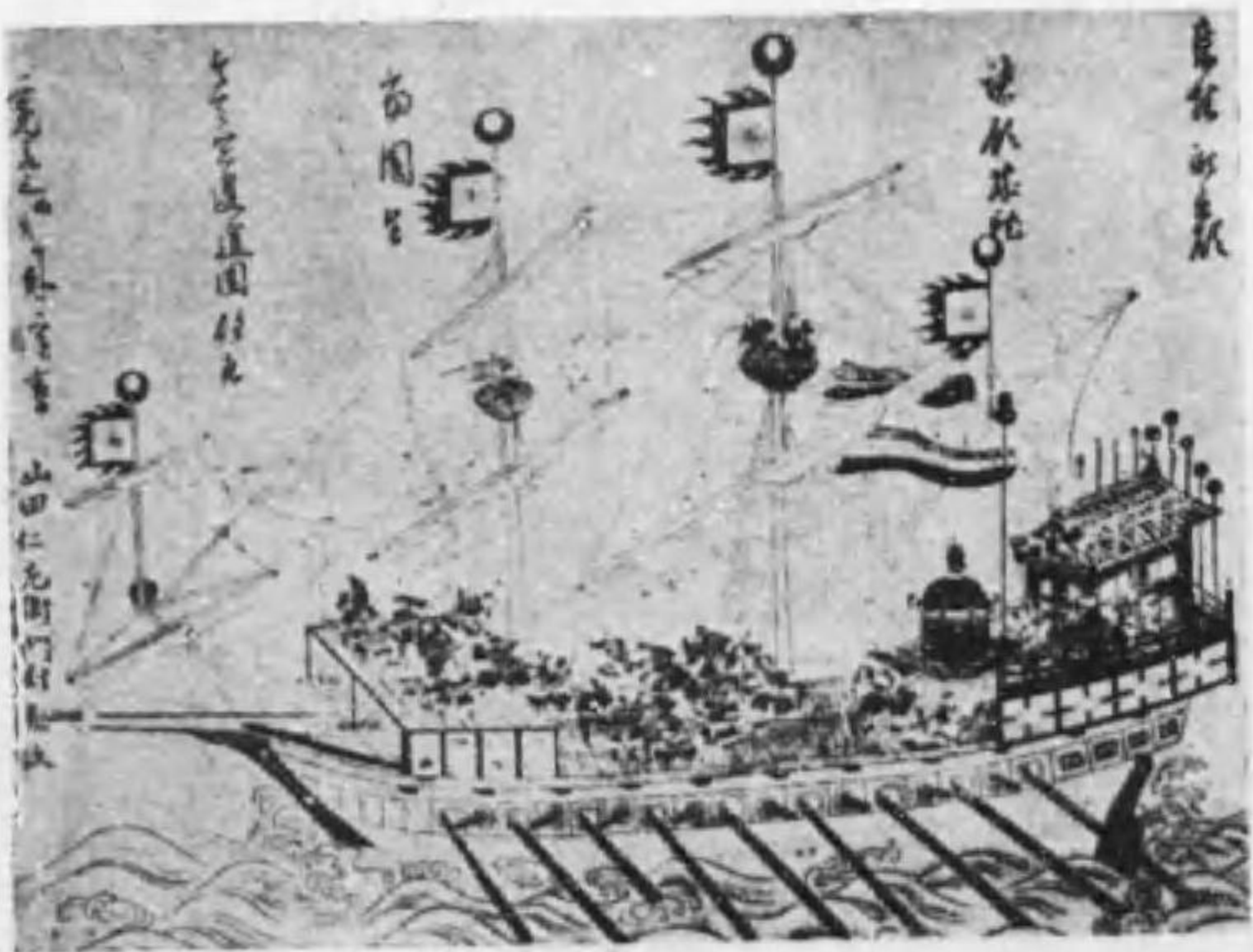
又幕府は慶長十四年に至り、日支兩屬の姿で文祿慶長の役には明に内通した琉球を島津氏の請を容れて討たしめ、その國王に明との國交回復を圖らしめたが效果を得るに至らず、その後商船に託して書を彼に送つたが、これ亦效がなかつた。併し商人の往來は盛に行はれ、家光の時、清が興起して明を滅ぼした後も依然として繼續され

た。又明滅亡の際、その遺臣鄭芝龍、鄭成功父子は相ついで我に援を求め、幕府諸大名の間にも外征の計畫が立てられたが、遂に實行に至らずして止んだ。これに反し、安南、柬埔寨、占城、暹羅等の印度支那



諸國とは國交も開け、我が國民の發展も益々盛になり、商人

の外、西國の大名、寺院等も競つて御朱印船を出して商利を得るにつとめ、各地に我が居留地たる日本町の建設を見るに至つた。當時の貿易商人としては、京都の角倉、平野、大阪の末吉、伊勢、三重の角屋、長



濱田彌兵衛
の活動

家康の禁制



崎の末次等の諸氏が最も名高く、又暹羅の内亂を鎮定して勇名を馳せた山田長政、臺灣でオランダ人の横暴を懲らした濱田彌兵衛等の如く、海外に勇名を轟かしたのも少くなかった。當時の主なる輸出品は刀劍、漆器、屏風、金、銀、銅等で、輸入品は生糸、絹織物、香料、砂糖、象牙、唐木等が主であつた。

參考 國民の海外發展の由來を考察せよ。

切支丹禁制の發展 切支丹は貿易獎勵のための家康の寛容によつて一時殆ど全國に弘まつたが、過激なる信仰の結果、我が國古來の風俗を紊し、國法を輕んずる弊が少くなかつた上、その布教は國土侵略の手段であるとの疑もあつたので、慶長

貿易の制限
と切支丹禁制

原城本丸址

島原の亂
(三三九七八)

島原役要地
圖



十七年禁制の令を發し、南蠻寺を毀ち、宣教師や主なる信徒を國外に放逐するに至つた。併し商人にまぎれて潛入するものが尙少くなかつたので、秀忠は元和二年西洋人の貿易を長崎平戸の二港に限り、ついで切支丹の策源地たる呂宋との交通を斷絶し、家光に至つては寛永十二年國民の海外渡航を在外邦人の歸國を禁じ、長崎に出島を築いてポルトガル人をこの内に移し、宣教師や信徒に嚴刑を行つたが、尙その絶滅を見るに至らなかつた。殊に肥前縣長崎島原地方はその信徒が最も多かつたため、領主松倉重政はしきりに極刑を行つて壓迫し



切支丹禁制札

踏繪

禁制制度の完成
マリヤ観音



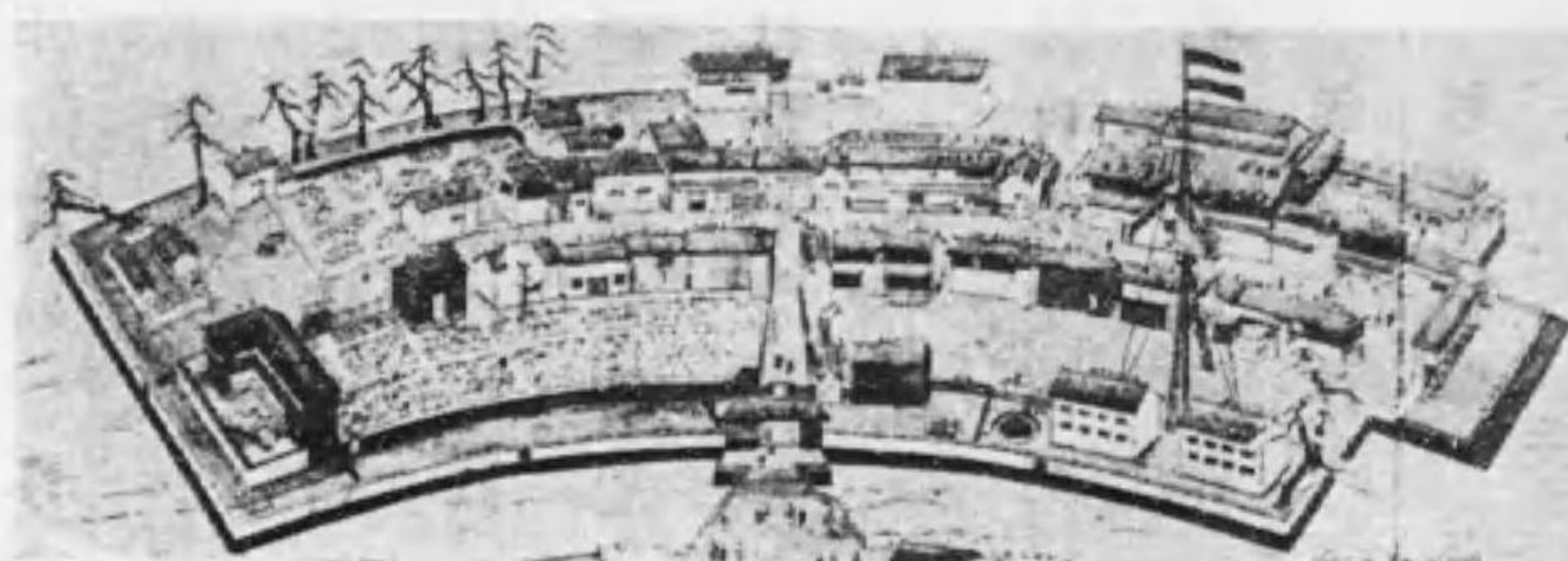
たので寛永十四年に至り、その地の信徒は肥後縣本天草島の信徒と呼應して叛亂を企て、天草四郎時貞を將として原城址島原半島南端に據り、その勢頗る隆盛であつた。そこで幕府は板倉重昌・松平信綱を相ついで派遣し、九州諸藩の兵十餘萬を以て攻圍し、三ヶ月にして漸く落城せしめた。これを島原の亂といふ。この亂の結果、幕府は益々切支丹の弊害を恐れ、囑託金寺請踏繪・誓詞等の諸制度を勵行して禁



切支丹墓

出島

ポルトガル
の來航禁止
(二二九九)



制の徹底に努むることゝなつた。かくて切支丹の勢力は漸く衰へるに至つた

が、尙九州の一部には秘密信仰として永く引續いて行はれてゐた。

参照 尋常小學國史下巻第三十八徳川家光

鎖國の完成 家光は、寛永十六年我が國の禁

制を知りながら伴天連を潜入せしめたポルトガルの來航を禁じ、次いで平戸のオランダ商館を長崎の出島に移し、肥前の鍋島氏と筑前の黒田氏をして交替に長崎の警備に當たらしめた。かくて未曾有の隆盛を見た外國貿易も、對馬の

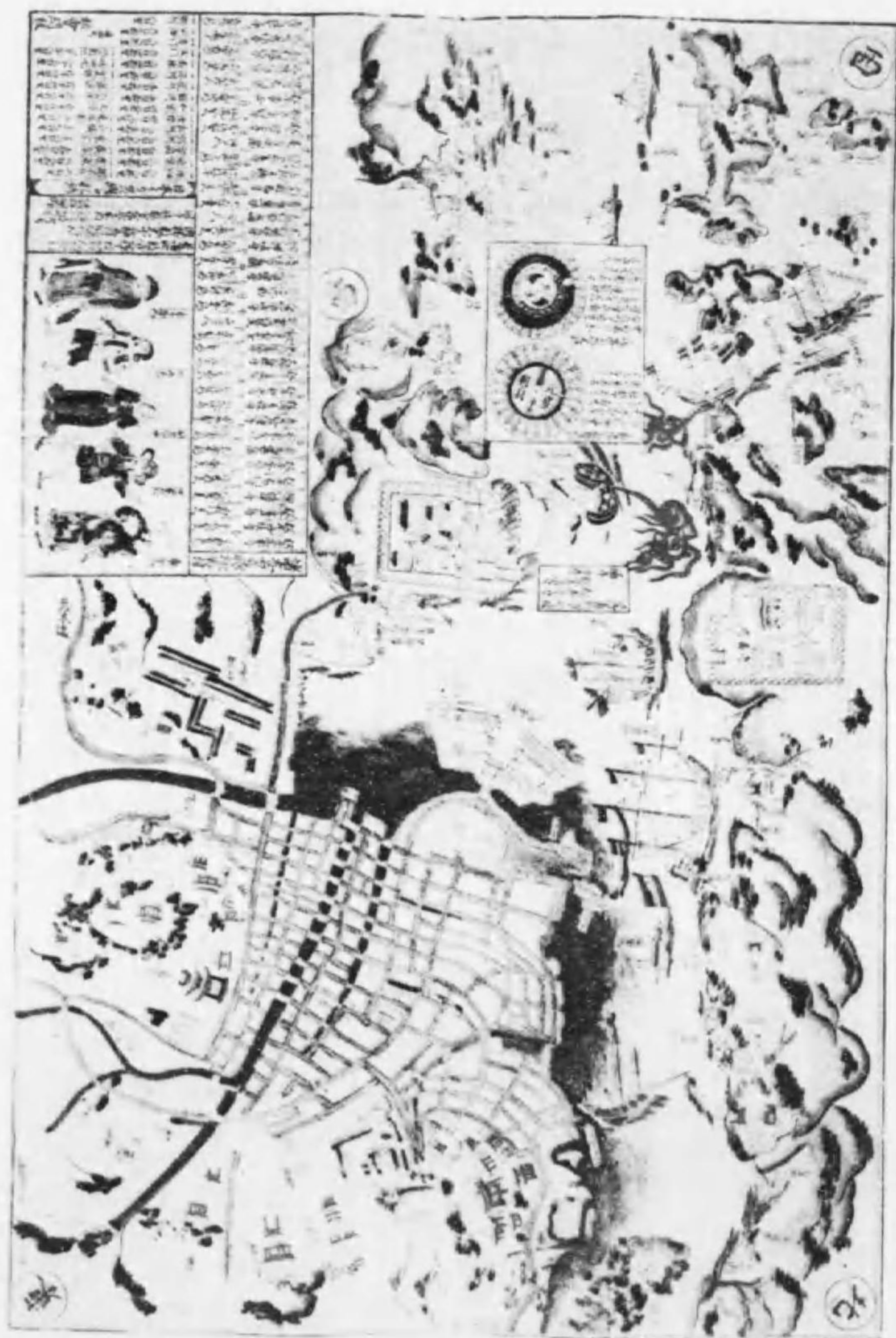


鎖國

鎖國の影響

朝鮮貿易と長崎に於けるオランダ支那の通商に限られ、海外の事情はオランダ甲比丹の風説書によつて知らるゝのみとなり、この後約二百年の間殆ど世界のCaprain大勢から孤立する状態になつた。世にこれを鎖國と稱する。このため國民の海外發展を中絶し、海外貿易の衰微を來たし、西洋文明の流入を遅れさせた弊は免れないが、それと共に一面には國內に前古未曾有の長期にわたる平和を齎らし、産業の發達を促し、東洋文化の粹を蒐めた純日本文化の大成を見、維新以後西洋文明を採用し、西洋諸國と對立し得る準備をなし得た効果も忘れてはならない。

参考 西洋史に於けるイスパニヤ・ポルトガルの植民政策の結果、東洋史に於ける支那の蒙つた西力東漸の結果等と比較對照して鎖國の利弊を精細に考察せよ。



圖繪崎長代時祿元

第二十三章 元祿時代の文化 社會
文連の發達

幕政の變化

徳川氏略系

家綱の政治

幕政の平和的發展 江戸幕府はその初期に於て、上は皇室を
抑壓し奉り、下は諸侯の勢力を抑へて幕威を確立すること共に、内
は身分階級を固定せしめて社會の安定に努め、外は鎖國を斷行



和的施設を盛にして社會文連の進歩に貢獻するやうになつた
慶安四年家綱が就職するや、保科正之が家光の遺命によりこれ
を輔佐することゝなつたが、その年由井正雪が浪人を集めて亂

保科正之

綱吉の政治



を企てんごし、謀がもれて自殺して果てた。これより幕府は浪人に對する抑壓を弛めると共に、大名に對しても從來幕府に出してゐた證人を廢して親近の態度を執り、武士の殉死を嚴禁して殺伐なる氣風を去るに努めた。ついで綱吉が將軍となるや、堀田正俊を大老とし、たが間もなく城中で殺されたので、その後側用人を置いて將軍に近侍せしむることとし、牧野成貞、柳澤吉保が最も信任を得、殊に吉保は累進して大老格に至つた。綱吉は頗る學問を好み、自ら大名、旗本等に書を講じて儒學の振興を圖り、教化を重んじて忠孝を獎勵し、佛教を信じて寺院の修造に努め、御料地を増し、大嘗會を復興し、山陵を修理し奉つて尊王の誠を致した。併し仁風を興さんとして生

元祿時代

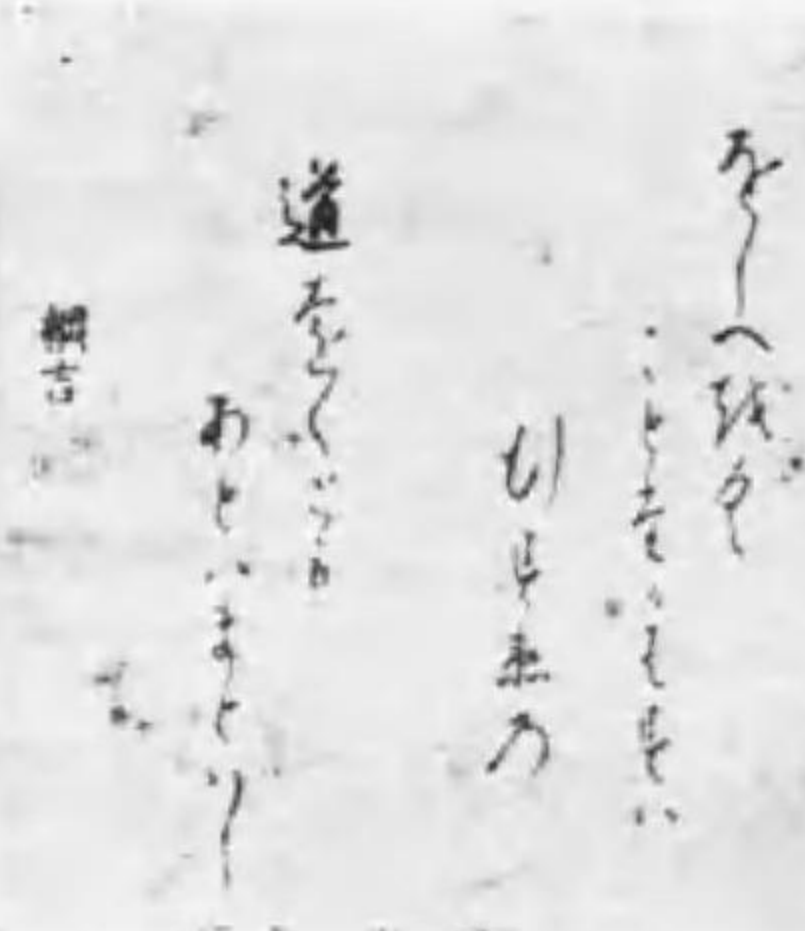
綱吉筆蹟

赤穂義士

家宣・家繼の政治

新井白石の改革

君臣千歲邊
忠孝一生心



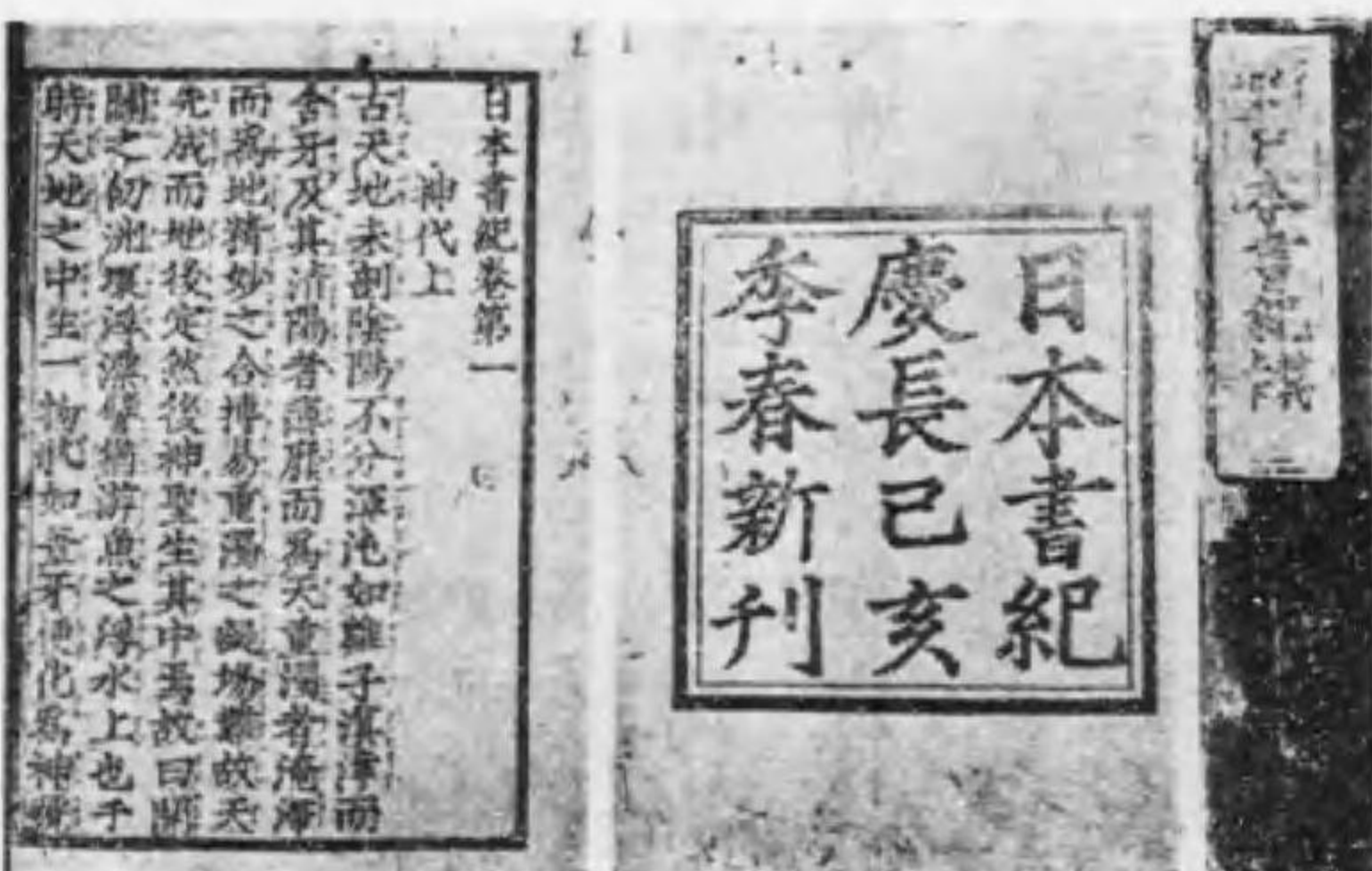
類憐の令を出し、更に迷信から己の生年に因んで極端なる犬の愛護を勵行し、豪奢を好み、惡貨を鑄造して物價を騰貴せしめたので、頗る人望を悪くした。かくて世が平和になるにつれて奢侈贅澤の風が一般に盛になり、演藝・遊樂が流行し、風俗華美に流れ、所謂元祿時代を現出した。併し士風は未だ全く廢れず、元祿十五年には赤穂義士の復讐があつて世の賞讃を博し、永く武士道の精華と稱へられてゐる。綱吉の後に相ついで將軍になつた家宣・家繼父子二代の間は、碩學新井白石が登用せられて幕政に參與し、種々前代の弊政を革新した。尙白石は尊王の志篤く、家宣の時に御料を獻じて親王宮の創立を



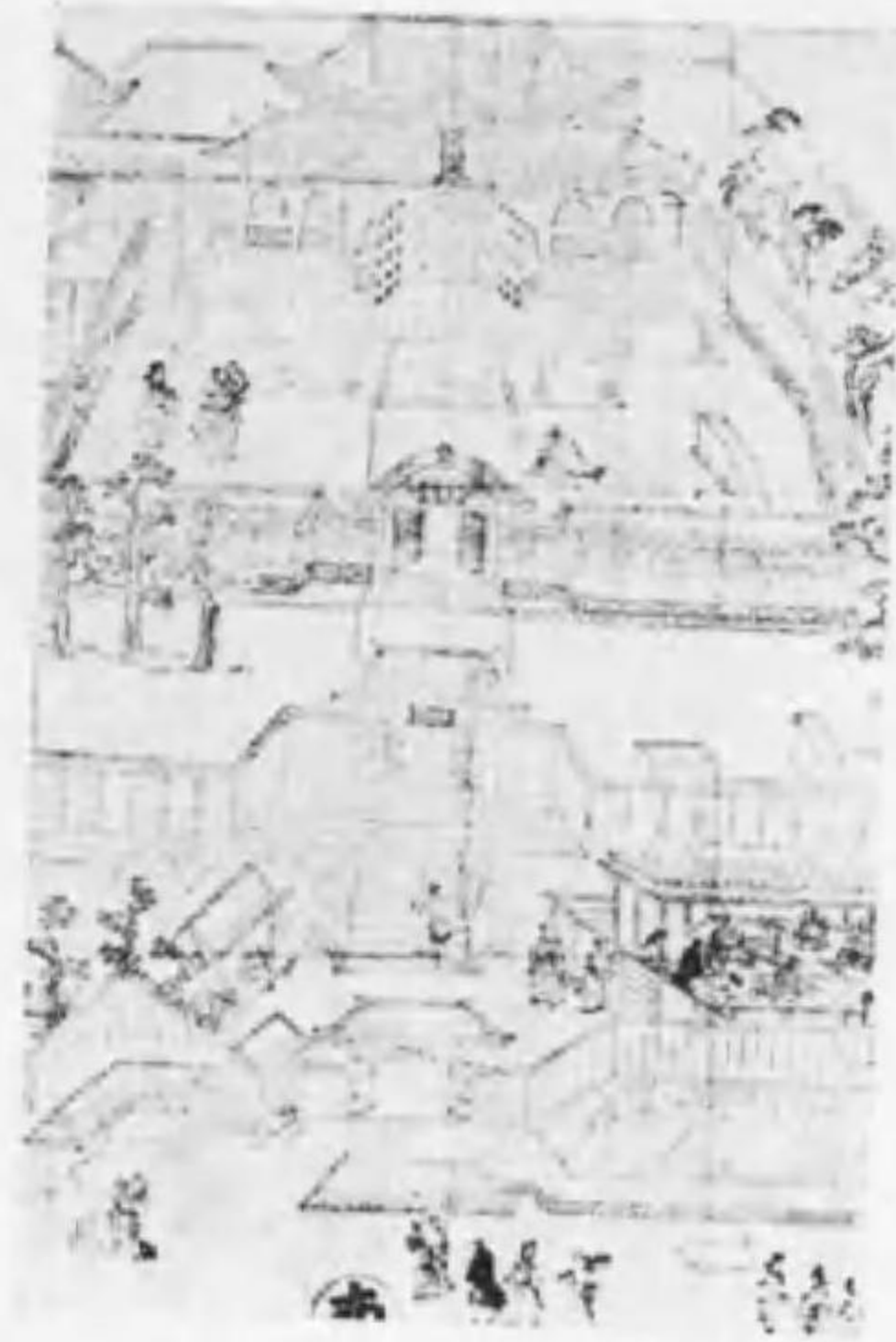
建議し奉つたので、中御門天皇第四百十四代の御弟直仁親王が新たに閑院宮を御創めになつた。又大義名分を重んじ、朝鮮使節の待遇の過重を改めて我が國の體面を保つに努め、家繼に至つては海外貿易額を制限して密輸入を取締つた。又幕府の服制建物等を公家風に改めて儀禮を整へた事も少くなかつた。

參照 尋常小學國史下卷第四十一 大石義雄
同上第四十二 新井白石

社會文運の發達 太平の永續と幕政の平和的發展に伴ひ、社會文運の發達著しく、各種の文化が著しく進歩し、而もその範圍が公家・武士に限られず一般に及び、且その中心も從來殆ど京都に限られてゐたのに、新に江戸・大阪が



これに加はり、又大名の城下が發達して地方的中心になつた爲、國民の上下に亘り、國土の全體に普及することゝなつた。而して江戸時代前半期に於て文化の最も隆盛を極めたのは元祿時代の前後であり、文運の發達に最も重大なる影響を齎したものは印刷術の進歩である。印刷は朝鮮役の際に傳へられた活版術が利用せらるゝに至り、後陽成天皇七代が和漢の古書を印刷せしめられた所謂慶長勅版は最も有名であるが、家康も古書の蒐集保存に努めると共に、その有用なものを印刷として普及を圖つた。これより民間にもこれに倣ふものが多く、家光の頃から古書新著の刊行が著しく盛になり、専門



の書店も盛に現はれるやうになつた。家康は亦京都から藤原惺窩を招いて講義をきき、その弟子林羅山を幕府に登用したが、その子孫は代々幕府の學政を司るこゝとなり、綱吉の時



羅山の孫鳳岡は大學頭に任ぜられ、幕府は湯島に聖堂を建て、林氏の弘文院をその側に移し、規模を擴大せしめた。又諸大名も學者を招いてその講義を聞き、又は政治の顧問とするもの少なからず、學者が私塾を開くものも漸く多く、一般庶民の



教育に當たるものが少なくなかつた。従來文化

教育機關としては寺子屋が至る所に發達し、浪人僧侶等のこの中心であつた佛教は、切支丹禁制のため國民全體を強制的に寺院の檀徒としたので最も普及したが、その信仰は漸く形式的となり、僧侶も安逸に流れて墮落するに至り、新宗派としては家綱の時に歸化した明僧隱元が禪宗の一派たる黄檗宗を傳へ、山城府京都に萬福寺を建



隆元

儒學の隆盛



立したにこままつてゐる。併しこれに反して學問・文藝の發達、美術工藝の進歩は頗る著しいものがあつた。

學問の興隆 儒學はこの時代

に於ける學問の中心であるが、特に惺窩の流を汲む朱子學が最も盛になり、木下順庵はこの系統から出て綱吉に仕へ、門流大いに榮えて新井白石、室鳩巢等の大家を輩出した。我が國體を重んじて新たに垂加神道を唱へた山崎闇齋、博學にして學問の普及に盡くした貝原益軒等も朱子學を奉じた人々である。又家光の頃に出た中江藤樹は初めて陽明學を唱へ、學徳共にすぐれて近江聖人



貝原益軒

伊藤仁齋

理科學の發達
荻生徂徠

と稱せられたが、その門人熊澤蕃山は經綸の才に長じ、岡山の池



田光政に仕へて功があつた。更に家綱の頃から山鹿素行が初めて古學を唱へたが、ついで京都に伊藤仁齋が出て同じく古學を唱導して多くの門人を養ひ、更にその子東涯

と前後して江戸に荻生徂徠が現はれ、東西相對立して門戸を張つた。儒學と共に理科學の發達を見保、井算哲は天文・曆學を研究し、從來長く使用されてゐた支那曆を廢して我が國の曆を作り、關孝和は數學を、稻生若水は博物を、宮崎安貞は農業を研究していづれも



松尾芭蕉

俳諧

井原西鶴

小説・浮瑠璃

独自の見解を立てた。

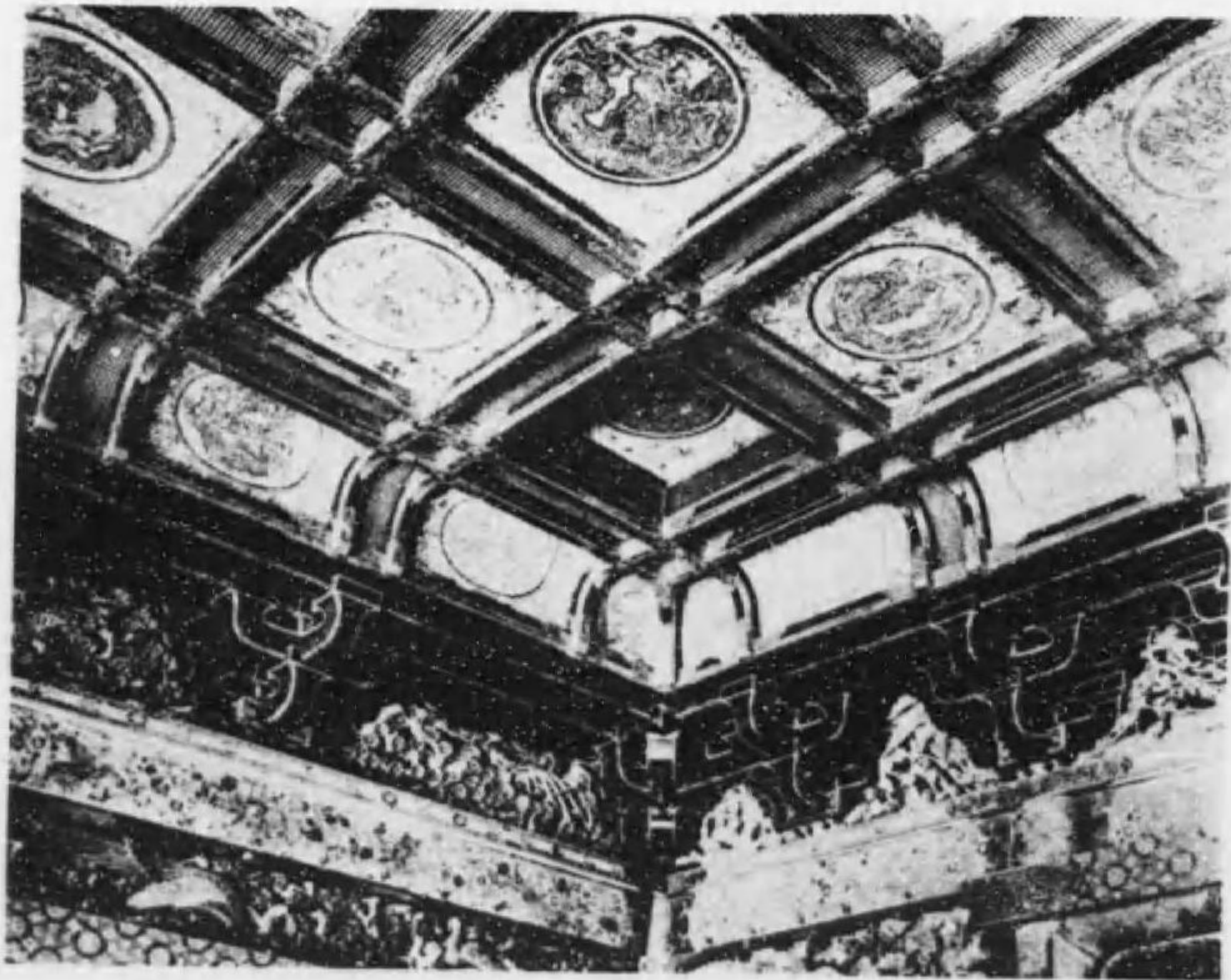


参考 東洋史の宋・明の儒學と我が國のそれを比較せよ。
文藝の隆盛 學問の復興と共に文學も發達したが、特に盛になつたのは通俗平易な

文藝であつた。俳諧は連歌から發達した滑稽を主とするものであつたが、松尾芭蕉が出て正風を唱へてから和歌に匹敵する立派な文學となり、その弟子に多くの名人を出した。小説は初は幼稚な假名草子が行はれてゐたが、大阪に井原西鶴が出て巧みに人情風俗を寫した浮世草子を



(光明院)



(拜殿内部)

日光東照宮

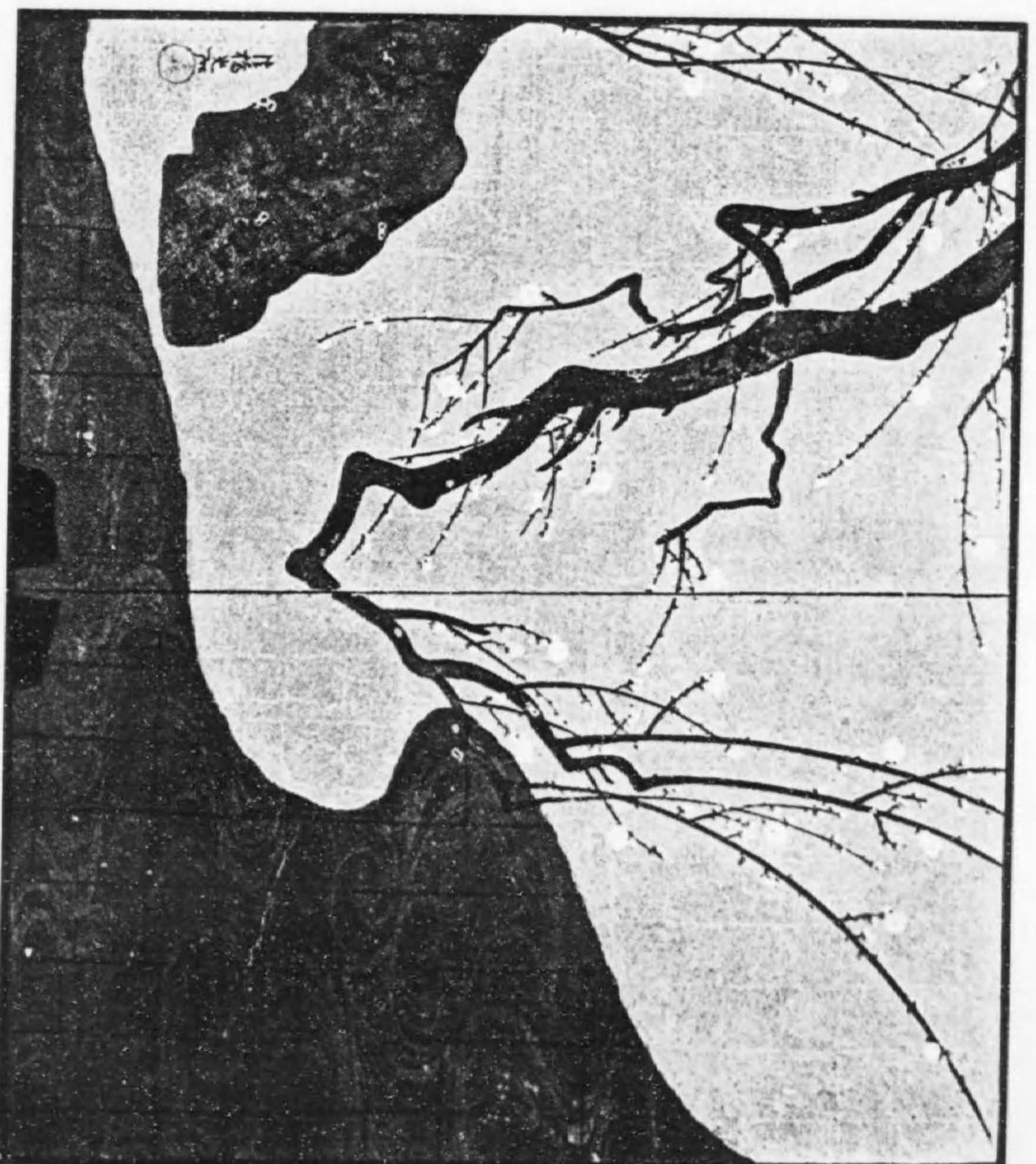


圖 花 梅 管 琳 光 形 尾

近松門左衛門



起した。淨瑠璃の流行に伴つてその創作も盛になり、大阪に近松門左衛門が出て多くの傑作を残し、國姓爺合戦の如きは最も廣くもてはやされた。

参考 芭蕉の句

古池や蛙飛び込む水の音
荒海や佐渡に横ふ天の川

繪畫

狩野探幽

美術工藝の進歩 美術では繪畫が最も發達し、江戸時代初期に狩野派に探幽が出てこの派を大成し、元祿の頃には尾形光琳が出て濃麗な裝飾畫を盛にし、又菱川師宣が現はれて當代の風俗を寫した浮世繪を發達せしめた。世の奢侈豪華に赴くに



工藝

建築

つれて工藝の發達も著しく、彫金には横谷宗珉等が名作を出し、蒔繪には本阿彌光悅、尾形光琳が名品を遺し、陶磁器では京都の仁清、乾山、九州の柿右衛門等の作が殊に名高く、織物では西陣織が愈々精巧になり、宮崎友禪により友禪染も始められた。建築は桃山時代の風を引續き繼承してゐたが、家光の時に出來た日光東照宮は現今に至るまで世界にその美を誇つてゐる。

第二十四章 江戸幕府の中興 諸藩の治

享保の治 享保元年、家繼の夭折によつて將軍家の血統が絶えたので、御三家たる紀伊家から吉宗が入つて將軍職についた。幕府の平和的施設はよく天下太平を致し、著しく文化の發展を見たが、一面武力を衰へしめて風俗を華美にし、財政を困難ならしむる弊も免れなかつたので、彼は家康に學んで實用を尙び虚

吉宗の就職
(三三七)

徳川氏略系
享保の治

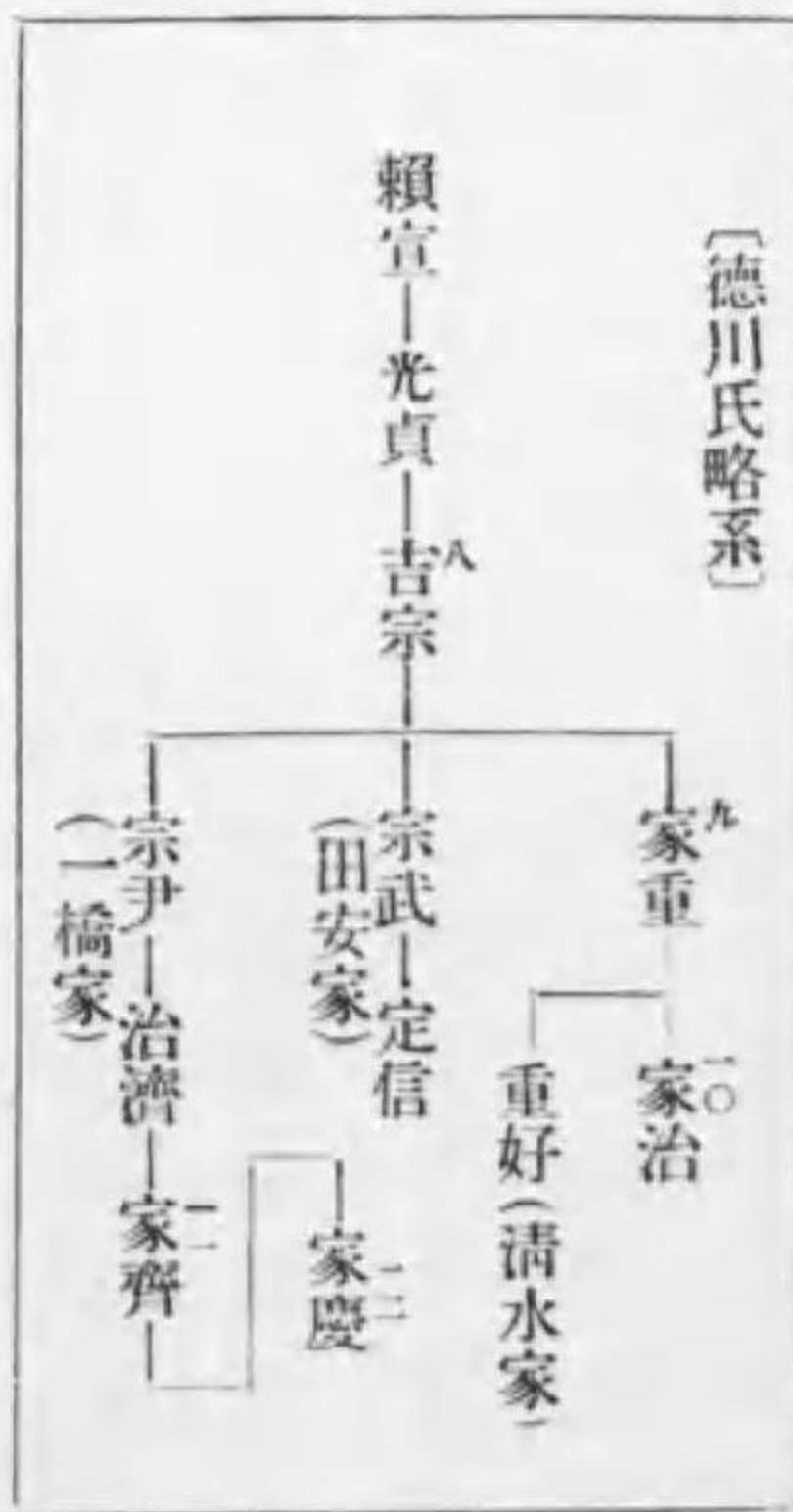
風俗の匡正

庶政の改革

徳川吉宗



飾を避け、一意従來の弊害の除去に努め、幕威の興隆を圖つた。故に彼を中興の英主と呼び、この時代を享保の治と稱する。吉宗は自ら率先して各種の武藝を奨励し、節儉を勵行し、質實剛健なる士風の回復に努むるに共に、一般風俗の矯正にも力を致し、室鳩巢に六諭衍義大意を著さしめて寺子屋に頒けさせた。又大岡忠相を江戸町奉行に拔擢し、公事方御定書を制定して裁判の公正を期し、目安箱を設けて一般人民の意見を聴き、足高の制を立て、人才登用の途を開き、更に進んで民業の發達に



心を用ひ、各地に新田の開発を行つて米の産額を増加し、甘蔗、植人蔘の栽培を奨励して砂糖、蠟の製造及び藥用に充てしめ、又青木昆陽の議によつて各地に甘藷を栽培せしめて飢饉の豫防とし、實用の學を重んじて自ら天文、曆學を修め、切支丹に關係なき洋書の輸入を許し、青木昆陽等をして蘭學を學ばしめた。又吉宗は將軍職を長子家重に譲つた後、政治の實權を握り、その子宗武に田安家を、宗尹に一橋家を起させて江戸城中に置き、以て將軍家の藩屏としたが、家重の時、更にその子重好に清水家を起させてこれに加へた。これを御三家に對して御三卿と稱する。かくて幕府の武力、財力は回復せられてその威權を重くし、一時は風俗も匡正されたが、その政策が幕府の利益のみを主とした結果、人心漸く幕府を離れるの端となるを免れなかつた。

參照 尋常小學國史下卷第四十三德川吉宗



田沼時代 家重の子家治が將軍となるや、田沼意次が側用人より老中に進み、子意知を若年寄として政權を擅にし、且私利を貪つたので、風俗の廢頹、政治の腐敗甚だしくなり、享保の治績も忽ち壞れた。併し意次は一面吉宗と同じく幕府の財力を富ますに力め、種々積極的な政策を行ひ、豫算を定めて經費の節約を計ると共に、支那と特約して銅、海産物と交換に金銀の輸入を行ひ、銅、鐵等を專賣にし、酒、醬油等に新に課税して利益を圖り、又大規模なる開拓を計畫したが、家治の薨去と共に失脚したので完成を見るに至らなかつた。而も彼の惡政の間に於て風水害、地震、噴火、火災等の天災地變が相次いで至つたため、遂に天明の大飢饉となつたが、この災害に

の頃皇居が炎上したので、學者をして古制を研究せしめ、自ら上京して工事を督し、今日の京都御所の基をつくつた。かくて定

信は着々前代の弊政改革に努めたが、在職僅か七年にして退いたので、幕威の回復を充分ならしめることが出来なかつた。

參照 尋常小學國史下卷第四十四松平定信

諸藩の治 江戸幕府は外交・軍事・宗教・貨幣等の國家的諸制度、朝廷の守護・大名の統

制の如き幕府の存立に重要な政策等は、悉くその手に收めて中央集權の實を擧げ、たが、地方の收稅・産業・教化等は總て各地大名の自由な政治に委せてゐた。そこで諸大名の中には悪政のため罪を受けたものもあつたが、よく藩政に努めて名君の名を



得たものも少くなかつた。前期に於ける保科正之・池田光政、後期に於ける細川重賢・上杉治憲等はその主なるものである。保科正之は會津藩主であるが、山崎闇齋を師として朱子學を尊み、神道を重んじ、人倫を訓へて百姓の惡風を去り、貢租を軽くして



備荒儲蓄の法を定め、又學校を設けて藩士の教養に資し、何れも藩治の基礎を固めた。岡山の池田光政は中江藤樹を尊敬し、その弟子熊澤蕃山を登用して藩政に與らせ、藩内の學問・教化を盛にして閑谷學校を起し、又よく産業を奨励し、備荒儲蓄を行つた。田沼時代前後に於ては肥後熊本城主細川重賢重賢が自ら節約を守つて藩の財政を整理し、文武を奨励して士風を刷新し、風俗を改め、産業の發達を圖り、人民を恤あはんだため、藩内よく治まり、

上杉治憲

上杉治憲



人民は殿様祭を催して藩主の徳を稱した。この頃、出羽米澤の藩主上杉治憲も財政窮乏を極めた上杉家を嗣いで質素儉約を守り、身を以て士民を率ゐ、細井平洲を招いて藩内の教育を盛にし、風俗を正し、産業を奨励して改革を圖つたため、よく財政を回復してその餘澤を後世に及ぼし、將軍家齊からはその善政を賞せられた。

家齊の榮華

第二十五章 文化文政時代の世相と文化

文化文政時代 家齊は定信の退いた後、自ら政を行ふこと四十餘年に及び、退職後も大御所と稱して實權を握つて居た。この間を文化文政時代といふ。彼は在職中前例のない太政大臣

財政の窮乏

に任ぜられ、政治に倦んで榮華に耽り、江戸城中の生活は豪華その極に達し、政治も再び紊亂して賄賂の横行は田沼時代を凌ぐ有様となつた。従つて幕府の財政は益々窮乏し、貨幣の改鑄を

社會の腐敗

大鹽平八郎



行ふこと十數回に及び、そのため物價の騰貴を甚だしからしめた。かゝる幕政の腐敗に伴つて士風の頹廢も愈々甚しく、一般社會も奢侈遊惰に流れて輕佻浮薄に墮し、風紀を紊る娛樂興行物の流行甚だしく、江戸の繁華はその絶頂に達した。而もこの間に天變地異相ついで起り、全国的に大凶作が続いたので遂に天保の大飢饉となり、百姓町人の一揆が至る所に勃發し、數萬人に達する大規模なものも少くなかつた。殊に天保八年大阪に起つた大鹽平八郎の亂は、

一揆の續出

水野忠邦の
改革
文武の獎勵

彼がもつ大阪町奉行所の役人で、陽明學者として有名であつた上、當局の窮民救済に力を盡くさぬを憤り、富豪を掠奪してこれを救はうと企てたものであるから、謀がもれて敗死したといへ、幕府の驚きも甚だしく、社會に及ぼした影響も大きかつた。

天保の改革　そこで天保十二年家齊の薨去した後、老中水野忠邦は享保寛政の政治に倣つて幕政の改革を企て、悪吏を淘汰して人才を登用し、賄賂を嚴禁して綱紀を肅正し、文武を獎勵して西洋兵術の訓練をも行ひ、昌平坂學問所の講義は貴賤の別なく聽講を許し、大名にも學問を獎勵した。頽廢の極に達した風俗の匡正には最も力を用ひ、商人に贅澤品の賣買を禁止し、賭博其他の風紀を紊す娛樂興行物を止め、出版物の取締も嚴重にし、一般に奢侈を禁じ、嚴重に節儉を勵行した。然るにその改革が餘りに急激に失して士民の怨を受けた上、更に進んで江戸、大阪

風俗の匡正

忠邦の失脚

の周圍を悉く天領にしようとしたため大名の反對が甚しく、遂にその中止と共に職を免ぜられた。これを天保の改革と稱する。かくて吉宗の變革以來數度の改革も十分にその成果を見ることなく、却つて士民の反抗を強くして幕威を失墜し、世情も益々惡化して、愈々幕府の衰亡を早めることゝなつた。

文運の東遷と世相　江戸時代の文化は既に元祿時代に於て

我が國未曾有の興隆を見、江戸も京都、大阪と相並んでその中心となつたが、當時の學者、文人等は多く京都、大阪方面出身の人々であつた。然るにその後江戸の繁昌が益々盛になり、文化、文政時代にその絶頂に達するや、各種文化の發達も京都、大阪を凌駕して全國に冠絶するに至り、文化の中心が東に遷つた觀を呈するところとなつた。而して、平和の永續が齎す士風の變化と平民の向上につれて、兩者の間に趣味、教養の差が極めて少なくなり、

文化中心の
東遷

上下の融合

文化に於ける身分階級の別は殆ど見られなくなつた。かくて教育は上下を通じて盛になり、町人の學問に名を成すものもあれば、武士で小説・狂歌等の作者もあらはれ、一般に遊惰享樂の風が滔々として底止する所を知らぬ有様となり、素人にして歌舞音曲の稽古をなすものが次第に多くなつて遊藝の師匠を生じ、平民のみならず武藝を忘れて遊藝に親しむ武士も少なからず現はれた。

學問文藝の變遷 儒學は寛政異學の禁以來、朱子學が正學として盛になつたが、別に各派の長所を併せた折衷學派も起り、陽明學には佐藤一齋があらはれてその門流に幕末に活動した多數の志士を輩出する基をつくつた。學校は學者の私塾の外に公武の間にも續々設立せられ、幕府の昌平坂學問所に對して京都には仁孝天皇第一百二十代が公家教養のために學習所を御創立にな

り、各藩でも競つて藩校を設けるに至つた。名古屋の明倫堂、水戸の弘道館、鹿兒島の造士館、熊本の時習館、萩の明倫館、會津の日



宿屋飯盛石川望等があらはれ、俳諧から來た川柳が教養に乏しい江戸の町人の間に流行して、諷刺諧謔を恣にした。小説も家治

新館、米澤の興讓館等は特に有名なものである。寺子屋の都鄙一般に普及したのはもごよりであるが、吉宗の頃京都の石田梅巖によつて創始された心學は、その弟子手島堵庵より頗る盛になり、一般庶民社會の教化に非常な効果を齎した。文藝は文化の中心が江戸に遷つてから滑稽諷刺を主とするものが盛になり、和歌を滑稽化した狂歌に四方赤良太田南畝・蜀山人

黄表紙

瀧澤馬琴



の頃から繪の多い黄表紙や、寫生的な洒落本が行はれ、何れも短篇で滑稽諧謔を主とし、山東京傳は最も有名であつたが、家齊の頃には長篇が喜ばれ、黄表紙を長くした合巻に柳亭種彦が出、勸善懲惡を旨とした讀本には瀧澤馬琴が出て、南總里見八犬傳等の大作を著し、滑稽諷刺を旨とした滑稽本には十返舎一九、式亭三馬等

があらはれて、一九の東海道中膝栗毛三馬の浮世風呂等が有名であつた。



圖 水 山 筆 舉 應 山 四



葛飾北齋筆山下白雨



池大雅筆山水圖

文人畫

圓山派と四條派

谷文晁

錦繪

時鳥なきつる跡にあきれたる後徳大寺の有明の顔

(四方赤良)

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してたまるものは

(宿屋飯盛)

國の母生れた文を抱き歩き

(柳樽)

美術工藝の發展

美術に於ては依然として繪畫が最も盛であつて、種々新流派が起つた。支那の明清で全盛を極めた文人

畫は、家治の頃京都に池大雅・與謝蕪村が出てから盛になり、廣く學者・文人の間に行はれたが、家齊の頃江戸の渡邊華山、九州の田能村竹田が最も傑出して居た。家治の頃京都に出た圓山應舉は自然を師とし、寫生を重んずる圓山派を開いて従來の畫風を一變し、その弟子吳春は蕪村の風を併せて別に四條派を起し、家齊の頃江戸に谷文晁があらはれ、従來の各派を併せ採つて大いに名聲を博し、その門流隆盛を極めた。浮世繪は家治の頃から木版彩色の錦繪が行はれ、鈴木春信・喜多川歌麿・勝川春章等が輩

出して、美人畫役者繪等が流行を極めたが、家齊の頃には葛飾北齋が奇抜な描法により、安藤廣重が素直に自然を寫して、何れも風景畫に新生面を開いた。その他工藝品としては陶磁器・漆器・織物等、一般の生活が奢侈に赴くにつれて、精巧艷麗なものが流行し、武士の刀劍裝飾に對して町人の間には特に根附の彫刻が珍重せられた。

第二十六章 國史・國文の發達 尊王思想の勃興

國史の研究 儒學を始め各種學問の發達に伴つて國史の研究も盛になり、頗る大規模なる編纂が行はれるやうになつた。即ち幕府では早く林羅山・蔭峯の父子に命じて後陽成天皇以前の國史を宋の資治通鑑に倣つて編年體に編纂せしめて本朝通

鑑と稱し、大名では水戸の徳川光圀が彰考館を設けて多數の學者を集め、後小松天皇以前の國史を支那の正史の體裁に編纂せしめて大日本史と名付けたのはその最も著しいものである。



殊に大日本史はその完成に至るまで二百五十年に及び、明治の末に亘る大事業であつて、その記述が大義名分を明かにし、尊王の思想を鼓吹してゐる點に重大なる特色を有してゐる。以上の二大著述は何れも漢文であるが、史學者として特に傑出してゐた新井白石は讀史餘論・古史通の如き史書を國文で著した。又家齊の頃に出た伴信友は着實なる考證に専心して多數の國史に關する著述を遺した。

參照 尋常小學國史第四十徳川光圀

國學の勃興

國史と共に國文學の研究も漸く起り、元祿の頃

契沖



大阪に下河邊長流僧契沖が出て萬葉集を研究し、契沖は萬葉代匠記を著し、北村季吟は幕府に仕へて源氏物語・枕草子・徒然草等の註釋を著した。かくの

如く國史の

研究が盛に

荷田春滿
國學の勃興

なり、國文學の註釋が進むに従つて、我が國獨特の惟神の道を唱道する國學が勃興し來り、吉宗の頃荷田春滿が出て、儒道の外に我が古道のあることを唱へたが、その門人賀茂眞淵に至つては盛に儒教を攻撃して我が國獨特



國學の發展

賀茂眞淵



の古道を力説した。ついで家治の頃、その弟子本居宣長は我が國最古の古典である古事記の研究に没頭して古事記傳を著し、惟神の道の基づく所を明かにし、更に家齊の頃に出た宣長の門人平田篤胤は、最も激しく儒佛二教を排斥して純粹

本居宣長
平田篤胤



立て、門弟に教へるに共に、廣く古書を蒐集

の古神道を主張した。又、家齊の時、塙保己一は幕府の保護を受け、て和學講談所を





して群書類従を出版し、國史・國學の研究に資料を提供した。

參照 尋常小學國史第四十五本居宣長

參考 國學者の精神を示す和歌

踏みわけよやまこにはあらぬ唐鳥のあこを見

るのみ人の道かは

(荷田春滿)

もろこしの人に見せばやみ吉野の吉野の山の

山ざくら花

(賀茂真淵)

さしいづるこの日の本の光より高麗もろこしも春を知るらん

(本居宣長)

人はよし唐につくこも我が杖は大和島根に立てんさぞ思ふ

(平田篤胤)

尊王思想の興起

儒學の研究が盛なるにつれて、學者の間には内外の別を論じ、君臣の分を議する者が多くなり、國史研究の結果は我が國體の精華が明かになり、國學者は我が國獨特の道を唱道したので、武家政治の變態なるを知り、尊王の大義に目覺

めるものが漸く増加して來た。儒者の中で尊王思想の最も著しかつたのは、朱子學から出て神道を唱へた山崎闇齋、靖獻遺言を著したその弟子淺見綱齋等で、その門流を崎門學派と稱した。大日本史の編纂に當たつてゐた水戸の學者も、徳川光圀の尊王の精神をうけて、水戸學派と稱する一派を成し、その一人栗山潜鋒の著した保建大記は後世に影響する所頗る大であつた。併しこれ等の諸學者は理想として尊王を説くに止まり、未だ武家政治を廢して王政復古の實行を期するには至らなかつた。

尊王論の發展

然るに享保の治以來、幕府が次第に人心を失ふに至るや、心を朝廷によせて王政復古の實現を圖るものが現はれるに至つた。竹内式部はその魁をなした人で、闇齋の説を奉じ、將軍家重の頃京都に於て公家の間に保建大記や靖獻遺言を講じて尊王の大義を説き、王政復古を唱へて大いに志氣を鼓

明和事件

高山彦九郎

尊王家の輩
出



舞したが、寶曆九年幕府のため京都を追放された。これを寶曆事件といふ。次いで家治の頃、同じく崎門學派を學んだ山縣大貳は江戸に於て兵學を講じ、柳子新論を著して尊王思想を鼓吹し、彼の許にあつた藤井右門はその言論殊に過激であつたので、明和四年幕府に捕へられて共に死刑に處せられた。これを明和事件と稱する。かくの如く京都或ひは江戸に於て堂々王政復古の論ぜらるゝに至つたのは、實に幕威の衰退を物語るもの

のに外ならぬが、尊王思想はこれより益々盛になり、家齊の頃高山彦九郎は皇室の式微を慷慨し、諸國を歴遊して尊王の大義を説き、蒲生君平は歴代皇陵の荒廢を慨き、各地を巡つて志士と交を結び、山陵志其他の著を遺した。同じ頃頼山陽は麗筆を振つ

蒲生君平

頼山陽

藤田東湖



て日本外史、日本政記等の史書を著して尊王の意を寓し、熱烈なる詠史に勤王の氣魄を示して、廣く人心に感化を及ぼした。又水戸では藤田幽谷、その子東湖、會澤安等が出て尊王論は最も廣く行はれて世に影響を及ぼす所が多かつた。



參照 尋常小學國史第四十六高山彦九郎と蒲生君平

洋學の起源

前野玄澤
杉田玄白

蘭學の發達

參考 尊王思想を述べた諸士の歌
我を我ましろしめすかやすべらぎの玉の御聲のかゝる嬉しさ (高山彦九郎)
比叡の山見下す方ぞあはれなる今日九重の敷したらねば (蒲生君平)

第二十七章 洋學の發達 海防攘夷論

洋學の發達 鎖國以來衰へた西洋に關する智識は、新井白石の西洋紀聞・采覽異言等を著して世界地理を説き、吉宗が書物輸入の禁を弛めると共に、

青木昆陽を長崎に遣はしてオランダ語を學ばしめてから、漸く復興の端が開かれた。かくて家治の頃に至り、昆陽の



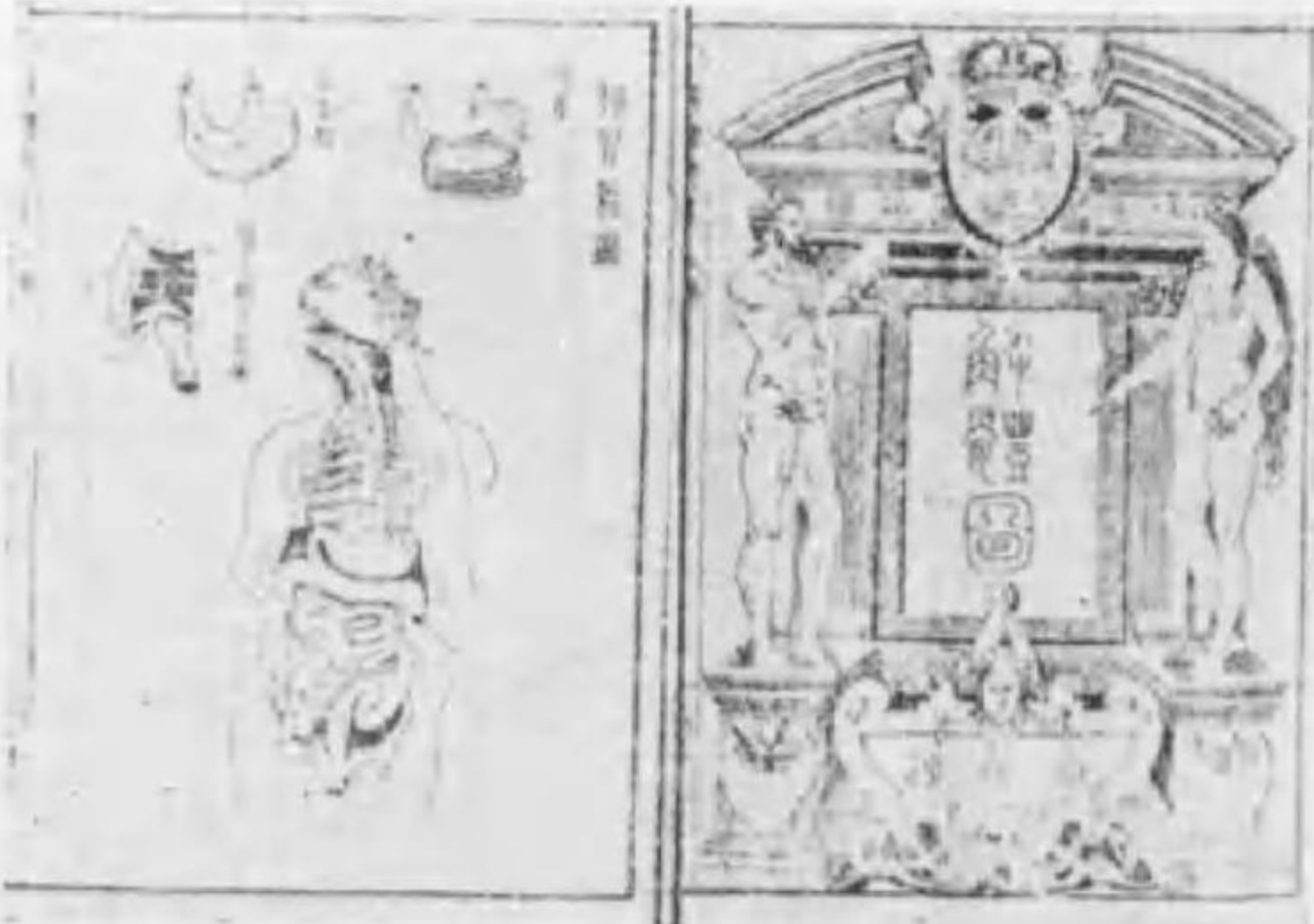
解體新書

大槻玄澤
幕府の翻譯
局設置



門人前野玄澤も長崎に遊學して後、杉田玄白と共にオランダ語の人體解剖書を翻譯して解體新書と名付けて蘭書翻譯の嚆矢をなし、家齊の頃、玄澤の門人大槻玄澤は蘭學階梯を出版し、次いでその門人稻村三伯が波留麻和解と稱する蘭和

辭典を編してから、蘭學に入るものが多い。なり、新知識を輩出するに至つた。かくて家齊の時から幕府に翻譯局が設けられて、玄澤以下の學者が相ついで登用せられ、やがてイギリス・ロシア



フランス等の言葉も次第に研究されるやうになつた。語學の進歩につれて各種の理科學も輸入せられ、平賀源内は田沼時代に早くも電氣器械を作つて世人を驚かしたが、殊に醫學は最も著しく、長崎にドイツ人シイボルトが來て、醫學博物學を教へてからはその進歩に一時期を劃し、やがて幕府にも西洋醫學所を設けらるゝに至つた。その他天文曆數、地理、兵學等も洋學の知識によつて頗る進歩するに至つた。

西力東漸と海防論 鎖國以來二百年の間、我が國が殆ど外國と交渉を絶つてゐる中に、東洋に於ける英・佛・露等の勢力は著しき發展を見、イギリスは印度を取つて支那に迫り、家齊の頃には



新制綜合日本史 276

漸く南方から我が國に近づき、ロシアはシベリヤの全土を占領し、網吉の頃早くもカムチャツカ半島を取つて北方から我が國の領土に接觸するやうになつた。又アメリカ合衆國は家治の頃獨立して國を建て、その領土が太平洋岸に達するに共に、東方から我が國に迫つて來た。かくの如く世界の強國が三方から迫りつゝあつたため、その中心にある我が國はもはや鎖國の夢



に耽つてゐるここが出来なくなつた。而して我が國に於ても洋學の發達に伴つて次第に世界の形勢が明かになつたので、識者の間には海防の急を論ずるものも少なからず、松平定信執政の頃、水戸の立原萬は幕府に議を上つて北



のこして著書版木を没收の上處罰せられた。

參照 尋常小學國史第四十七摺夷ミ開港

參考 西洋諸國の世界政策特にそのアジア經營ミ比較して考察せよ。

ロシヤの來航と蝦夷地の經營
ロシヤは我が漂流民を利用して我が國の事情を究めてゐたが、寛政四年その使者ラツクスマンが漂流民を伴つて根室^{北海}道^北に來り、國書を呈して通商^{Luxmann}を求めた。幕府は鎖國の旨を告げ、且外國との交渉は長崎に於てなすべきを傳へて歸らせたが、林子平處分直後の事であつたから、



大いに驚いて直ちに沿海の諸侯に防備を命じ、定信も自から江戸附近の海岸を巡視して防備を計つた。殊に蝦夷地の防備は幕府の最も留意した所で、寛政十年近藤重藏を遣はして巡視せしめ、ついで蝦夷の東半

分を直轄地と



して函館奉行を置き、伊能忠敬に命じて各地を測量して精密なる地圖を製作せしめた。然るに文化元年、ロシヤ

レザノフの
來朝とその
後の經營

レザノフ



しめ、その後、間宮林藏は樺太より黒龍江口の邊まで探檢の歩を進め、高田屋嘉兵衛は

擇捉島に航路を開いて漁場を設けた。

參考　ロシアのシベリヤ經營ニ比較して考察せよ。

イギリス船
の暴行

イギリスの來航と攘夷論　ロシアはその後本國がフランスの侵入を蒙つたため久しく來航を見なかつたが、文化五年イギリスの船が突然長崎に入港し、オランダ人を捕へて薪水、食糧等

北方探險圖



高島秋帆



攘夷論

を強奪して立去つたため、長崎奉行松平康英が責を負つて自殺するに至つた。當時イギリスはフランスと戦つて居り、オランダはフランスに屬してゐたためである。而もイギリス船はその後も頻りに我が近海に現はれ、或ひは長崎の出島を奪はんことを企て、暴行をなすに至つたので、我が國民の間には進んで攘夷を斷行すべしとの論

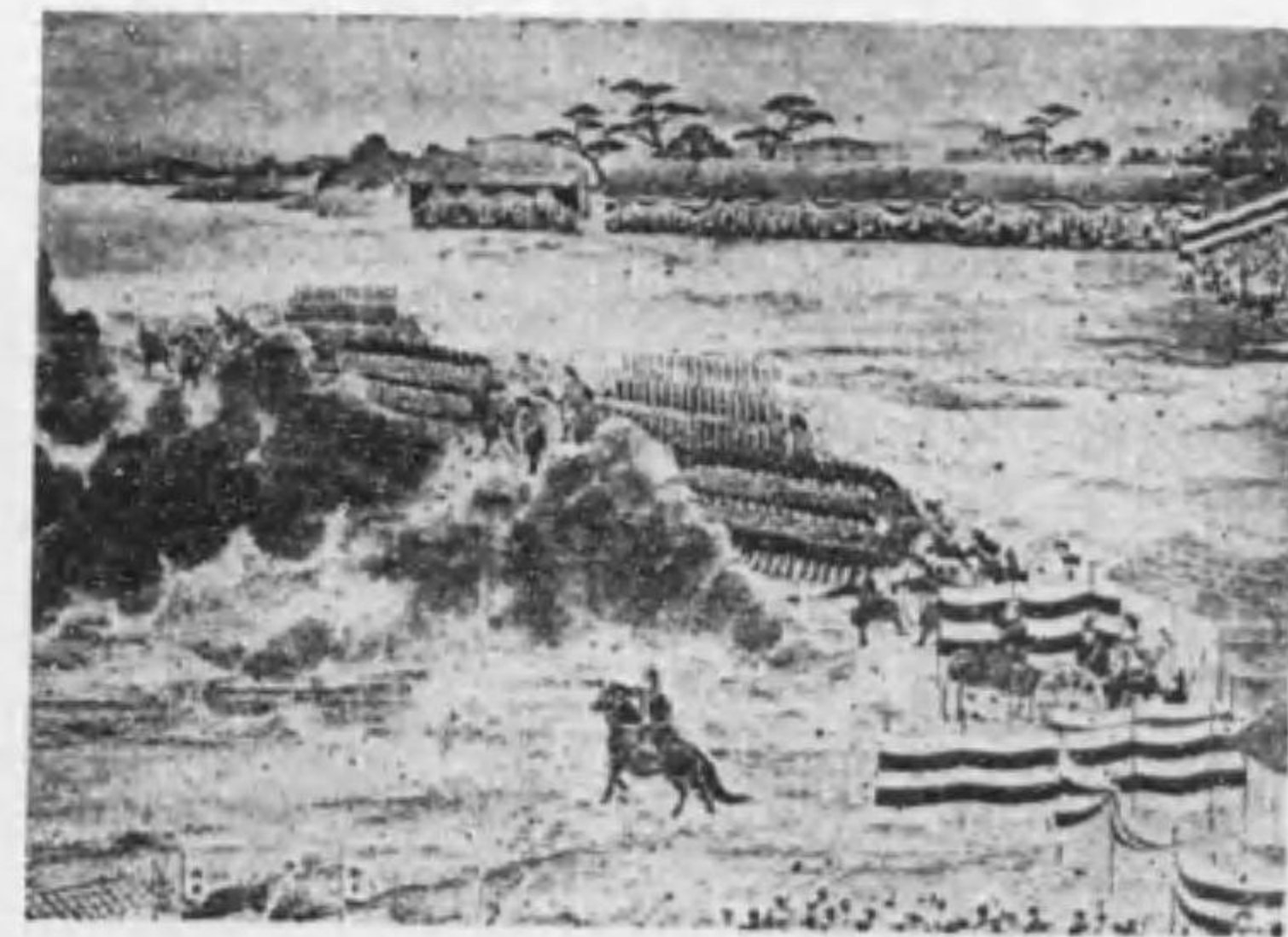
幕府の攘夷

高島秋帆
練の圖

江川太郎左
衛門

外國船擊攘
令の緩和

が盛に起り、文政八年幕府も攘夷の策を決して外國船擊攘の令を發し、支那・オランダ以外の外國船が我が海岸に近づけば、有無に及ばず一途に打拂ふことを命じ、沿海各地の防備を嚴にするに共に、要地には砲臺を築造するに至つた。併し、天保十三年、イギリスが阿片戰爭で清國を破り、餘威を我が國にも及ぼさんとする風説があつたので、幕府は外國船擊攘令を緩和、漂着船には薪水・食糧を給して去らしめ、暴行を働くものに限つて撃拂ふことに改め、益々防備

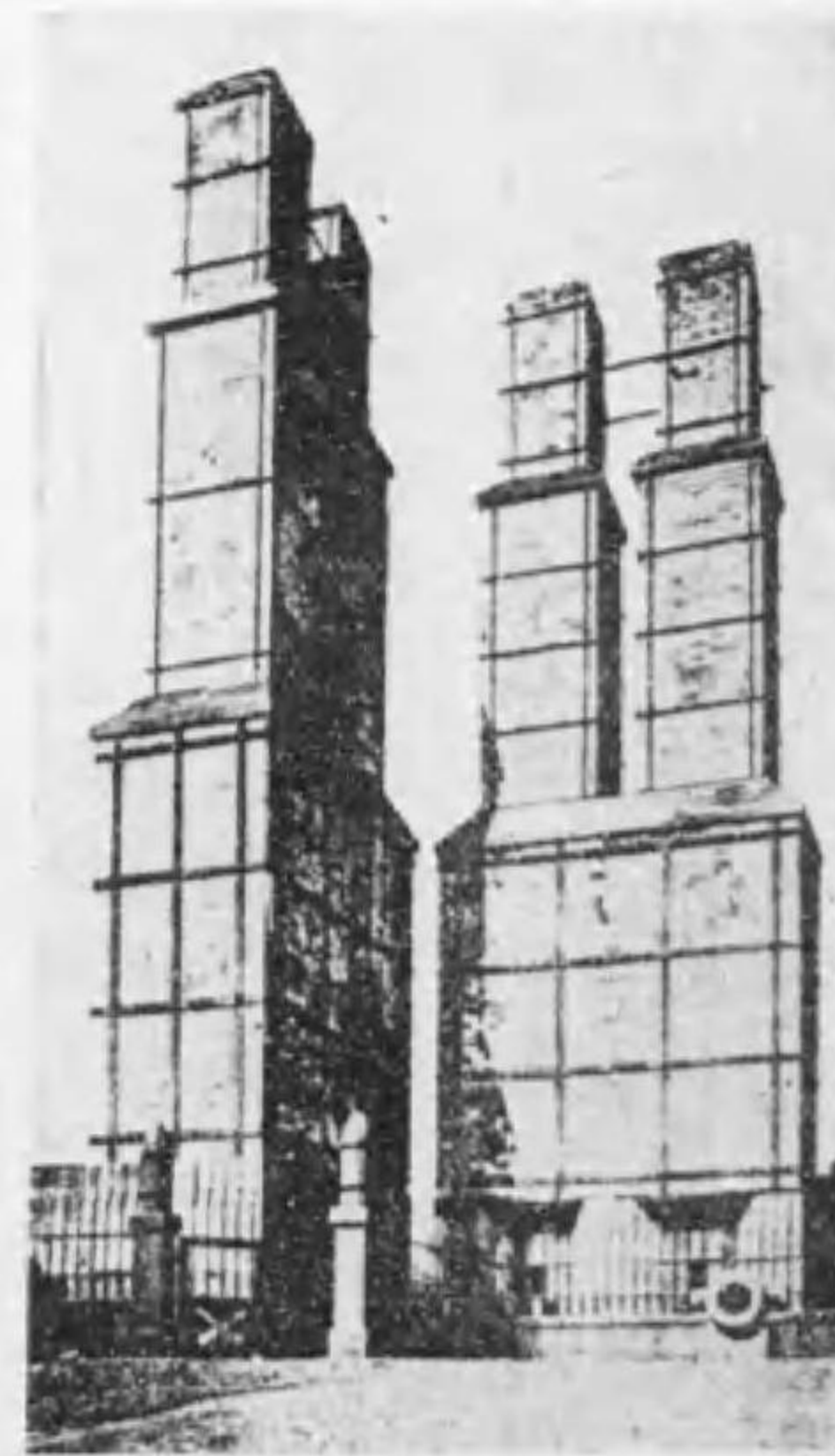


葦山反射爐

大名の海防

徳川齊昭

を嚴にし、高島秋帆を召して洋式調練を行はしめ、その弟子江川太郎左衛門は伊豆の葦山靜岡縣葦山町に反射爐を作つて大砲の鑄造を行つた。この頃大名の中にも海防に力めたもの少なからず、水戸の徳川齊昭は尊王愛國の至情よりはげしく攘夷論を唱へ、藩政を改革して武備の充實を計り、薩摩の島津齊彬シムギマキは海外の事情に通じて鎖國の到底維持すべからざるを知り、盛に西洋文物を採用して富強を圖り、國防の充實に努めた。



參照 尋常小學國史第四十七攘夷ニ開港

参考 ナポレオン一世の功業及び阿片戦争を参照して考察せよ。

第二十八章 開港の顛末

開國論

渡邊華山

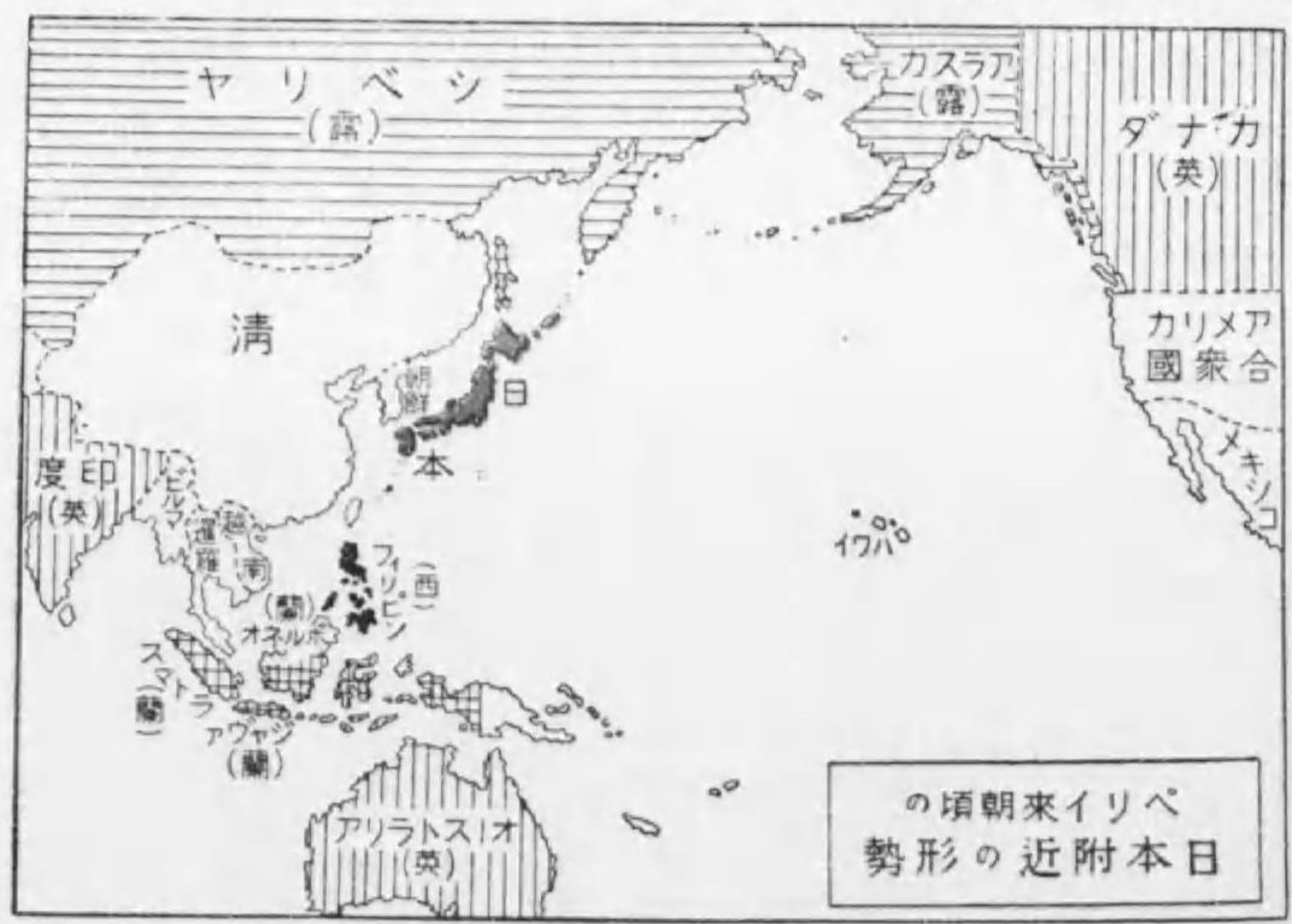


開國論と幕府の對外態度 この間にあつて、海外の事情に通ずる蘭學者の中には、攘夷を危険として寧ろ進んで開國し、彼の文物を採用して富國強兵を圖るべしと論ずる者もあり、更に進んで海外に發展して近隣の諸國を經略し、西洋諸國と對抗すべしと論ずるものも現はれ、天保十年、渡邊華山は慎機論を著し、高野長英は夢物語を書いて攘夷の不可を論じたので、遂に幕府の所罰をうけ、後何れも自殺して果てた。その後幕府は攘夷の令を緩めたが、弘化元年、オランダ國王ウィリアム二世が使を遣は

オランダの忠告

ペリ来朝の日本附近の形勢 幕府の無定見

して阿片戦争の顛末を報じ、汽船の發明も完成して四海比隣の世となつた時に於て、鎖國政策を墨守するの不利を説き、開國を勧めた際も、祖法の變ずべからざるを理由としてこれに従はなかつた。かくの如く幕府が世界の形勢を察せずして徒らに鎖國を守り、時勢に適應する國防の完備をなし得なかつたので、やがて外國の壓迫に抗する能はず、その強請のまゝに開港を餘儀なくされるに至



285 末顛の港開 章八十二第

アメリカ合衆國の發展

ペリー

ペリー來朝 (一八一三)

幕末關係要地圖

つたのである。

參照 尋常小學國史第四十八摺夷に開港つゞき

ペリーの來朝 アメリカ合衆國は、北太平洋に於ける捕鯨業や清國との通商のため我が國に寄港地を求め、且我が國との貿易の利をも占めんとして屢々使を送つて開港を求めしめたが、その效を見なかつたので遂に強請して目的を達せんとするに至り、水師



提督ペリーは嘉永六年軍艦四隻を率ゐて浦賀浦賀市横須賀市東南に來航した。而してペリーは幕府の長崎回航の要求を斥け、直接國書を將軍に呈せんことを主張して



幕府の態度

阿部正弘

幕威衰微の兆

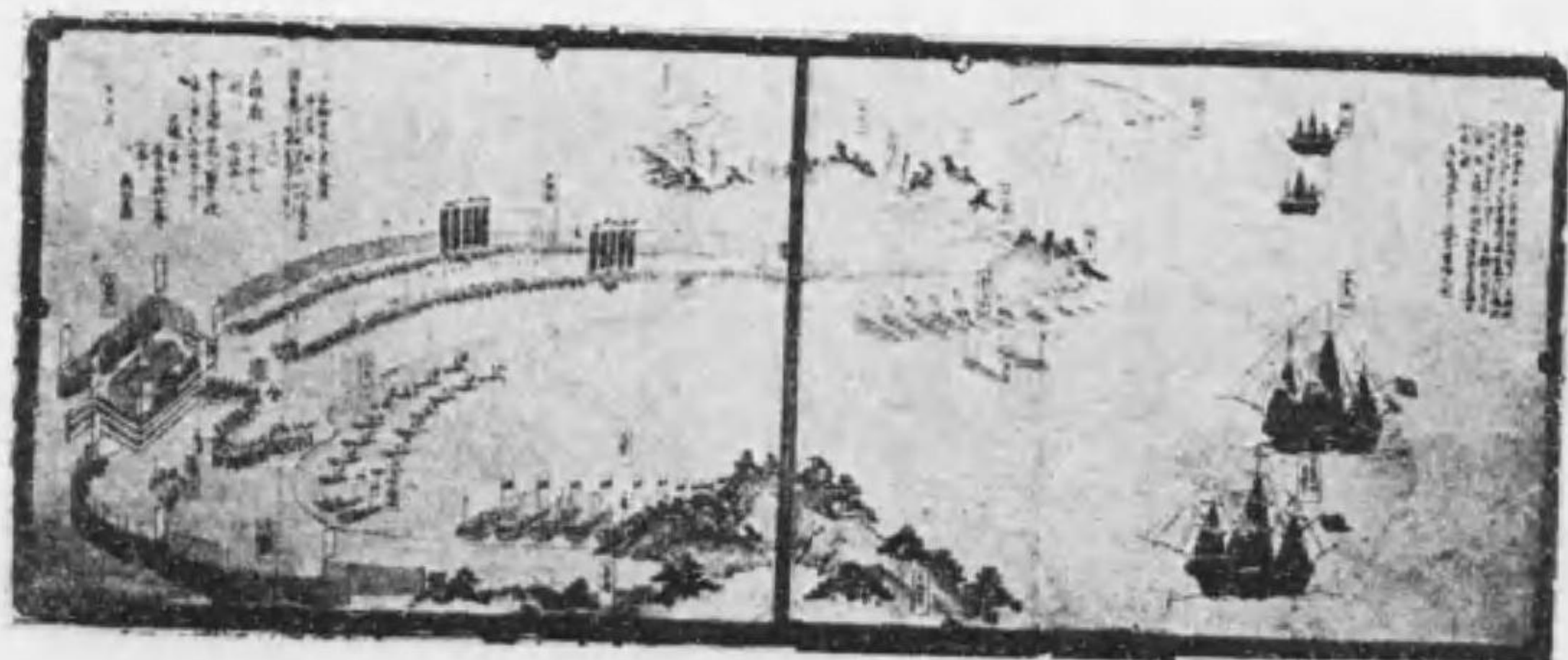


譲らず、兵威を示して威嚇したので、幕府は遂に前例を破り、浦賀奉行に命じて久里濱浦賀の南に會見せしめ、國書を受けて後、明年の回答を約せしめた。そこでペリーは艦隊を江戸灣深く進めて示威運動を行つて退去したが、幕府ではこの年就職した將軍家定が病弱であつたために、徳川齊昭を幕政に參與せしめ、老中阿部正弘をしてペリー來朝の事を朝廷に奏上させ、且諸侯の意見を徴した。これ實に幕府が國政に關して上天皇の叡慮を仰ぎ、下諸侯の議を求めた初であつて、幕威の衰微を暴露したものである。この時諸侯の意見は殆ど皆攘夷にあつたが、幕府の武備財政は

プチャチン
久里濱警固
の來航



到底開戦を許さないため、ペリー再來の際は確答を延引し、その間に防備を完成するここに決した。萬一の場合に備へるため、諸侯に命じて江戸灣附近の警備を嚴重にした。然るにアメリカ合衆國使節の來朝を聞いたロシアは、プチャチンに命じて軍艦四隻を率ゐて長崎に來航せしめ、國書を呈して和親通商を請ふたが、幕府は尙その要求に應じがたき旨を傳へて去らしめた。



史本日合軍制

日米和親條
約(二五一四)

ペリー應
答

親國との和

參照 尋常小學國史第四十八摺夷三開港つゞき

和親條約の締結



やがて翌安政元年正月早々、ペリーは軍艦九隻を率ゐて再來し、江戸灣深く進入して神奈川沖に碇泊し、昨年の回答を迫つた。幕府はその強硬な態度に恐れ、既定の方針を放棄し、彼の要求を容れて遂に和親條約を結び、下田靜岡縣函館函館市の二港を開き、薪水、食糧を必要に應じて給與すべきことを約したが、通商は祖法の嚴禁する所として未だ許さなかつた。これを神奈川條約といふ。ついでイギリスの將スターリングも長崎に來て我が國の諸港に出入の許可を求めたが、幕府はこれを拒絶した。函館長崎に於て缺乏品を給することゝを約し、ロシアのプチャチンも

再び下田に来て和親條約を結び、下田・函館・長崎の三港を開くこととし、オランダも翌年これと略々同様な條約を結んだ。茲に於て幕府は愈々武備充實の必要を感じ、江戸灣を始め各所に砲臺を増築し、武器軍艦の製造購入に努め、陸海軍の練習所を設けて西洋兵學を研究し、蕃書取調所を置いて新知識の輸入を計つた。併し、鎖國政策を固守してゐた幕府が一度ペリーの強請に逢ふや、忽ち既定の方針を變じて條約を締結した態度は、攘夷論者の憤慨を買ひ、水戸齊昭をして幕政參與を辭せしめたばかりでなく、開國論者からも攻撃さるゝ所となり、益々幕府の無力を暴露して國民の信頼を失ふに至つた。

參照 尋常小學國史第四十八開港と攘夷つゞき

通商條約の締結

和親條約の結果、アメリカ合衆國總領事ハリスは安政三年下田に着任したが、翌年江戸に上つて將軍に謁



した後、世界の大大勢と貿易の利益を説いて更に通商條約を締結せんことを切に勸告した。老中堀田正睦は勢止むべからざるを察してこれに同意し、委員を任命してハリスと共に條約の草案を議定せしめ、翌安政五年自らこれを

携へて京都に上り、勅許を仰ぎ奉つた。然るに當時一般に幕府の外交態度を難ずるものが多かつたため、朝議も國論定まつて後に勅許すべきであるとの説が多く、正睦は遂に更に諸侯と熟議して上奏すべきやう命を受けて空しく江戸に歸つた。かくて幕府は俄然窮境に立つに至つたので、彦根



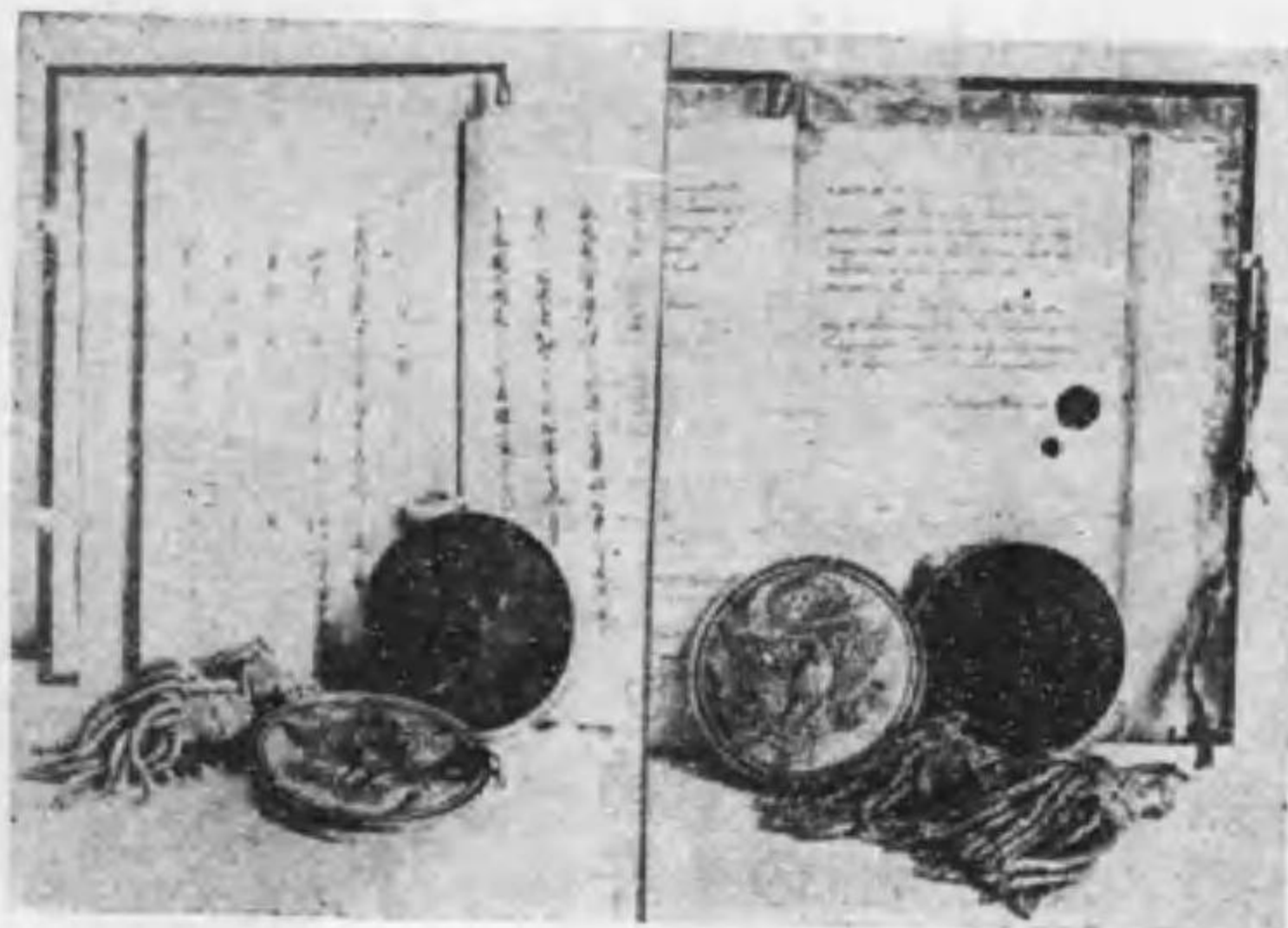
彦根縣
彦根町

城主井伊直弼

井伊直弼の
英断

を大老に任じて難局に當たらしめることになつた。直弼は文武の教養深く、世界の大事にも通じて居たから、あくまで勅許を待つて調印する覺悟であつたが、當時

イギリス・フランスの聯合軍が清國を大敗せしめた餘勢を驅つて我が國にも迫るこの報があり、ハリスはそれを理由に頻りに調印を促したので、内外の事情如何にもする能はず、責を一身に負うて勅許を待たず通商條約の調印を了した。これを安政假條約（二五七八）と稱し、江戸・大阪の二市及び函館・神奈川（後）の五港を開いて貿易を開始し、公使の駐在と治外法權を許し、貿易税率を定めた。かくて幕府は新



日米條約書

安政假條約
の調印
（二五七八）

横濱に
變更し

長崎・新潟

市・兵庫

市

神

戸

の五港を開いて貿易を開始し、公使

新見奉行一

幕府專断の
非難

に外國奉行を置き、つゞいて、オランダ・イギリス及びフランスも略々同様な條約を結び、愈々開國の第一歩を踏出し、萬延元年



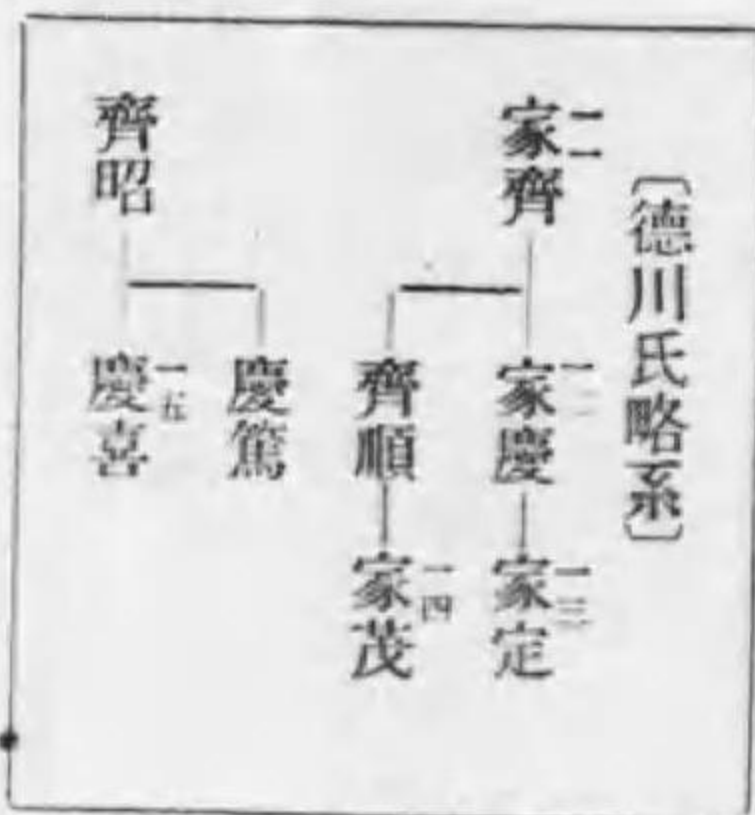
外國奉行新見正興等は合衆國の首府ワシントンに赴いて批准の交換を了した。

參照 尋常小學國史第四十八開港三
攘夷つゞき

參考 東洋史の英佛軍の支那侵略を
參照して當時の情勢を考察せよ。

幕府に對する反抗 直弼の

果斷によつて外國の壓迫は緩和せられたが、國內に於てはその專断に對する非難が諸方に起り、朝廷の憤激は申すまでもなく、尾張の徳川慶勝・水戸の徳川齊



んとするやうになり、天下の志士浪人は競つて京都に集まり、盛に公家の間に活動して尊王攘夷を説き、自然朝議も彼等の意見によつて決する有様となつた。そこで遂に國內和合して外夷の侮を受くる事なきやう、諸侯の群議を盡くすべき旨の勅諭を幕府に賜はると共に、



家諸大名等を罪し、志士多數を捕へて嚴刑に處したので、徳川慶勝・同齊昭・同慶篤の齊昭子・一橋慶喜・松平慶永等の諸侯は隠居・謹慎等を命ぜられ、橋本左内・吉田松陰・頼三樹三郎等の志士は斬首せられ、梅田雲濱は獄死した。これを安政の大獄といふ。このため



櫻田門外の
變(二五二〇)

直弼は愈々志士浪人の怨恨を深くし、萬延元年水戸の浪人等のために櫻田門外に暗殺せられ、幕府の威光はこれより大いに衰ふるに至つた。

參照 尋常小學國史第四十八開港ニ攘夷つゞき
參考 志士の詩歌

身はたこひ武藏の野邊に朽つるこも留めおかまし
大和魂 (吉田松陰)

浮雲の覆ふ姿はかはれきも萬世同じ天津日の影

(賴三樹三郎)

妻臥病床兒泣、挺身直欲當戎夷、今朝死別與

生別、唯有皇天后土知、 (梅田雲濱)

二十六年夢裡過、願思平昔感滋多、天祥大節嘗

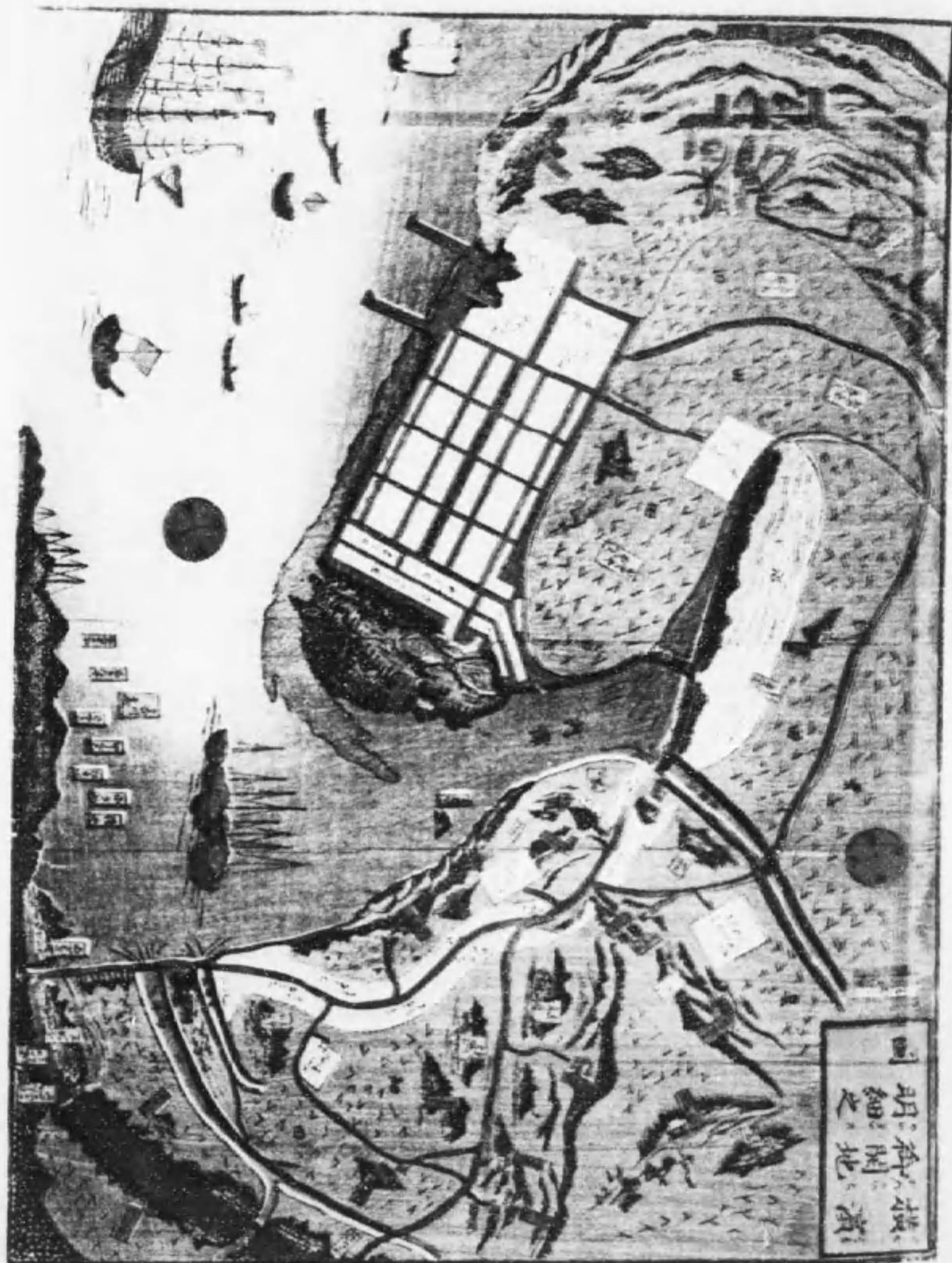
心折、土室猶吟正氣歌、 (橋本左内)



櫻田門の圖

開港の影響

開國以後の外交關係 安政假條約締結の後、幕府は安政六年先づ長崎・横濱・函館の三港を開いて下田を閉ぢ、同時に貿易が開



開港當時橫濱繪圖

竹内保徳一行

開港延期と
關稅減少



始されて、各港には内外の商人が集まつた。然るに當時は金の流出が夥しく、物價の騰貴を來たして國民の生活を脅し、その上、外國人は我が國を未開視して尊大横暴を極めたため、國民の排外熱甚だしくなり、到る所に外國人殺傷事件を續發し、幕府はその都度謝罪賠償に苦しんだ。そこで他の諸港を續いて開くは益々事を多くするものであるから、外國奉行竹内保徳等を全權公使として列國に遣はし、關稅の減少を條件に開港延期を承認せしめた。その結果關稅は五六分の低率となつて我が國の不利甚し

條約の勅許
二五二五

條約施行の
完成

く、明治の外交に難問題を遺すことゝなつた。その後慶應元年イギリス・フランス・オランダ及び北アメリカ合衆國の四國公使は軍艦を率ゐ、兵庫沖に至つて假條約の勅許を迫つたので、幕府はこれを朝廷に奏上し、朝廷も世界の氣勢に鑑みてその請を容れられた。かくて慶應三年に至つて大阪・兵庫を開き、明治元年江戸・新潟を開いたので、安政條約は完全に實施せられ、我が國は名實共に國を開いて世界列國との競争場裡に立つことゝなつたのである。

第二十九章 幕府の衰頹 大政奉還

政治中心の
移動

公武合體論の盛行 井伊直弼の横死は幕府の中心人物を失はしめて著しく幕威を失墜せしめたが、同時に幕府に反對する志士浪人の氣勢を強め、且朝廷の御威光を盛ならしむるに至つ

幕府の公武
合體策

た。このため志士浪人のみならず外様大名も兵を率ゐて上京するものが續出し、天下の大事は朝議で決せられる事となり、政治の中心は全く京都に移るに至り、徳和派は何れも公武合體を策し、急進派は遂に討幕を企て、國內の統一を圖らんとするやうになつた。幕府では直弼の歿後老中安藤信正が中心となり、公武合體によつて幕威を回復せんとし、將軍家茂に孝明天皇の皇妹和宮親子内親王の御降嫁を請ひ奉つた。朝廷でも内外の事情を察し、國論の統一を圖らんがためこれを勅許せられ、文久元年宮を東下せしめられたが、これを幕府の強要に出たものさ考へて憤激した浪人の一隊は、翌年信正を坂下門外に要撃して傷けた。當時京都に集つた志士浪人の中には、過激な討幕論を奉ずる者も少くなかつたので、薩摩の島津久光齊彬の弟、藩主忠義の父にして後見役は朝廷を戴いて幕政を改革せしめ、以つて國論の一和を計らんとし、

坂下門外の
變
二五二二

島津久光の
活動

島津久光

幕府の改革



松平慶永



文久二年兵を率ゐて上京し、勅命を奉じてこれ等の過激論者を抑へるご共に、公武合體の策を朝廷に進言した。そこで朝廷はこの議を納れられ、久光を護衛として勅使大原重徳を江戸に下し、幕政改革の勅旨を傳へしめられた。茲に於て將軍家茂は勅を奉じて一橋慶喜を後見とし、松平慶永を政治總裁職とするご共に、朝廷に對する從來の儀禮を改めて尊崇の實を挙げ、大名に對しては參觀交代の制を弛め、妻子の歸國を許して優遇を圖り、安政の大獄以來處罰された人々を赦して人心を和ぐるに努め、頻りに國論の統一と公武合體の實現を企てるに至つた。

尊王攘夷論の興隆

薩長三藩の鼎立

松平容保

京都の状況



攘夷・討幕派の全盛 然るに長州藩は攘夷を強調して討幕を企てんとしてゐたので、同じ年藩主毛利慶親が上京するや、討幕派の志士浪人等はこれと結んでその勢隆盛を見ることゝなつた。そこで朝廷では、薩長兩藩の軋轢を憂ひ給ひ、別に土佐藩を招かれたので、藩主山内豊範は直らに上京して國事に盡くすことゝなり、京都は薩長土三藩の鼎立を見るに至つた。これに加ふるに討幕派の志士浪人に交つて浮浪無頼の徒の跋扈横行甚だしく、放火・暗殺等盛に行はれて京都の人心は頗る不安を極めたから、幕府はこの三藩に對抗して不

攘夷の實行

三條實美



安を除かんとし、新に會津會津藩藩主松平容保を京都守護職に任じ、次いで浪人を集めて新撰組を組織し、これが別動隊たらしめた。かくて朝廷に於ても三條實美等の急進派が勢力を得て公武合體派が斥けられ、再び實美を勅使とし、山内豊範を護衛として東下せしめ、幕府に攘夷實行を命ぜられるに至つた。そこで將軍家茂は翌文久三年に上京し、事情を述べて猶豫を請はんとしたが、遂に勅命を奉ぜざるを得ざるに至り、五月十日をその期と定めて諸藩に布告した。茲に於てその期に至るや、長州藩は下關海峡を通過する列國の船を砲撃して攘夷の魁をなし、ついで薩摩藩は鹿兒島灣に迫つたイギリスの軍艦を撃退した。このイギリスの軍艦は、さきに久光が勅使に従つて東下の歸途

生麥事件

攘夷親征の議

七卿落の圖

尊王討幕派の失脚



武藏の生麥横濱市東北でその行列を横切つたイギリス人を彼の従士が殺傷したので、その問責のために來航したものである。かくの如き形勢は益々攘夷討幕派の意氣を盛ならしめ、遂に攘夷親征の朝議を決せしむるに至り、天皇は大和に行幸して神武天皇御陵に御参拜遊ばされ、軍議を練つた上で伊勢神宮に行幸遊ばさるべきことに決した。而もこれ實に攘夷に名を借りて、討幕

を實行せんとする企であつて、この派の中心たる長州藩の勢力はこの頃その絶頂に達した。

參照 尋常小學國史第四十九孝明天皇

公武合體派の再興 これを知つた薩摩藩は過激なる攘夷討幕が却つて國家を危くするを憂へ、且天皇

諸藩皇居守護圖

公武合體派の再盛



の叡慮も其所にあるを伺つたので、八月、中川宮朝彦親王後の久及び穩和派の公家と相應じ、松平容保と謀つて勅許を得、朝議を一變して大和行幸を中止し、長州藩の京都警衛を免じ、三條實美以下の公家を斥けるに至つた。このため長州藩士は同志の公家七人を奉じて歸國し、尊王攘夷派の勢力は一朝にして瓦壊し、再び公武合體派の勢力が盛になつた。そこ

公武合體の實行

で翌元治元年、將軍家茂は再び上京して優渥なる勅を拜し、改めて諸政御委任の命を賜はり、御料を増獻して尊崇の意を表し、公武合體の實を擧ぐるに努めた。而して一橋慶喜は禁裏守衛總督に任ぜられ、幕兵と共に會津・桑名・薩摩その他各藩の兵を統率して皇居を守護し奉ることゝなつた。

討幕派の擧兵

討幕派の擧兵と長州征伐 この前後に於て討幕攘夷派の志士は大和の五條奈良縣五條町・但馬の生野兵庫縣生野町・常陸茨城縣の筑波山等に兵を擧げたが、何れも程なく敗れて終つた。又長州藩は朝議の一變を遺憾とし、元治元年福原越後等の三家老が兵を率ゐて上京し、冤を朝廷に訴へて宮門に迫つたので、慶喜は勅命により諸藩の兵を率ゐて防戦し、遂にこれを撃退した。これを元治の變、又は蛤御門の變といふ。こゝに於て長州藩は朝敵の汚名を蒙るに至つたため、幕府は勅命を奉じて長州征伐の軍を起し、徳川慶

第一回長州征伐 (二五二四)

元治の變 (二五二四)

徳川慶勝

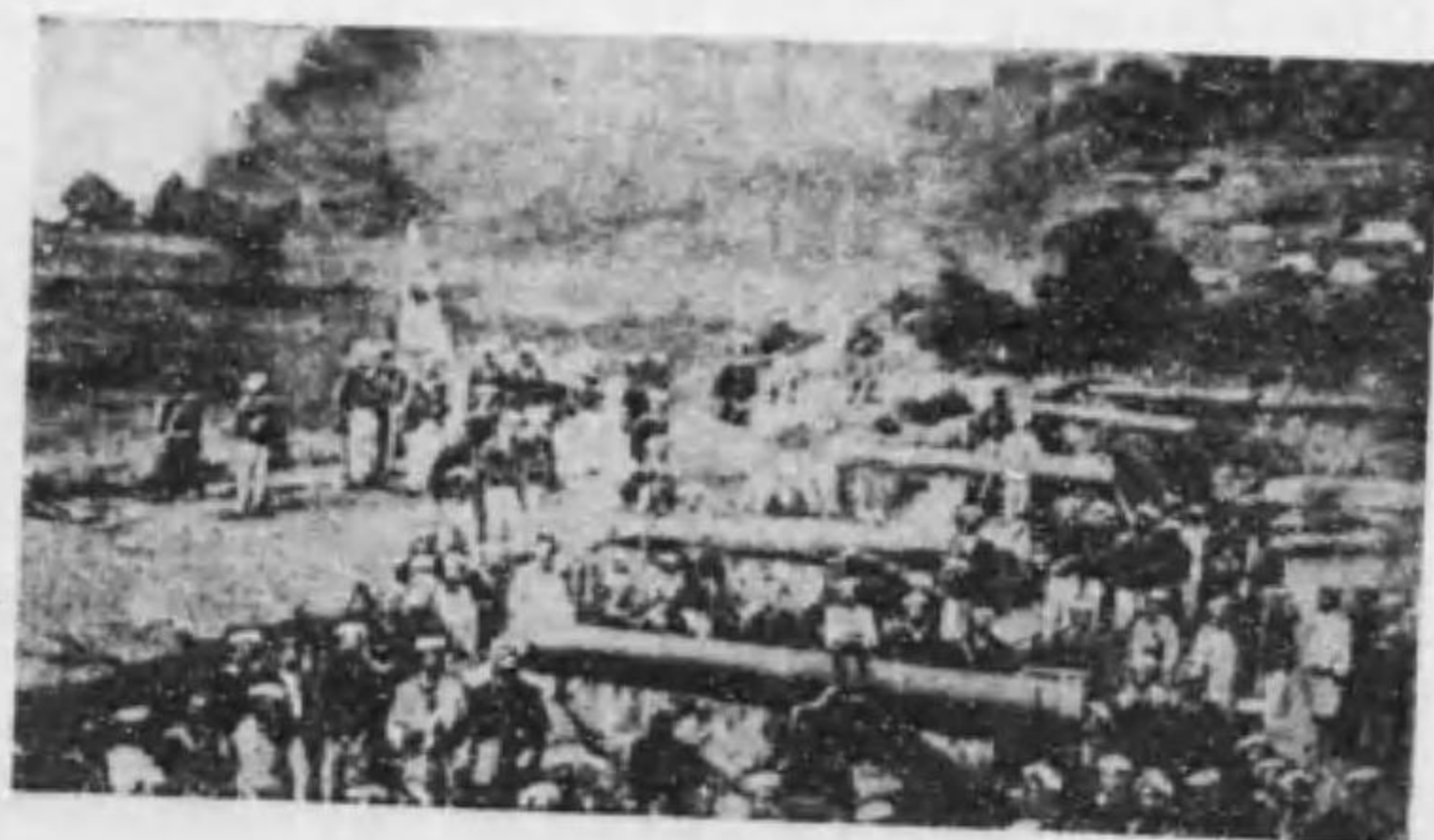


勝は總督として諸藩の兵を率ゐ、四方よりその國境に迫つた。然るに當時長州藩は攘夷實行の期に砲撃したイギリス・フランス・オランダ・北アメリカ合衆國の四國聯合艦隊に攻められて

四國聯合艦隊下關占領

第二回長州征伐(二五二五)

下關を占領され、窮境に陥つてゐたので、三家老の首を送つて罪を謝し、恭順の意を表した。慶勝は國家多事の際、戦を開くを好まなかつたから、これを赦して凱旋したが、長州ではこの恭順を喜ばぬものが多く、慶應元年高杉晋作等は再び戦備を整へて兵を擧げたので、幕府は再征の軍を起し、翌年將軍家茂は親征して



高杉晋作

大阪城に入つた。かくて幕軍は再び四方から長州に迫つたが、薩摩藩を初めとして出兵を肯ぜぬ大名もあり、幕軍は至る所に敗れ、幕府の無力を天下に暴露するに至つ



た。偶々家茂が大阪城に薨じたので、慶喜が宗家を継ぎ、朝廷に奏して征長の軍を解いた。其後間もなく天皇は慶喜を將軍に任ぜられたが、俄かに崩御遊ばされ、明治天皇が御年十六歳を以て御踐祚になつた。

慶喜の就職と明治天皇の御踐祚

孝明天皇



參照 尋常小學國史第四十九孝明天皇

王政復古
の興隆

岩倉具視

薩長・二藩
の討幕運動

坂本龍馬

大政奉還



この間に無力なる幕府を倒して朝廷を中心に舉國一致を圖り、以て國政の基礎を確立して諸外國に對立せんとの説が次第に盛になり、公家では岩倉具視が時勢を察して三條實美と謀を通じ、大名でも薩摩藩が土佐藩の坂本龍馬等の斡旋によつて長州藩と近づき、長州再征の頃には、長州の木戸孝允、薩摩の西郷隆盛、大久保利通等の間に聯合の約が成立し、相共に王政復古のため討幕の議を進めるやうになり、慶應三年十月遂に討幕の密勅を薩長兩藩主に賜はるに至つた。然るに坂本龍馬は又別に王



土佐藩の
大政奉還の
勸告

徳川慶喜
大政奉還
二五二七

政復古を計り、公議を盡くして天下の政を行はんとの説を持して居たので、同藩の後藤象二郎はかつて、前藩主山内豊信トヨシノブに説き、幕府に大政奉還を勸告せしめた。豫てから尊王の志篤き慶喜は直ちにこの議を容れ、幕臣に諭し、諸侯に謀つた上、慶應三年十月十四日愈々これを奏請し奉つた。恰も薩長二藩に討幕の密勅の下つたその日である。かくて翌日天皇はその請を御許しになつたので、討幕の計畫は中止せられ、家康より十五代二百六十餘年にして江戸幕府は亡び、同時に鎌倉幕府以來六百七十餘年繼續した武家政治も廢せられて、天皇御親政の古に復することゝなつた。かくの如き大改革が平和の中に成就したのは、全く諸外



國に例を見ない所で、歴代天皇の御稜威と身命を捧げて活動した公家・大名・志士・浪人等の力によるは言ふまでもないが、慶喜が一家の名利を棄て、大政を還し奉つた功も、亦頗る大であると言はねばならぬ。

參照 尋常小學國史第五十武家政治の終

參考 世界各國の革命及び大化改新と比較考察せよ。

德川氏の處分 大政奉還後、德川氏は單なる一大名となり、朝廷に於ては從來國事に盡くした公家・大名・陪臣等が大政に與かり、次第に新政の基礎を定められた。然るに慶喜は全く朝政に與らぬ上、薩摩藩の議により内大臣の官を辭し、領地を返納すべき命を傳へられた。慶喜は謹んでその命を奉ぜんとしたが、舊幕臣等は薩摩藩の專斷を憤慨することが甚だしかつたので、事變の發生を憂ひ、京都二條城から大阪城に退いた。然るに薩摩

薩摩藩の事
横

鳥羽・伏見
の戦
二五二八

藩は更に浪人を使つて江戸を騒がし、事變を激發して德川氏を窮地に陥れんとしたので、慶喜も部下の憤激を抑壓することが出来ず、遂に明治元年正月、舊幕臣及び會津・桑名二藩の兵に擁せられ、討薩の表の捧げて京都に向つた。薩長二藩はこれを鳥羽・



伏見に邀へ撃ち、朝廷は仁和寺宮嘉彰親王後の小松宮 彰仁親王を征討大將軍に任じて軍を統率せしめられたので、德川氏の軍は敗れて大阪に退き、慶喜は海路江戸に歸つた。これを鳥羽・伏見の戦とい

ふ。茲に於て朝廷は有栖川宮熾仁親王を東征大總督、西郷隆盛等を參謀とし、諸藩の兵を率ゐて德川氏を討たしめられた。これに對し舊幕臣等は皆防戦を主張したが、慶喜はこれを斥けて上野寛永寺に閉居し、恭順の意を表して、部下の輕舉を戒め、後事

有栖川宮

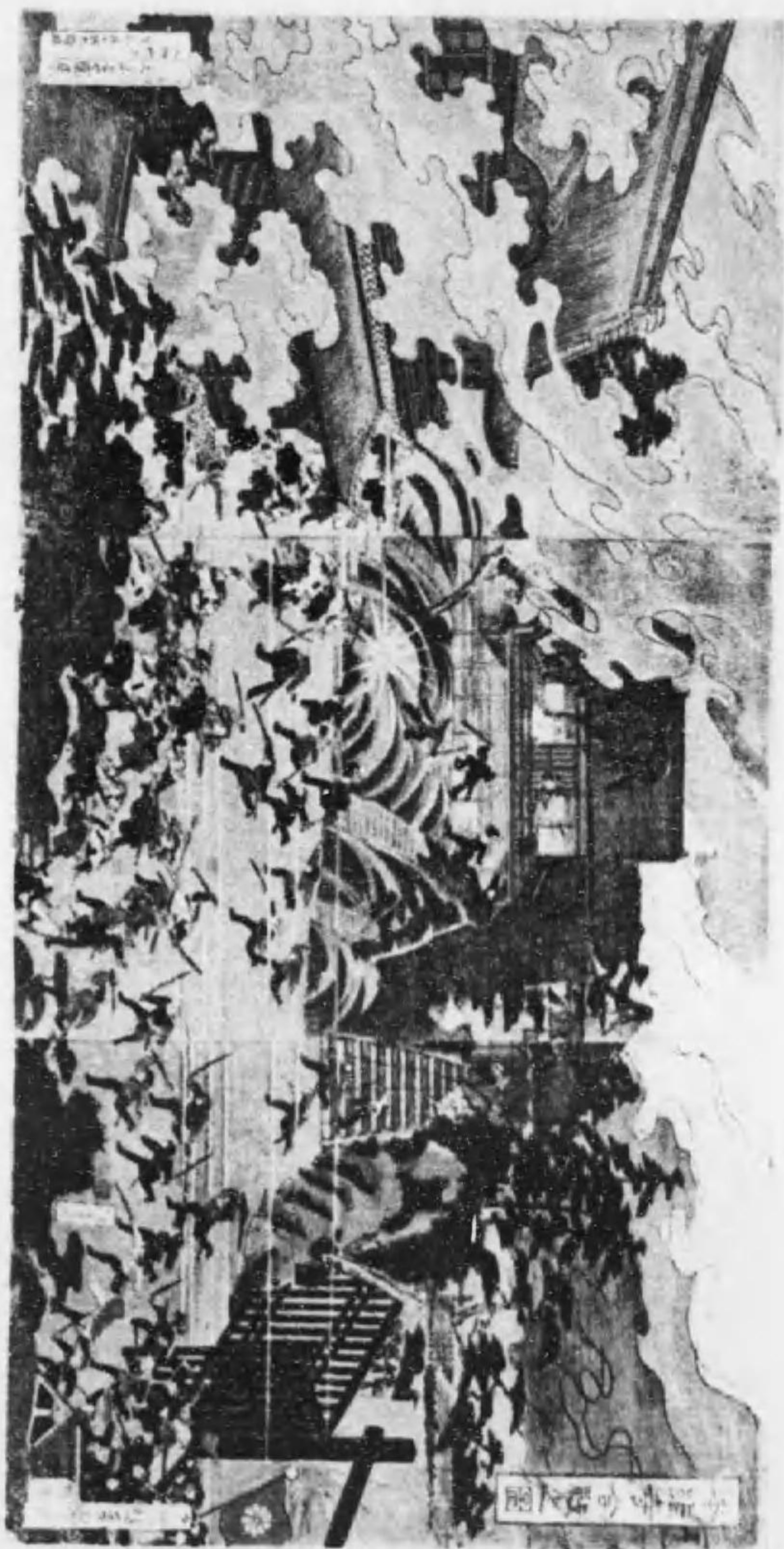
德川氏追討

徳川氏及江戸城の處分
三五二八

舊幕臣の反抗

奥羽の亂

をその臣勝安芳に委せた。そこで安芳は慶喜の意を體し、隆盛と會見して、寛大の處置を請うた。隆盛もその誠意を知り、内外の形勢を慮つて江戸の攻撃を止め、勅裁を仰いだので、朝廷は徳川氏の軍艦兵器を收め、慶喜を水戸に蟄居せしめて、後を田安家達に相續させ、駿河・遠江七十萬石の領地を賜はるに決し、江戸は兵火の難を免れるを得た。然るに慶喜の恭順を喜ばない舊幕臣の一部は、彰義隊を結んで上野東京市下谷區寛永寺に據り、大鳥圭介等は宇都宮宇都宮市に籠つたが、間もなく鎮定された。又松平容保は會津に歸つて謹慎してゐたので、仙臺・米澤等の諸藩は上書してその赦罪を請うたが許されなかつた。ゆゑ、諸藩聯合して兵を擧げた。そこで官軍は更に進んでこれを討伐したので、諸藩は順次に恭順の意を表はして降服し、十月には奥羽地方悉く平定した。これより先、幕府の軍艦八隻を率ゐて品川を脱走した榎本



彰義隊合戦の圖

五稜廓の戦

全國平定
二五二九
五稜廓

武揚等は函館に至り、五稜廓を根據として蝦夷島の大半を従へ、



徳川氏の胤を奉じてその開拓と警備に當たらん事を請うたが許されず、官軍のため海陸より攻められて翌二年五月遂に降服した。かくて各地の戦亂悉く治まつて全國平定に歸するこゝなつた。此等の戦亂を明治戊辰の役と稱する。この間に明治の新政は着々行はれてゐたのである。

参照 尋常小學國史第五十武家政治の終

第三十章 明治維新

明治維新 明治天皇は慶應三年十二月九日、王政復古の大號

令を發せられ、神武天皇の御創業に基づき、從來専ら政に當たつてゐた攝政・關白及び征夷大將軍等の諸官職を廢して、天皇御親政の規模を立てられ、假りに總裁・議定・參與の三職を置き、總裁には有栖川宮熾仁親王を任ぜられ、議定には親王・公家・大名・參與には諸藩士等の國事に盡くしたものを選んで任ぜられた。而して翌年三月十四日には三職以下公家諸大名を率ゐて紫宸殿に御し、親しく天神地祇を祭つて五事を誓ひ給ひ、併せてこれを群臣に宣せられた。

- 一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ
- 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ
- 一 官武一途庶民ニ至ルマデ各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス
- 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ



一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ
我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ
天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ン
トス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

戊辰三月 御諱

世に之を五箇條の御誓文といふ。王政の古に復するに共に、開國進取の策を立て、諸事を一新せんことを大方針はこゝに確立せられ、將來百般の新施設は悉くこの御趣意によることとなつた。かくて八月には古制によつて即位の大典を擧げ

東京奠都
二五二九

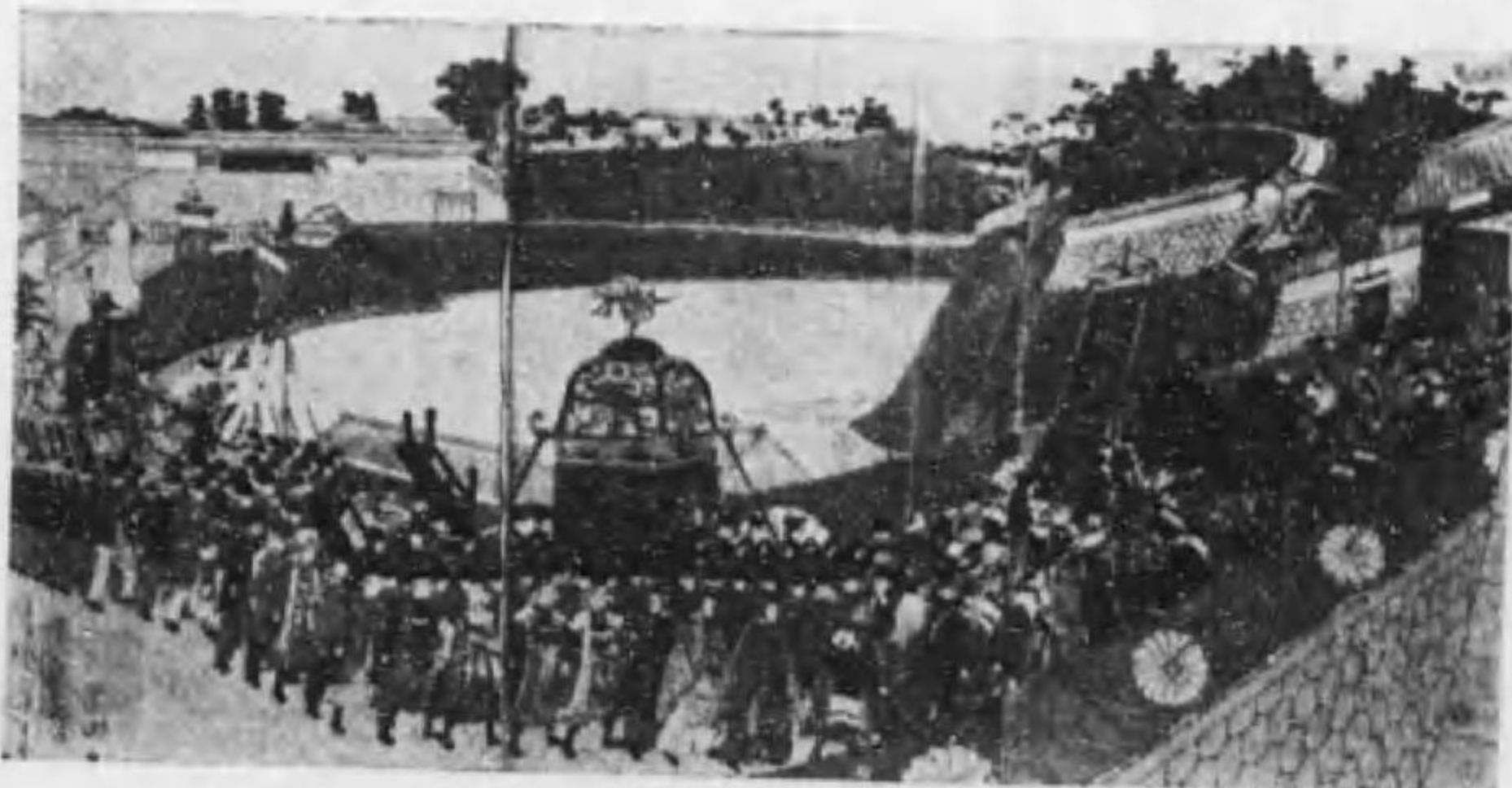
させられ、九月には慶應四年を改めて明治元年とし、新に一世一元の制を定められた。次いで天下の人心を一新するため江戸を改めて東京とし、十



御東幸の圖

明治初年の
東京城

月こゝに行幸して江戸城を東京城と改めて皇居とし、十二月、一旦京都に御還幸になつたが、翌年三月再びこゝに入御あらせられ、その後永く皇居と定められたので、東京は新しき日本の帝都



而して、これと前後して盛に西洋諸國の長

を採つて各種の改革を續々斷行され、我が國は全くその面目を一新するに至つた。故にこの頃の改革を大化改新に對して明治維新と稱する。

參照 尋常小學國史下卷第五十一明治天皇一、明治維新
參考 明治維新と大化改新を比較考察せよ。

中央官制の改革 王政復古の大號令と同時に假に三職の制を立てられたが、その後中央官制には屢々改正が行はれた。即ち明治元年政體書を發布されて政治運用の原則を定め、太政官を置いてその下を議定刑法行政神祇會計軍務外國の七官に分ち、議政官は立法刑法官は司法、その他の五官は行政に當たることとして三權分立の基礎を立てられたが、明治二年に至り、大寶令の制に準じて上に神祇太政の二官を置き、下に民部大藏兵部刑部宮内外務の六省を設け、太政官には左右大臣大納言參議等

三權分立の
基

二官六省の
制



太政官代の改廢

を、各省の長には卿を置き、その後新に工部・文部の二省を増し、刑部を司法と改め、民部省を大藏省に合併した。かくて明治四年には太政官を正院及び左右兩院に分ち、左院は立法府として議長・議官を置き、右院は審議の府として大藏・兵部・司法・宮内・外務・工部・文部の各省長官の政務を議する所とし、中央官制はほゞ整つた。その後時勢の進運に伴つて部分的改正は屢々行はれ、兵部省が陸・海軍兩省に分かれ、内務・農商務の兩省が新設され、神祇官が廢せられて省となり、間もなく教部と名を改め、ついで内務省に合併され、左右兩院が廢せられて元老・大審の兩院となつたが、太政官制の根本に於ては變ることなく、以て明治十八年の内閣



制度の創立にまで至つた。

地方制度の改革 天下の大政は朝廷に復したけれども、その直轄する所は幕府及び旗本等の舊領地のみであつて、これを府・縣に分け、知事を置いて治めさせ、諸大名の領地は從來の儘だつたので、地方區劃は府・縣・藩に三分せられ、中央政府の政令は全國劃一に行渡らず、且國家の財政も頗る困難であつた。そこで參與木戸孝允は諸藩の版籍を奉還せしめんとして議定三條實美・岩倉具視に建言し、參與大久保利通と謀つて各々その藩主に説く所があつた。茲に於て明治二年長州の毛利敬親・薩摩の島津忠義・土佐の山内豊範・肥前の鍋島直大の四藩主は、率先連署して版圖・戶籍を奉還せんことを奏請し、他の諸藩も多くこれに倣

つたので、朝廷はこれを許して奏請なき藩には奉還を命じ、暫く舊藩主を知事としてその舊領を治めさせられた。かくて封建制度は廢せられて全國の土地人民は悉く朝廷に歸し、政令一途に出づることゝなつた。併し因習久しきに及ぶ知事士民間の主従の情實は一朝には改まらず、且藩の大小不同頗る多く、その管地の位置境界も犬牙錯綜してゐて、施政上の不便が少くなかつた。そこで更に木戸孝允は、大久保利通、西郷隆盛、板垣退助等と謀り、三條實美、岩倉具視等とも議して勅裁を仰ぎ、明治四年、各藩知事を朝廷に召してその職を解き、これを東京に移住せしめて廢藩置縣を斷行した。かくて大いに地方區劃を整理して三府七十二縣とし、府知事、縣令を任命して各管内の政治を執らしめたので、中央集權の制は名實共に確立することゝなつた。その後縣令は縣知事と改まり、區劃も屢々變改せられて明治二十

二年に初めて三府四十三縣となつた。

參照 尋常小學國史下卷第五十一明治天皇一明治維新

參考 大化改新の公地公民の制と比較考察せよ。

改革の反動

王政復古以來、政治上の大改新を斷行すること共に、後に述べる如く開國進取の大方針によつて諸外國とも交を結び、社會の制度・風習の上にも甚大なる變化を齎らすに至つたので、久しい因習に囚はれて封建鎖國の前代を慕ひ、保守を事として革新を喜ばず、頑迷無智より新政を誤解するものも多く、又百事草創の際にて政見を異にして相衝突するものもあつて、各地に大小種々の暴動が頻りに起つた。殊に明治六年朝鮮の暴戾を膺懲せんとする征韓論が盛になり、この派の急先鋒參議陸軍大將西郷隆盛を始め、板垣退助、副島種臣、後藤象二郎、江藤新平等の各參議が廟議合はずして野に下つてからは、これ等の人々

佐賀の亂

熊本・萩等の亂

西郷隆盛



の出身地に近い西南地方の風雲穩かならず、遂に騷亂の續發を見るに至つた。即ち明治七年には、佐賀に江藤新平を首領とする征韓黨と、島義勇を盟主とし、封建の昔に復せんとする憂國黨とが相合して暴動を起し、縣廳を襲撃したが、間もなく敗れて新平、義勇等は處刑せられ、次いで明治九年には、熊本に歐米の模倣を嫌ひ政府の平和的政策を憤る士族等の神風連が亂を起し、各所に放火して縣廳等を襲ひ、多くの官吏を殺傷し、筑前福岡の秋月や長門山口の萩にもこれに應じて暴動が起つたが、何れも直ちに平定せられた。

●西南の役 然るに明治十年に至り、西郷隆盛を擁してその郷黨鹿兒島の人々が反亂を惹起し、遂に西南の役の勃發を見るに

鹿兒島私學校の設立

私學校綱領

私學校址
鹿兒島市

私學校生徒の擧兵

至つた。隆盛はその主張する征韓の説が政府の容るゝ所とならなかつた、め、職を辭して鹿兒島に歸り、國家のため將來有爲の人物を養成せんとして私學校を建て、郷黨の青年教育に力を盡くした。

て居たが、その名望を慕つて集まる血氣の生徒は政府の處置を憤ること甚だしく、熊本、萩等の騷亂が勃發すること共に、これに應じて事を擧げようとした。併し隆盛は頻りにその輕舉妄動を警めて育英に努めてゐ



西南役要地
反亂勃發
(二五三七)



隆盛の熊本
城攻圍

たが、政府はその形勢を危ぶんで、明治十年鹿兒島にあつた陸軍
 彈藥庫の彈藥機械を大阪に移さうとしたので、私學校生徒は怒
 つてこれを掠奪し、又海軍の機械所をも占領して兵を擧ぐるに至
 り、隆盛も勢遂に止むべからず、その首領に擁せられることとなつ
 た。かくて政府に問ふ所ありと號し、一萬五千の兵を率ゐて二
 月鹿兒島を發し、進んで熊本城を圍んだが、當時此處を守つてゐ
 た陸軍少將谷干城は、寡兵よく守つて屈せず、當時大和に行幸中

征討軍の派
遣

谷干城



であつた天皇は、車駕を京都に留めて征討の事を議せられ、有栖
 川宮熾仁親王を征討總督とし、陸軍中
 將山縣有朋、海軍中將川村純義を參軍
 に任じ、諸軍を率ゐてこれを討たし

戦況の概要
熊本市

められた。茲に於て官軍は高瀬より
 山鹿・田原坂の險を抜き、植木・木留等に
 戦つて次第に熊本に迫り、陸軍中將黒
 田清隆は別に海路より八代に上陸し、
 宇土に進んで賊軍の背後を衝き、熊本
 城の危機を救つたので、官軍の勢大い
 に振ひ、賊軍は圍を解いて逃れ、宮崎・延岡等に轉戦の末、再び鹿兒



島に歸つて城山に據つた。そこで官軍は進んでこれを圍み、隆盛以下勢窮つて遂に自及し、九月に至つて亂は全く平定した。從來政府に不満を懷くものは兵力に訴へてその政見を貫かんとする風が盛であつたが、この役の結果、その不可能なることが明かになつたので、この後は反亂を企てるもの全く絶え、政見を争ふものは言論の力に頼るやうになり、従つて政論が流行し、代議政治の要望が著しくなつた。

參照 尋常小學國史第五十一明治天皇二西南の役

第三十一章 明治初年の外交

西洋諸國との修交 王政復古の大業は主として尊王攘夷論者の手に成つたから、この頃なほ鎖國攘夷を思ふものが多く、士民の間にも外國人を殺傷する者が少くなかつたが、朝廷は世界



の大勢を察して断然開國進取の方針を採り、明治元年外國事務總裁を置き、諸外國と和親を結び、外交の事は總て萬國公法に従ふべき旨を布告し、次いで天皇は京都に西洋諸國公使を召して、紫宸殿に引見せられた。かくて明治三年にはイギリス・フランス・ロシア・アメリカ合衆國に公使を派遣駐割せしめ、翌四年には右大臣岩倉具視を特命全權大使とし、木戸孝允・大久保利通・伊藤博文・山口尚芳を副使として歐米諸國に派遣し、さきに幕府の結んだ條約の不利な點を改正せんことを企てた。併し具視の一行は條約改正の困難な事情が明かになつたので、各國を歴訪してその文物制度を視察し、

清國と條約
の締結
(二五三)

副島種臣

生蕃の殺害
事件



六年に至つて歸朝した。かゝる間に國民も次第に西洋人と和親するやうになり、外交も圓滑に行はるゝに至つた。

清國との修交と臺灣事件 西洋諸國との交際と共に、政府は東洋隣接諸國との修交にも力をつくし、明治三年清國に國書を贈り、翌年大藏卿伊達宗城を欽差全權大臣として北京に遣はし、修交通商の事を議せしめて條約を締結した。これが我が國の進んで外國と條約を結んだ始である。偶々この年琉球の民五十餘名が臺灣に漂着して生蕃に殺害されたが、琉球は古くから薩摩藩に屬して居り、臺灣は當時清國の領土だったので、政府は明治六年、外務卿副島種臣を特命全權大使として清國に遣はし、さきの條約の批准交換と共に生蕃の事を談判させた。然る

西郷從道
大久保利通
(上)
(下)

臺灣征伐

臺灣征伐圖



臺灣征伐要地圖
我軍進路



に清國は生蕃を化外の民として責任を回避したので、同年再び備中の民が漂流して掠奪に遭つたのを機會に、翌七年陸軍中將西郷從道を都督とし、海陸の兵を合せて臺灣征伐の軍を起し、臺灣の南端恒春附近に上陸して附近の

諸蕃を征服し、進んで徐ろに拓植の計を立てようとした。然るに清國は俄に態度を變じて臺灣の領有を主張し、我が國の出兵に抗議を提出したので、政府は參議大久保利通を全權辨理大臣として清國に遣はし、北京に於て彼と談判させた結果、償金五十

萬兩約七千萬圓を出し、生蕃の監督を嚴にすることを約して落着した。



朝鮮との修交と征韓論 朝鮮との修交は、江戸時代に於て將軍家齊の時からその使節の來聘が中絶してゐたので、明治元年對馬の宗氏を遣はして隣交を復せしめようとした。然るに朝鮮では、當時國王李熙が幼少なため、生父大院君李昰應カマウが政を攝し、保守的な政を行つて西洋人を嫌ひ、我が國が歐米諸國と國交を結んだのを卑んでゐたので、我が書式が舊例に



違ふこと受付けず、その後屢々使を遣はして修交を勧めても頑として應ぜざるのみか、我が使節を辱め、我が商人の出入を禁ずる等、我が國の面目を傷けることが夥しかつた。そこで我が國では上下を擧げてその無禮を憤り、征韓の論が盛になつて廟議もこれに傾いたが、岩倉大使の一行が歐米諸國の文物の發達を視察して歸朝するや、内治を整へることの急務なるを論じて極力この議に反對し、大久保利通、木戸孝允、大隈重信等皆この説を執り、兩派互に相降らなかつた。併し、偶々三條實美が急に病んで具視が太政大臣を代理することゝなつたため、遂に征韓の議は否決され、西郷隆盛

以下征韓を主張した参議は連袂辭職して下野し、一時物情騷然たるものあるに至つた。其の後、我が政府は平和な手段で修交恢復を圖つてゐたが、偶々明治八年我が雲揚艦が清國に向ふ途中、朝鮮の江華島で突然砲撃を受けたので、政府は翌九年参議黒田清隆を特命全權辨理大臣として朝鮮に遣はし、彼の不法を責めると共に修好の事を議せしめた。こゝに於て朝鮮も遂に我が要求を容れ、その暴舉を謝して修好條約を締結し、釜山の外新に元山・仁川の二港を開くことを認めた。從來朝鮮は清國の保護を受け、清國はこれを屬國視してゐたが、この條約によつて我が國がその獨立國たることを承認したので、この後歐米諸國も相次いで條約を締結するに至つた。

北海道の開拓と日露國境の確定 維新以來、政府は江戸幕府の業をつぎ、明治二年函館の戦亂が治まつてから開拓使を置い



て蝦夷樺太兩島の經營を掌らせ、蝦夷を北海道と改めて十一箇國に分けたが、翌三年黒田清隆が開拓使次官に任ぜられ、開拓の方針を確立して交通産業の興隆、アイヌ人の教化、内地人の移住に努力するに及んで、その成績漸く擧がり、七年に清隆は開拓使長官に進み、次いで東北地方の士族を募つて屯田兵を置き、警備と開拓を兼ねしむることとなつた。かくて拓植の事業は益々進んだので、明治十五年開拓使を廢して後北海道廳を設け、屯田兵も廢せられて師團が置かれるに至つた。又安政元年日露和親條約締結の際、樺太は兩國の共有と定められたが、その後間もなくロシアの東部シベリヤ總督ムラヴィヨフは、愛瑣條約により沿海州一帯を清國と共有と定めたので、勢に乗じて安政六

Muraviev

我が政府の
經營
榎本武揚



年軍艦を率ゐて來朝し、樺太全島の領有を主張した。併し江戸幕府はこれを斥け、その後樺太の境界北緯五十度説を主張し、再度使を送つて談判せしめたが、議遂にまこまらず、兩國人の雜居に委すことゝなつてゐた。然るにロシアはその後沿海州一帯を北京條約によつて清國より割取し、益々樺太の經營を進めたので、明治三年我が政府も樺太開拓使を置いて北海道開拓使次官黒田清隆に兼任せしめたが、清隆は樺太は寒冷不毛で地利に乏しい故、寧ろこれを棄て、北海道の經營に力を用ゐるのが利益であること主張するに至つたので、政府もその議を採用し、八年ロシア駐劄全權公使榎本武揚をして彼と交渉せしめ、樺太全島をロシアに譲り、千島全部を確實に我が領土と決定した。

千島樺太の
交換

従來の琉球
の地位

我が政府の
處置

琉球舊王城

清國の抗議

參考　ロシアの亞細亞經營を参照せよ。

琉球及び小笠原島の領有確定　琉球は薩摩藩に屬してゐた



が、清國よりも屬國の待遇を受けて居り、江戸時代の末にはフランス・オランダ及びアメリカ合衆國の三國が獨立國と認めて通商條約を結んで居た。我が政府は、明治四年廢藩置縣の際これを鹿兒島縣に屬せしめ、翌五年國王尙泰を琉球藩主として華族に列し、諸外國との條約は外務省に引継ぎ、十二年藩を廢して沖繩縣とした。然るに清國は我が國の處置に異議を唱へたので、政府は種々古來の證據によつてこれを論駁し、交渉を重ねてゐた所に、偶々東洋漫遊中のアメリカ合衆國前大統領グランドが

Grand

小笠原島の
發見

領有の確定

調停に立つて紛議を解決し、我が領土たることが確實にされた。又小笠原島は文祿二年小笠原貞頼が發見した所であるが、鎖國以來殆んど放置されて居り、幕末にはイギリス人の來航を見、次いでペリーが野炭所を設けてイギリス・アメリカ合衆國共にその領有を主張してゐた。そこで明治維新の後、外務卿副島種臣がその我が領土なることを主張し、その後大隈重信もこの説をつぎ、明治十三年東京府に編入することゝなつたので、我が領土たることが確認せられた。

第三十二章 西洋文化の採用 世相の變遷

文明開化の
風潮

西洋文化の採用 五箇條の御誓文によつて開國進取の大方針が確立せられ、西洋諸國との交通が盛になるや、上下擧つて西洋文物の輸入に努むるやうになり、各種の文化、百般の社會經濟

學問思想の
傾向

施設、政治制度等、彼の風に倣ふもの頗る多く、當時この風潮を一般に文明開化と稱してゐた。かくて從來永く我が國學問の中心軸をなしてゐた漢學に代つて、歐米諸國の學問が最も勢力を占むるに至り、書籍の翻譯、歐米人教師の招聘、我が國人の歐米視察



福澤諭吉

留學等が官民の間に頻りに流行し、江戸時代以來洋學の先驅となつた蘭學が廢れてイギリス・アメリカ流の實利思想、フランス流の自由思想を中心とする政治・經濟等の諸學問が最も歡迎せられ、ついでドイツ流の國家思想も盛になつて來た。福澤諭吉・新島襄・中江兆民・加藤弘之等の諸學者は何れもその先驅をなすものである。而して西洋文化の普及を助けたものは印刷術の進歩である。活版印刷は既に江戸時代初期に一時盛に行は

印刷の進歩

新聞雑誌の
発行

初期の新聞
萬國新聞紙

宗教・藝術

れたが程なく廢れて、一般に整版印刷が行はれてゐた。然るに江戸時代の末から、長崎の本木昌造が西洋印刷術の研究に力を注ぎ、明治二年遂に鉛製活字の製造に成功してこれを出版界に提供するに至つたので、印刷術は急速の進歩を示し、各種文化の普及・發達を盛にし、殊に新聞雑誌の發行に最も著しい影響を與へた。新聞



は明治三年創刊の横濱毎日新聞が始めである。又雑誌は明治六年福澤諭吉等によつて創刊された明六雜誌が維新後に發行された最初の學術雑誌である。その他、明治六年切支丹禁制が撤廢されるや、各派の基督教宣教師は公然渡來して布教に努む

新島襄

開成學校



美術工藝・娛樂等も靡然として西洋風に向ふ有様であつた。

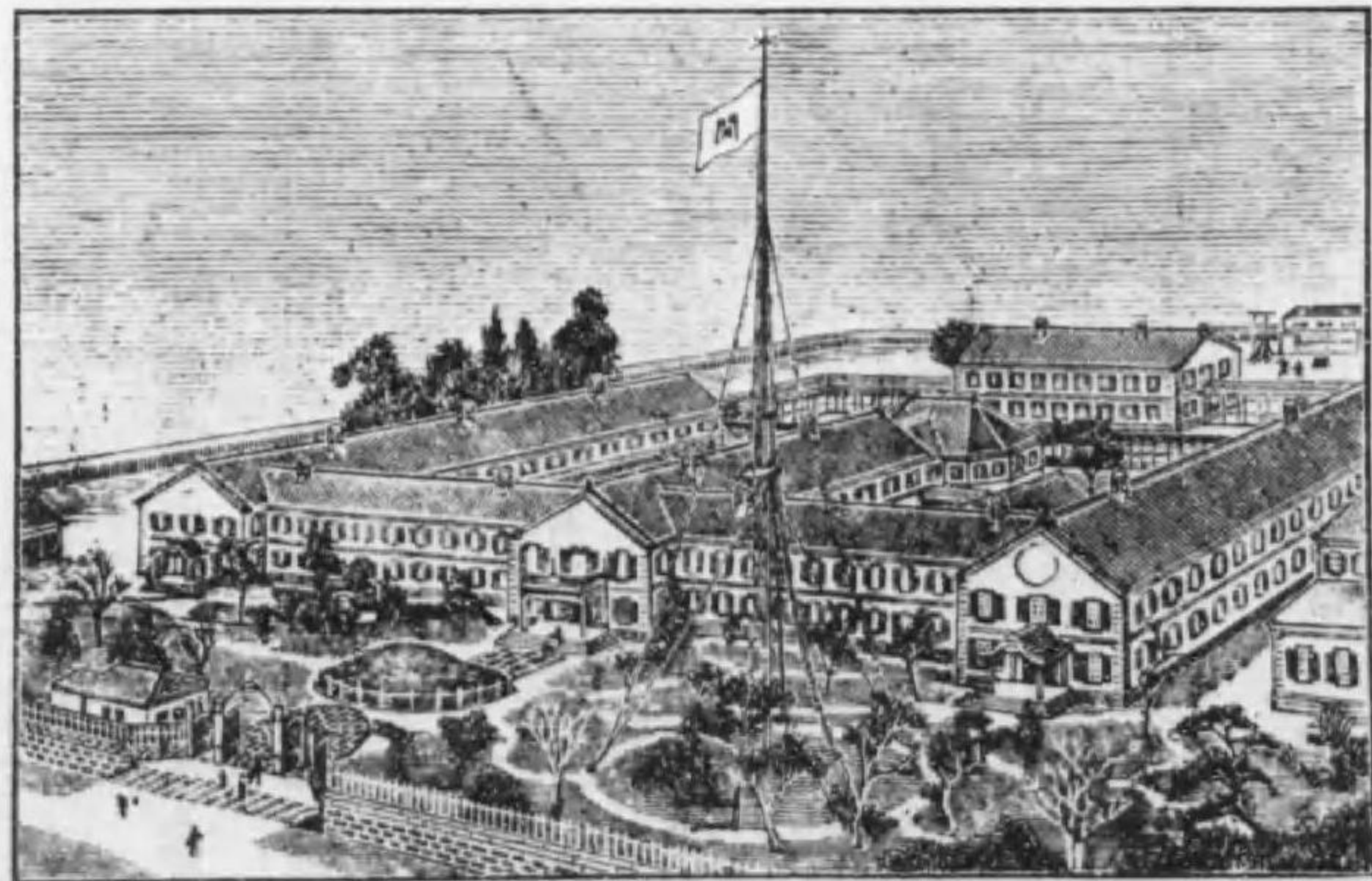
參考 大化改新に於ける隋唐の影響を明
治維新に於ける西洋の影響を比較考察せよ。
以下諸制度の革新に就いても同じ。

諸制度の革新 世界の大勢に順

應して國力の發展を圖るために、各種制度の改革も殆ど悉く西

る。共に西洋文化の移入を圖り、新島襄の如く我が國人で熱心

にその弘
布に努む
るものも
現はれ、各
種の文學



洋諸國の風が模範とせられた。教育に於ては、政府は夙に江戸幕府の昌平坂學問所を教育行政の府としてゐたが、明治四年文部省を設けてこれに代へ開成所醫學所で一般洋學及び西洋醫學を授けてゐたが、明治十年合併して東京大學とし、西洋諸國の



大村益次郎

輸入に努めしめた。又初めて文部卿となつた大木喬任は、明治五年主としてフランスの制度に基いて學制を定め、義務教育制度の基礎を確立して國民に不學の人なきを期した。兵制に就ては兵部大輔大村益次郎が早くからその改革に努めてゐたが、明治三年洋行から歸つた山縣有朋、西郷從道等がその志をつぎ、陸軍はフランス、海軍はイギリスに範をこつて改革の歩を進め、薩長土三藩の兵を召して御親兵と稱し、東京仙臺大阪熊本に



鎮臺を置き、五年には山縣有朋が陸軍卿、勝安芳が海軍卿に任ぜられた。ついで廣島名古屋にも鎮臺を増置し、六年に至り徴兵令を發布して全國の壯丁は均しく兵役の義務を有する事と定められ、國民皆兵の古制に復し、益々洋式兵法の研究を進めて司法制度は明治三年に大寶律及び明清の法律に基いて新律綱領が定められたが、五年、江藤新平が司法卿となるや大いにその革正をはかり、裁判を行政官の手より分離して司法權を獨立せしめ、別に法典の編纂に力を盡くした。その結果、六年には改定律例が發布せられたが、これ等は多く歐米

税制の改革

諸國の制度を參酌して定められたものである。又王政復古の後政府の財政は舊幕府直轄地のみの租税を基礎としてゐた、め頗る困窮を極め、太政官より紙幣を發行して一時の急を救つ



てゐたが、版籍奉還廢藩置縣の後、全國一様に租税を課すこととなり、明治五年、從來各藩各様であつた税種を改廢統一して悉く金納に改め、地價を定めて地租の基本とし、財政の統一安定をはかつた。尙江戸時代の貨幣は形狀單位が種々で品位も低下してゐたので、政府は主としてイギリス、アメリカ合衆國等の制度を參考して形狀を圓形、單位を圓として十進法によることとし、明治四年大阪に造幣廠を設けて新貨幣の

太政官札

幣制の確立

通信の進歩

新橋驛

鐵道の敷設

岩崎彌太郎

汽船の發達

鑄造を始めた。通信交通制度も歐米の風に倣つて着々改正せられ、明治四年前島密の努力によつて江戸時代の飛脚を廢し、郵便の制度を立て、東海道より漸次全國に及ぼし、明治十年には早くも萬國郵便聯合に加入するに至り、電信も明治三年以來次第に發達して、十二年には萬國電信條約に加はることとなつた。



又現今陸上交

通の中樞をなす鐵道は、明治五年政府によつて東京・横濱間に敷設されたのを嚆矢として次第に發達し、海上交通は岩崎彌太郎等の努力により次第に

